

●「安藝文学」(広島県) 84号

「支倉常長の足跡をたずねて」(藤井翠)は、評伝と紀行文がうまく融合した作品で、沈着な筆致が手堅い実証性を醸し出していて、支倉常長の偉業が現代によく伝わってくる秀作になっている。勝海舟が幕末に蒸気船の咸臨丸で太平洋を横断した快挙よりすでに二五〇年も前に、帆船で太平洋を横断したばかりか、ヨーロッパにまで行き、スペイン、パチカンを訪れてスペイン国王やローマ法王に謁見するという壮挙をこの一行は成し遂げている。これはマゼランの史上初めての世界一周から一〇〇年も経ってはず現代でも驚嘆に値する大航海で、当時としては奇跡に近い偉業だろう。この作品はそれがどのように行なわれたかを様々な角度から鮮やかに浮かび上がらせている。人間への照射も怠りなく進める落ち着いた筆は、学識に裏付けられた深い陰影を伴って、自然で快い流れをなしている。

紀行文の肌合いも備えているのは、仙台博物館で開催された「伊達政宗の夢・慶長遣欧使節と南蛮文化展」を訪れ、その旅の流れに沿って、支倉常長のゆかりのいくつかの地を実地に巡っていることによる。歩行の無理のない進行感



84号

題を象徴しているだろう。筆者の個性はその問題を孕みつつ、むしろ心の不安を描くことに傾いているが、よく見るとこの不安は現代社会に広く根を張る不安に拡大でき、大きな組織社会に必然的にはびこる病巣につながっているとも言える。この普遍性を匂わせる不安描出に成功しているのは、筆者の偏執的なこだわりで、その固定的な眼差しが一種の拡大鏡の作用を生み出して、筆者の個性的な作品群を成立させている。反面では融通のきかなさという不自由さを持ち合わせている筆致だが、この姿勢を貫くことの中に、この筆者は現代社会のある不思議な病巣を暗喩的に見せてくれる作家でもある。もどかしさを払拭できない点で筆優秀作に留まるが、自覚を深めることと、よい大きな

は、二〇一二年三月の津波の被害にも触れて、それを当時の地震・津波に重ねて東北という地の臨場感をも出している。普通はなかなかここまで重ねられないが、自然に運ばれるこの厚みは日頃から相当修練を重ねていないと出て来ない文章力で、これをさりげなくやるところにこの筆者の芸の深さが感じられる。

先導したソテロの最期や船のパウティスタ号の末路もよく捉えて全体によくできた評伝になっていて充実しているが、最後に遠藤周作の「侍」を持って来たのは、惜しい味消しだった。支倉常長と現代の作家遠藤周作とは人間の格が違うし、遠藤の歴史小説には甘さが目立つ。「侍」の枠を超えていなければ、そのような壮挙は成し遂げられなかったにちがいない。遠藤周作に頼らない独自の称讃と評価で結んでほしかった。

「争点」(中山孝太郎)は、ユニークな作品で、この筆者の作風を貫いている。土地の測量のごくわずかな誤りをずっと引き留めている心の不安を描いたものだが、こういう現実は確かにあるだろうし、大問題をかかえたままその危うさの上に日常が乗り続けている状況は現代至る所に見られる普遍性を有しているだろう。巨大マンシヨンの杭打ちの過失や、鉄筋の不足や基礎工事の不備など、現代社会の表に現れている問題だけでも枚挙に暇がない。ここにあるのは、数字の問題だけだが、本質的にはもつと大きい問

素材に逢着することでおもしろい作品が産み出される可能性もある。このまま作風を一貫してもらいたい。

安藝文学の今号は充実していて、よい作品が多いが、特に注目したのは武田純子氏の「沈む町」である。「朝、障子を開けたら、世界が消えていた」というやや過激に始まるフレッシュな作品は、引きこもりの「私」の日常を霧に深く覆われた町として表現し、他人との疎通の乏しさを視界の不明瞭さによく象徴して、快適な文章リズムで展開させている。それまで気づかなかった木の存在を目にして、「ふうん、霧は見えていたものを見えなくするだけでなく、見えていなかったものを見えるようにもしてくるんだ」という逆の作用を書くところなど、見方が鋭く、この大胆な視点が、切れのいい明るい文体と相俟って、ステールの大きい虚構世界を立ち上げた。この鮮やかに創造された手法は、引きこもりや鬱病や対人違和など現代社会の病を浮かび上がらせるのにたいへん有効で、しばらくはこの方法でさまざまな展開ができる大きな可能性を有している。作家にとって重要なことは、小説というフィクションの「アルキメデスの点」を得ることで、現代社会という怪物を持ち上げるための支点をどうやって得るかが難題になるのだが、筆者の大胆な視点はこれを得ることに成功している。この方法をうまく生かし、積極的な方向に動かして、この小説世界を深め、進めていってほしい。優秀作である。

「神石高原」(岩崎清一郎)は、戦中の子供時代を描いた作品で、文章のみずみずしさが光る。兵隊が出て来たり、ラジオやのらくろ二等兵が出て来たりするが、それらが古い時代を感じさせずに、同時代性をもって生動している。筆者の年齢を考えると、なぜこのような清新な世界が書けるのか、またなぜいまこの世界を書かなければならないのか、問いかけたくなるが、逆にこの牧歌的な世界への回帰が、戦争と戦後の激動の世界への問いかけとなっており、一生を振り返るときの基盤をなしていることを知らされる。ここへ童心を蘇らせて立ち返ることが、その後の戦争とそれに続く大きな虚偽の世界を暴くことになり、間接的にそれが懐疑と抗議になっている。末尾の焦点の結び方に暖味が残る。準優秀作。

●「渤海」(富山県) 71号

「砂の本―花野―」(山口馨)は、洒落たつくり、洒落た文章はさすがにうまく、小粋な料理のように味よく読ませるのだが、流れやきらめきのほうに筆の重点がかかり過ぎていて、小説そのものの味が思ったほど深まっていない。作品の中の「遠目には道などなさそうでも歩いて行けるのが花野だよ」「花野の行き当るところは」「あだし野」というふうな箇所は、気の利いた華が開いていて、あてやかな趣があるものの、人間の苦難の体験にあたる部分が、アタセサリーのような装飾品の軽さを帯びるのが惜しまれる。

まで打ち消して魅かれていく、不思議な親和力を描く筆運びは、どこまでも硬質で、氷の花のような美しさを感じさせる。裏切られる側の女性の猥褻的な像もひたむきな輪郭を得て冴えている。修道女という立場上、恋愛を受け止めることのできない状況のなかで、しかし逆に燃え上がるのが人間の姿であり、その行方の危うさも燃焼を激しくしている宿命の起爆力を感じさせる。欲を言えば、ベトナムの修道女から胸にフォークを突き立てられた事件が、見知らぬ土地で神の意志の下に生きる修道女の禁欲の激しさと内部の暴風に繋がっていることへの説明がもう少し欲しい気もあるものの、一筋の純粹さは確かに光芒を放っている。優秀作としたい。

「廃仏毀釈異聞―林大伴覚書―」(佐多玲)はよく調べた労作ではある。これだけの史実を資料を漁って現代の中に蘇らせ、当時の日本に吹き荒れた廃仏毀釈運動の錯誤を掘り起こした功績は大きい。丹念に拾い上げた史実の価値は高いものの、では小説として人間が動いているかという点、やや心もとない。前半部で、家老の一人の言葉に乗せられて宗家の金沢へ仲間といっしょに訴えに行ってしまうところも普通に読み物として見れば軽筆のそしりを免れない。そして維新前のその事件と、後の廃仏毀釈の実行責任者としての行動がどう因果関係があるのか、それが希薄な

まほろば賞の受賞以後、さらにその水準を突き破ったの深まりはまだ達成されていないが、研鑽熱心な筆者のことなので、いつか突き破ってさらなる真の花を開かせてくれることを期待している。作家にとつて壁を越えるのは時間がかかることではあるが、ひたすらそれを待ち続けるのも編集する側の一つの態度だろう。

「北の岬」(崎田みさき)は、一筋の透徹した思いの光る作品で、ヨーロッパから帰る船上で芽生えた恋の行方を追って、北海道の果てまで情熱をかける恋愛の姿を描いている。修道女の布教と修行の禁欲的な生き方に、純粹な美しさを覚えて魅かれていく主人公の一念な思いが、ある孤独感の中に燃え上がっていく。恩人の恋人との結婚の約束



点も小説の根を弱くしている。読後、結局大きな言い訳にすぎないような印象を強くするのも、人間の生死を賭けた行動の根を洗うことの不十分さに起因しているように思う。労作として史実説明は価値が高いだけに、人物の展開力の乏しさが惜しまれる。

●「きなり」(愛知県) 81号

新代表に代わつての最初の号でその継続を喜ぶと同時に、先代のこれまでの御苦労を労い、敬意を表したい。

「埋める」(西垣みゆき)は、新領域への挑戦意欲が漲った作品である。高速道路の予定地に自分が持っている山林がかり、売却を求められるところから物語は始まるが、この土地には秘密があり、前の男を現夫とともに殺害して埋めた過去がある。建設中にそれを掘り起こされる不安に苛まれるサスペンス仕立ての小説になっているものの、ここまでやる必要があつたかどうかは訝しい。むしろ前夫は主人公とは関係なく不遇の死を遂げさせるほうが良心の痛みは深くなると思われる。これまでになかったストーリーの大胆さは評価するが、やりすぎの観がある。もつと事件を抑制して、現実の浮き沈みの底の内面の葛藤や後悔をクローズアップさせたほうが、筆者の実直な筆は生きただろう。準優秀作。

この号はエッセイの特集を組んでいて「耳」をテーマに九人の同人が書き寄せている。それぞれ個性があるが、石



川好子氏の「生活の音」が出色で、筆者の近況が鮮やかに
出ているのと同時に、老齢で浮かび上がる耳の世界が逆説
的な活気を帯びて迫ってくる。健筆羅如を感じた。

「土を守る」(藤吉佐与子)は、小説としての立ち姿はむ
しろ鈍いが、農村と農家の現状を突きつけている問題性とし
ては強烈な提起力がある。これをどう評価するかはむず
かしい。小説作品として未熟であり難が多いということ
簡単に片付けてしまうには、扱われている問題があまりに
大きいからである。ここには日本の根幹に触れる重要な問
題提起がある。輸入増やTPPの受け入れによって農村の
生活がそのままではいつそう成り立たなくなる深刻な経済
状況があると同時に、その必然的な結果として農地の放棄
や荒廃が進み、土砂災害や洪水が増えて農地山林を含む国

小説「トッカータとフーガ」でまほろば賞
きらめきと懐かしさを追って



象徴的に流れる。へ身体を うつろとした森を満た
引き裂き粉末にして深淵に す静寂の中の、光。「虚無
ちりばめる」ように。 の美しさにひかれる」とい
執筆とフランスと音楽 う。無心で求めるその先に、
は、いつも三つともえにあ 詩を呼び起す「きらめき
る。10月に刊行した第3詩 と懐かしさがあるのだと。
集「回帰の冒険作品」森で 福岡市東区在住、77歳。
は、「静寂の旋律」を紡ぐ。 (平原奈央子)

文芸同人誌「季刊午前」
引身に掲載した小説「トッ
カータとフーガ」が、全国
同人雑誌振興会と文芸誌
「文芸思潮」が選ぶ「第9
回 全国同人雑誌優秀賞
・まほろば賞」に選ばれた。
「今年はこの賞に選ばれるの
と謙遜するが、作品は発表
のたび注目を集める。
九州大で物理学を専攻
し、家業の医療機器会社を
継いだ。学生時代は同人誌
「九大文学」の中心メンバ
ーで、会社経営を経て60歳
で発表した第一詩集「花の
ストイック」で福岡市文学
賞を受賞。同人誌「海」詩
妻の生きざまに深く関わり

と賞状「胡堂」などに参
加し、敬愛する詩人ランボ
ーの生涯を追う評伝「ロッ
シュ村幻影 仮説 アルチ
ユール・ランボー」のほ
か、30年来通うフランスと
その文学へのオマージュも
発表。7月にはフランス政
府主催の「フランス語で俳
句」コンクールでも入賞し
た。

文化短信

▶同級芸術座の公演「イス
ラ! イスラ! イスラ!」
12月3、4日、熊本市中心
区の早川倉庫。劇団は、ベル

まほろば賞
スポンサー募集

まほろば賞を支援して下
さるスポンサーを募集し
ています。賞金・記念品
などご提供していただき
ましたら幸いです。
アジア文化社五十嵐勉
までご連絡下さい。

TEL03-5706-7847
FAX03-5706-7848
郵便振替 00140-9-770331
名義アジア文化社

文化
ファクス 092(711)6243
メール bunka@nishinippon.co.jp

土そのものが荒れ果てて行く厳しい悪循環を、小説の姿を
借りて的確に訴えている。逆に言えばこういう小説があっ
てもよく、むしろ問題をわかりやすく、親近感を持つて提
示している点では大きな効果を発揮しているとも言える。
日本人全体が考えなければならぬ問題が確かにここにあり、
その点ではたたくさんの人に読んでほしい作品である。
小説としての衝撃度よりも、問題としての衝撃度があり
に大きい。「野菜作りは土作り、土を生かさなければ、良
い作物は出来ない」「落ち葉も、稲藁も、草も、虫も、動
物や人さえも、土は飲み込み同化させる。ふと、そんな命
が土となつていのだと気付いた時、俺はその命を大切に、
作物を育てる事で生かさなければと思つたのだ。作物には
それらの命が入っている」という考えには、現代の日本人
が忘れていた重要な思想が含まれている。これらの意味深
い言葉や農村の現状は、実際に農業に携わっていないと出
て来ないものだと思うが、技巧の稚拙さを超えて、訴
える力の大きさを感ずる異色の作品である。これを巻頭に
持つてきた編集力も賞讃すべきだろう。優秀作というより
も問題作である。

今回の優秀作「沈む町」(武田純子)「安藝文学」84号)
「北の鯉」(崎田みさき)「潮海」71号)
問題作「土を守る」(藤吉佐与子)「文芸きなり」81号)
(全国同人雑誌振興会)五十嵐勉

●「狐火」(埼玉県) 20号

今号も高いレベルの作品が多く、わかりやすい文体の中に高い象徴性を載してどれも興行きに味わいがある。今号ではやはり長さや構えにおいて特に「ゲッコウジャボニコス」(澤つむり)が頭一つ出ている、力量を示していた。男が去った空白の寂しい心理をヤモリに託して怪妙に描き、編集者としての仕事の日々の危うさを、そのヤモリとの交感を通して乗り切る筆の運びは、卓越している。幼い時に月光を見ながらやがて死んだ杜夫という少年の面影とヤモリとを重ねるところが味長く、筆者の手腕の高さを示している。死と追憶が夜の色彩の中で日々の煩瑣な仕事の移ろいを浮かび上がらせるトーンがそこはかとなく染み通ってくる。前作とはまったく趣向で、これはこれなりの世界を鮮やかに描出できている技量は注目していい優秀作である。

●「南風」(福岡県) 38号

九州指折りの同人誌はあいかわらず意気盛んで、どれも手堅い完成度を見せている。「数え目」(和田信子)は幼馴染みの「直子」の死によってたぐり寄せられる主人公の

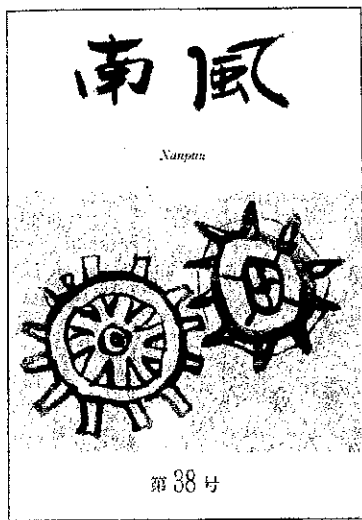
その死を引き受け、生きる力に変えていくか、そこに文学の一つの行儀があると思う。そういう意味でどこかに重要なものを見落としている物足りなさが残る。準備秀作。

「海辺の喫茶店」(山口道子)も、気の利いた瀟灑な造りで、喫茶店そのものにも魅力がある。会話が弾みがあって生きているが、「紗希」という少女の学校問題に終始しているのは、雰囲気倒れで、文学にはなっていない。快い文章は単なるそよ風や海風でしかない。

「心中異聞/春宵日本橋」(宮脇永子)は、「南風」では珍しく時代ものだが、江戸時代を生かしてはいない。奉公に出る「お凜」のかわいらしさはよく出ているものの、事故にすぎない死の顛末がなぜ心中という形になるのか、読者を納得させてはくれない。小説の題材とするには足りないもので、もつと材料の吟味をしてほしい。

「遥おばさんの丘の家」(紺野夏子)は「僕」の語りで話が進められていく手法は、近づきやすい利点も確かにある。しかし話の軸が母親のアルツハイマーの進行に移っていくとき、逆に問題の中心に迫っていけない障壁ができてしまう。記憶が失われていく恐怖や過去の破壊の深刻さは、むしろ内側から書いた方が、リアリティが出せるだろう。未成熟な青年の語りから窺う病のありようは、青年に語らせれば語らせるほど現実から遠のいてしまう。また、それゆえか、「僕」にリアリティがなく、捲えものの狂言回し人

愚春期の足取りが陰影濃く浮かび上がって、屈折感を醸している。主人公とは対照的に貧乏くじを引き続けるような直子の運命の転落を辿りつつ、一人の人間の宿命の影を浮かび上がらせている。受験というありきたりな製機が運命の糸になるその軌跡の辿り方は、一面からは正しいし、それが避けられない人生模様であることは否定できないが、そういう人生にどこか光や意味や意義を見出すことも文学の積極的な行為であることも否定できないだろう。「ついでにない」人生を剃出することも文学の刃であるなら、「ついでにない」そこになにか輝きを添える刃もあっていい。気がつけば周りはそういう「ついでにない」死だらけだ。自分もそうであるかもしれない。皆無意味の流壺に落ちていくことに変わりはない。それにどういふ目鼻をつけ、



形のように見える。また「遥おばさん」もこの小説においてどういう役割を担っているのか、よく伝わってこない。社会から一歩退いている存在が、母がアルツハイマーになつてより身近になつたという程度では、説得力がない。タイトルに丘の家を持つてきているものの、「丘の上の家」の実感も乏しい。この経験をよく研究して、次の創作に生かしてほしい。

●「全作家」(東京都) 101号

「全作家」も100号を超え、一段と重みを増した。この継続には敬意と祝意を表したい。

今号もまた嶋津治夫氏の作品に注目した。「馬乗り馬頭観音の里」は前作の「地の来歴」を受けた話で、北総での馬の歴史を「馬乗り馬頭観音」の信仰とその遺跡に辿っていく話だが、土地の歴史をしっかりと捉えていく眼差しは確かで、歴史の裏に沈む人と大地の実相を、揺るぎない眼で浮かびあがらせている。江戸時代の牧場の風景は確かに立ち上がった。欲を言えば、馬乗り馬頭観音に込められた造形の意志を、馬への愛情や旅の無事を祈る信仰の深さにまで及ぶ掘削の深度があればもつとよかった。これに込められた思いまでもが鮮やかに蘇ってくれば、現代に生き返る文学の蘇生の力がより発揮されたかもしれない。足場の確かさが確認できた意味でも優秀作としたい。

●「海峽」(愛媛県) 33号

「海峡」は、地味に創作活動を続けている静かな佇まいの誌だが、その実直な作品群の中にキラリと光る上質な文章の輝きが潜んでいる。今号では特に文章の結晶度に硬質な華を感じたのは多嶋海彦氏の「花ことば」である。この隙のない文章は傑出して、よく選ばれた言葉の緊密さは快い琥珀の酔いを醸している。寝たきりの父親を介護している娘の秋子と、実家を訪れた主人公の次郎との男女の感情を軸にストーリーは流れていくが、すでに工事故で亡くなっている兄の影が残る以上に、「花ことば」に象徴される男女の引き合いの心理が交差する。この構造にアクトセメントを添えているのは、病人の父親の髭を剃る秋子の剃刀で、秋子の実家の家業が研ぎ師だったというのも、鋭利な危うさを曳いて、罪の影を落としていく。結局二人は結ばれるが、熟成した手練を感じさせる完成度の高い作品としてそのコクは名酒の味わいを備えている。優秀作。

注目を言えば、父親の髭を剃る剃刀は、自ら「殺してくれ」という父親の命をいつでも秋子が奪えるものであることをほのめかしているのだが、それがストーリー全体にどうかかわるのか、たんに娘といっしょになる罪を引き受けるという象徴なのか、はつきりしないもどかしさがある。小説全体に鋭利さを持たせながら、なお判然としない曖昧さを残している点を、味と見るか、足りない点と見るか、私は後者を取る。その意味では冒頭の茂吉の歌「めんどり

列車内での時間に回想を重ねて、飛びゆく風景とともに過去を追う構成は、映像的で鮮やかにできている。車窓の風景の擦過が、死んだものへの追憶となって想起されてくる底に、深い哀しみが溢れ流れている。その旋律のなかで筆者は「先に逝くものが勝ちではないのか。こんなにかなしみをおいていくのだから」と呟く。たしかに人はみな死のなかへ飛び過ぎ、流れ去っていく。人生の行程の本質を突いたこの車窓風景は、心に深く残る。もう蘇生することのない夫の病室を「深海ホテル」と呼び、影だけの夫に会いに行くその旅を「『深海ホテル』に行く」とするその設定に、海の底へ沈んでいく深い色が宿っている。しかもこれが、筆者自身が数ヶ月後に死亡するほぼ遺作として書いていることを思うと、いっそうこの言葉と流れが悲愴な色合いで浮かび上がってくる。追悼を寄せる作品になってしまった。人物が複雑で込み入って感じられるところが惜しまれる。準備秀作。冥福を祈りたい。

「物狂いの石」（草原克芳）は、かなり長い力作で、素材はおもしろい。將軍を暗殺しようとした吊り天井の仕掛けを変わり者の老人が墨守しているのだが、彼を中心に迷惑の渦が巻いている常識人の群像がコミカルに描かれている。吊り天井の恐怖には、二つが象徴されている。一つは権力や体制を一気に覆す転覆と謀殺。もう一つは仕掛けられた物が上からいつ落ちてくるかという、天井崩落被害の

ら砂浴びめたれひっそりと剃刀研ぎは過ぎ行きにけり」は不要と見る。「花ことば」も十全に生きているとは言いがたい。また「……」の多用も、筆者の技量からしても過多で、俳句の達人らしからぬ処理である。

「恩師」（藤井絳子）は、介護施設に来た問題患者が、小学校のときの恩師だったという設定で、当時虐められた様々な苦い思い出と現在の逆の立場が交錯する。この設定とストーリーはおもしろいが、できすぎのために、逆に主人公の行動や考えを不自由にできてしまっている。こういう設定では、復讐やはらいせの立場を取るか、寛容の精神ですべてを許して仏様になるか、どちらかに偏らざるをえず、どこに着地点を持つてくるのかは至難の業である。筆者の熟成した筆致がうまく一種の諦念のような色を塗って終りにしているが、ひじょうにむずかしい題材である。筆者の実直な筆は、こういう材料を扱うには向いていない。もっと適切な材料を得たとき、飛躍するだろう。期待したい。

●「カブリチオ」（東京）43号
谷口葉子氏の「深海ホテルへ」は、書き振りの軽妙さの底になにか深い哀しさが流れている作品である。登場してくる人物がみな死んでいく姿で描かれている。高校時代の親しい友人並利子も、母親の書道家あいも、夫の悠平も、死へ流れ込んでいく存在として動いている。延命措置でかろうじてもっている夫の悠平に会いに遠距離を乗っていく



恐怖である。この二つは、現在の状況の中で、意外に敷衍的な意味と実感を呼んで拡大していく。3・11を経験した現代日本において、いつまた起こるかもしれない地震の恐怖や、原子力発電所という首都破壊の不安と繋がって、奇妙なりアリテイを匂わせてくる。核戦争の恐怖も現代の吊り天井の構造とも言える。この小説が、そこまでを自覚し、テーマを明確に掴んで書いているかという点に疑問だ。もし掴んでいるとしたらもつとちがった結末になっていただろうと推測するが、たまたま現代日本の不安に直結する素材を得ているということでは、可能性には期待できる。筆者の建築構造的なテーマの採集傾向は、この方向の可能性を示している。この領域を目指してほしい。この作品のままでは、周囲の踊りすぎる群像に中心が行って

しまつて、肝心の現代の危うさの方への重心が欠けている。みんなではしゃいでいるような余計な部分が多すぎる。関東同人雑誌交流会では、最高点を獲得した作品だけに、今後の改良とこのテーマの拡大発展を大いに期待したい。直すことを含めての優秀作。

●「街道」(東京都) 26号

関東同人雑誌交流会の合評会では「埠頭岸壁館」(中嶋英二)も好評だった。「岸壁館」という海辺のマンションで一人暮らしをエンジョイしている主人公の「友一」の部屋に「えり」が押し掛けてきて同棲が始まる。湿り気のない現代風交錯感のつきあいのなかで、結婚をしないままの暮らしが続いていくが、やがて中絶などを契機にひび割



街道

第16号 2015.10.25

芸芸同人誌

れてくる。男女の乖離の言葉が乾いたトーンを奏でるところに、筆者の個性と魅力が溢れ流れている。こうした現代の男女の乾いた音色が岸壁という海のそばでの孤立感に重なるうまさば筆者の技量だろう。失脚したえりと入れ代わるように妹の「亜希子」が近づいて来て、新しい男女関係を追る。男女の結びつきやつながりの浮薄でたよりないはかなさを匂わせつつまたさらに結びついていく交錯の移り身の速さに現代の男女の浮遊性が浮き出ている。筆者の男女の描き方には魅力があり、一つの領域を形作っていける個性がある。次作にさらに期待して準備優秀作。

●「作家」(愛知県) 86号

「作家」は永く小谷剛氏が主宰されていた伝統同人誌。小谷氏が亡くなられてリニューアルされてからでも86号が続く重みはひときわ目立つ。

今号には「送り火の夜」(津田一孝)という優秀作があった。山の中の廃村に住んでいる「私」は、大学時代の友人のお見舞いに町へ降りていき、死に瀕している友人の上司への恨みを聞いてやる。「死んでも死にきれない」深い恨みに耳を傾けるが、そのあと大学時代の親切にしてくれた下宿の娘のその後の不幸な死を聞いて、彼女の墓参りに行く。そこで若い娘に出逢い、大文字焼きを思わせる送り火の祭りにいっしょに行く。娘はやがて幻のように消えるが、墓にいた僧がそれが下宿の娘の子で霊に過ぎず、やは

り不幸な死を遂げた事実を告げる。山へ戻つて来たとき、自身も妻と子を暴漢に殺された彷徨う霊であることを思い出す。この最後の部分はトリッキイでありながらも、冥界という足場をうまく露出させて、結末としての衝撃もあり、自然で効いている。これに沿う妻と子の霊である二羽のサギもい。

この世にはこういう世界がたしかにありそうで、逆の強いリアリティを備えている。この世と冥界とを繋ぐ領域の存在はこういう作品に触れるといつそう追って感じられる。古井由吉の「権」は、冥界を引きずりつつ現実の世界を描いているところに異様な緊迫感があるが、この小説は構造的にはそれより踏み込んだ領域にある。こういう世界を書き続けて行けば、おもしろい開拓ができそうである。また逆の意味で、現代にはこの領域が意外に求められているかもしれない。

●「飛行船」(愛知県) 18号

「変美」(竹内菊世)は、幼馴染みの男女が、四十年を経たためて結ばれる話で、間に挟まれたこの時間と歴史の長さが男女間の愛情をより牧歌的により新鮮に浮かび上がらせるところに妙味がある。男女の思いは年を取らず、逆に長い時間の隔たりを飛び越えて、永遠にやさしく輝き合うものであることを訴えている。田舎の風景、田舎の温かみや人間くささが、蘇って再生する牧歌的な力が結末部

でいっそう濃く押し寄せてくる。こういう時代の飛び越え方は野性味を復活させておもしろい。準備優秀作。

純文学の領域ではないかもしれないが、「校歌物語」

(松田一美)は一つの世界を提出している。徳島県立鳴門高校の校歌を作詞した教師の苦勞を導入に、甲子園での校歌斉唱を絡ませながら、その変遷と伝統を辿る筆致は、興味深い。校歌に込められた思いや苦悶は、たしかに指摘されてみれば深い軌跡があるにちがいない。それを正面に掘り進める書き物は、あまり見られないだけに、単純で不思議な感動がある。この物語の美点は、それを作曲した教師の姿が生きて動き動いている点にある。人間の生き方や心意気、死に瀕して託す思いの強さをしつかりと受け止めて動かしているところに、校歌が生き物であり人の心によって

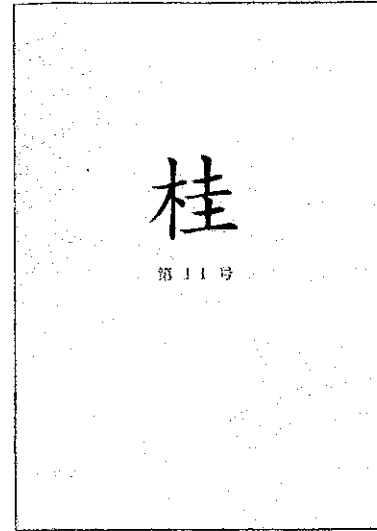
全国同人雑誌振興会



初めて息吹を得るものであることがよく伝わってくる。校歌を情熱によって歌い伝えていく真のつながりを示してくれている点は出色である。たくさんの人に読んでほしい作品で、ポピュラー部門での優秀作である。

●「桂」(東京都) 11号

「空に蛇」(まるこるま) は文体がおもしろい。大胆なイメージの打ち出しによって、不思議な世界に引き込まれていく。詩人の言葉の飛躍をそのまま現実の世界に持つてくる大胆さが生きている。「空に蛇」という派手な題も、その言葉の飛躍の力によって違和感がない。しかもこの作品には、奇妙な明るい破壊感があって、舞い上がったホトムランポールを見上げるような快感がある。地震で終わらせ



桂

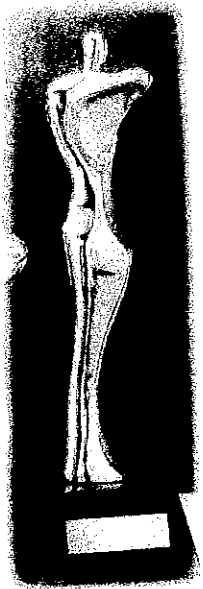
第11号

最後の盛り上がりも効果的だし、この大胆な発想からは無理がない。難を言えば、この文体では長いものは書きにくく、短いものをあれこれ重ねることで造形していくしかない長さの制約を拭えないことだ。しかしむしろ考えず、この発想を大事にしてどんどん作っていくことが肝要だろう。あとのことは集まったものを見て組み合わせていけばいい。大胆な発想は珍重したい。準優秀作。

「桂」は個性ある書き手がたくさんいて、「風の通り抜ける家」もいい。全体に歯切れのいい言葉と着想豊かな文章に活力がある。「風の通り抜ける家」(檜田容子)も、切れ味のいい新鮮な文章でつい引き込まれてしまう吸引力がある。「過去に生きた人達のワンシーンが幾つも残骸のように転がっている」「蜘蛛と幾何学」のような切れ味のいい表現が文章に活気を持たせている。福島でだれも住まなくなつた実家に戻って生活を始めるその片付けの設定も何かを孕んでいて期待させる。この前の作品、この後の作品と読みたくなる魅力がある。これだけでは判断できないものとして見送らざるを得ないが、準優秀作で留めるのが惜しい作品である。

今季は文章に切れのある、フレッシュな感覚の作品が多かった。
優秀作は

- 「ゲッコウジャボニクス」(澤つむり)「狐火」(20号)
- 「馬乗り馬頭観音の里」(嶋津治夫)「全作家」(101号)
- 「花ことば」(多嶋海彦)「海峡」(33号)
- 「物狂いの石」(草原克芳)「カプリチオ」(43号)
- 「送り火の夜」(津田一孝)「季刊作家」(86号)
- これにポピュラー小説部門で
- 「校歌物語」(松田一美)「飛行船」(18号)を付け加えたい。
- 準優秀作は
- 「数え目」(和田信子)「南風」(38号)
- 「深海ホテルへ」(谷口葉子)「カプリチオ」(43号)
- 「埠頭 岸壁館」(中嶋英二)「街道」(26号)
- 「こ褒美」(竹内菊世)「飛行船」(18号)
- 「空に蛇」(まるこるま)「桂」(11号)
- 「風の通り抜ける家」(檜田容子)「桂」(11号)である。



タイのすべてがここに
特価 2000円 (税込/送料共)



文芸思潮文庫 540円 (税込/送料共)

全国同人雑誌振興会

●「星灯」(東京都) 3号

「星灯」は新しい同人誌で、作りも姿勢もフレッシュである。特集に「夏目漱石没後百年」を組んでいたり、小説も若い鋭さを持ったものが目立って華やかだが、この同人誌の真骨頂は、むしろ評論の領域にある。

「草津ハンセン病療養所」(本所豊)、「川西政明」(新・日本文壇史(第四巻))を糺す(金野文彦)、「多分大杉栄氏の論文が悪るかつたのだから」(「早稲田文学」最初の発禁問題の考察)(大和田茂)、「カトリックと社会主義、そしてサルトル——加藤周一論ノート(2)」(北村隆志)は、どれも鋭い批評文で、最近これだけの鋭い筆鋒を見せているものはほとんど見かけないので、注目に値する。

このごろの批評・評論は大手出版社の出版物の太鼓持ちばかりで、曲学阿世・迎合主義の腐ったものが横溢しているが、ここにある評論はそれらとは一線を引いた清新な鋭さを備え、批評が本来果たさなければならぬ役割をしっかりと果たしている。たとえば「川西政明」(新・日本文壇史(第四巻))を糺す」でも、岩波書店発行という権威に嘯

なのは、この世界が必然的に持つ軽さに起因するとしても、筆者が根底でこの現代をどう捉え、どういう方向に行くべきなのか、真の怒りや批判がまだ飽和に達していないせいもあるかもしれない。着想も含めて期待できる書き手であることは確かである。優秀作として推挙したい。

●「南風」(福岡県) 40号

九州指折りの精鋭同人誌は四〇号の記念すべき号となった。これまで高い質を保ちながら継続するには並々ならぬ努力が必要だっただろう。ひたむきな積み重ねに敬意を表したい。

小説作品は、全体に晩年の身辺整理に傾いていて、単調な印象があるが、一作だけ出色の題材を有したものがあつた。「百日の記」(紺野夏子)は、伯母の相続人になつた姪の「私」が、裏山からアフリカ系の人骨が出た騒動を契機に、伯母の秘密に迫るストーリーである。独身を通したはずの伯母には、大きな秘密があつて、朝鮮戦争で脱走した米軍の黒人兵を匿っていたことを聞かされる。そして彼に乱暴され、犯されると同時に、お手伝いによって撲殺される。その死体を裏山の洞穴に隠しておいたのが、六十年を経て発掘されたという興味深い流れを造成している。しかも、妊娠した伯母は、周囲にも内緒でハワイの親戚でその子を産み、親戚の手で育てられることになる。これくらいおもしろい展開になつたほうが、小説らしい。朝鮮戦争

み付いて、その誤りを明確に指摘している。またいつかあらためて取り上げてみたいが、批評本来の基盤を保持した批評家群がここに存在することを胸に銘記しておきたい。

フレッシュな小説の中でも特に今日のパーチャル空間を取り込んで目新しい題材を作品化したのは「サクラサクサク」(たいらいさと)である。中東で死んだ自衛隊の兄を持つ主人公のアルバイトが、インターネットの異性交際サイトのサクラだという設定がおもしろい。交際サイトの裏側も見せてくれて、ひきこもりたちをうまく騙して金を吐き出させる現代の仕組みもよく描けている。不毛感や寂しさが、やがて騙す相手への同情と共感となって収束していくのだが、ここにある現代の仮想世界に寄りかからざるをえない人間の傷みは、よく響いてくる。やや造りが薄手



での脱走兵のことはこれまで読んだことがなく、これに似たことも実際あつただろうと思われる。着想、発想の伸びやかさを買いたい。子供が大きくなって自分の生みの親の家に戻つてそこに滞在したいと思うところなど、血の息づきを感じさせるシーンも生きている。優秀作として推挙したい。

●「私人」(東京都) 90号

「私人」も90号を重ねた長い同人誌で、いつも注目しているが、今号には二つ良い作品があつた。

一つはえひらかんじ氏の「シーランチの住宅」である。これはアメリカに留学して建築の苦学を重ねていた「私」が、ある個性の強い建築家と縁ができ、その厳しい指導の下に独特の家を建てるストーリーだが、六十年代のアメリカの生活風景が借り物でなく一つ一つがリアリティを持って描かれている上に、登場人物が皆個性的でアメリカならではの魅力を感じるところに小説の豊かな膨らみがある。特にパッドという心臓に持病を抱えた強烈な個性の建築家は鮮烈で、第二次大戦中イギリスから爆撃機に乗って出撃し、誤爆で病院を破壊する過ちを犯して、そのトラウマを引き摺る心の負傷者でもある設定が、建築という創造行為と爆撃の破壊行為の矛盾を内包して奥行きを増している。カリフォルニアのシーランチの海岸の風土描写もよく描けている。最後にパッド自身の遺言とも言える手紙もい。読後に何かが残る作品である。この作品にはもう一つ

匂い立つものがある。それは、異人種に対しても良いものは良い、悪いものは悪いと言って、正面からぶつかり合い、それによって真の人間の交わりを作っていく力である。人種の壁を越え、國の壁を越えて真剣な衝突のうちに価値あるものを作り上げていくこの底力こそがアメリカという國の力であり、本質的な自由を備えた平等な場であろう。この小説はそれも見せてくれる点で評価した。優秀作。

もう一つの小説は、「カリガンダキ」(根場至)である。これはネパールのムスタンというヒマラヤの足元で、コメ作りに挑む日本人農業技術者の物語を主軸にしている。富士山より高い地にコメ作りをしようというこのすさまじい挑戦は、それだけでダイナミックなドキュメントになりそうな題材だが、惜しいことに、現地よりも留守を預かる主婦の銃後の守りをメインにしているために、肝心の男の挑戦の世界が浮かび上がってこない。むしろ興味をそそられるのは、高山の異郷の地での農業開発の苦闘なのだが、それはほとんど描かれていず、ほっておかれる家庭の側から愚痴っぽく語られているので、昔聞の実質が届いてこない恨みがある。もしそれを書けば、これは現在の倍以上の長さになるだろう。そちらを期待したい。準備秀作。

●「海峡」(愛媛県) 37号

「海峡」は、地味な創作活動が実を結んでいる。実直な作品群の中で際立つのは、西山慶尚氏の「最後の

する痛烈な批判をも含んでいるが、それを表から出さずに一人の人間の真摯な生き方の中にうまくくみ込んでいくところに、この小説の味わいがあり、深みを添えている。この小説は基点として振り返る位置がいい。適度な時間距離がおぼろさを醸してちょうどいい彩度で全体を美しく浮かび上がらせている。筆者は八十七歳だそうだが、この年齢で初めて書ける何かがある。それもこの小説はよく示している。優秀作である。

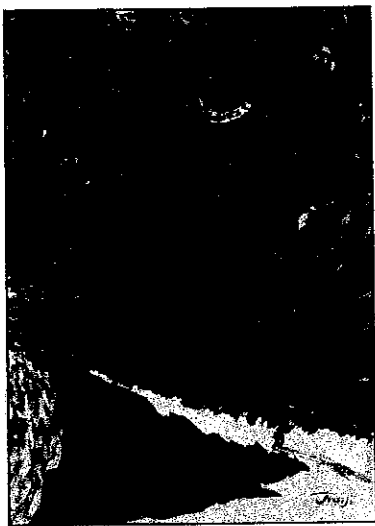
●「パン」(北海道) 20号

「暗い森」(こしはきこう)は、北海道の壊れていく自然の中で、夥しく死んでいく鹿の姿を描きながら、それに連なって荒廃していく人間の状況を重ねて、現代の生の不安を提示している。製薬会社の実験に使われる動物の犠牲数の多さも、抗議力としては確かにインパクトがあり、その罪の意識を重ねて生きてきた父親の死も、現代の相として認得力もある。ただ、もう一つ父親にリアリティが乏しいのは、生き方よりも描き方にすっきりしないものがあるからかもしれない。父親がもっと立ち上がってくると、さらにこの小説は開拓性を鮮明にさせ得ただろう。父親の下で働いていた芽子という女性の方が、足元がおぼつかないだけにリアリティがある。しかしいずれにしてもこの小説が提出している現代の相へのプロテストは、警鐘として大きなものを孕んでおり、それから覚える不安は、もっと

「海軍航空兵」である。一貫して「特攻」で散った人々を追う姿勢とその継続は、一つの到達を感じさせる。物語は杉田慎司という特攻隊の生き残りの一人との出会いから始まるが、飾り気もけれん味もなく淡々と過去の話を紡いでいく筆致は、逆に当時の心情を鮮やかに蘇らせ、空に散った者の姿を彷彿させる。虚空に散華する孤独が迫ってくるのは、その落ち着いた筆を通してこそであり、死地へ赴く者とそれを見送る者の肉声が響いてくる。特攻には日本人の死生観が反映され、濃い感情が渦巻いている。それは現代においても反復して振り返るべき屈折した行動の基盤構造を含んでいる。戦争を振り返ることを前向きな行動に繋げる源泉が潜んでいるとも言える。この作品はそれを感じさせる作品となっている点で、優秀作としたい。

●「カプリチオ」(東京) 45号

関谷雄孝氏の「白く長い橋」は、人生の最晩年を迎えた者が終戦の頃の記憶を辿る設定になっている。当時医学生だった自分が地方に不足していた薬を運ぶアルバイトをする。その送り先に登場するある宗教家の生き方を淡い透明な筆で描き出して、みごとに成功している。天皇を神と信じて欺かれた苦さと対比的に、戦死公報に対して「生きていく」と告げて権力に逆らい、迫害を受ける信仰の貫き、一つの清らかな存在を見ると、人生の不思議な深遠さを味わわせてくれる。穿った捉え方をすれば天皇制に対



大きな広がりや内蔵しているものであることはよくわかる。現代の科学技術を持つグロテスクさと自然の荒廃との連環を、さらに追及していったほしい。雪原を歩くシーンなど描写力の確かさは群を抜いている。優秀作。

●「まなり」(愛知県) 80号

80号は尊い。祝意を表したい。これまでの経緯は石川好子氏の「80号に寄せて」が重みを持っている。最近亡くなられた中部同人界の重鎮清水信氏の最期の批評「『幻野』とびとび」も実に誠実な丁寧な筆で、今更ながら氏の存在の大きさが迫ってくる。氏は天上からも、同人雑誌諸氏の作品を読んでエールを送ってくれるような気がする。心から冥福を祈りたい。

今号の「穴」(西垣みゆき)は、かなり前に書いたもの

作家集団「塊」プロ作家による 作品 添削講評

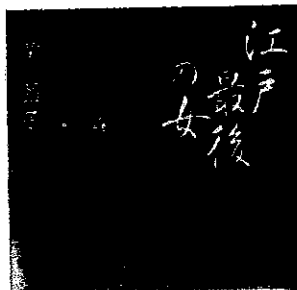
文芸誌新人賞作家があなたの作品を添削・講評の通信指導をします
懇切丁寧・的確な指導であなたの作品をレベルアップ!
八景正大(新潮新人賞)・大高慶博(群像新人長編小説賞)・都築隆広(文学界新人賞)・五十嵐勉(群像新人長編小説賞/インターネット文芸新人賞)
「文芸思潮」の読者には特別料金で指導いたします。

あなたの作品を作家集団「塊」宛にお送り下さい!!

| 詩 | 小説 |
|-------------------|----------------|
| 1篇 A4用紙2枚以内 3000円 | 1篇 20枚まで 7000円 |
| エッセイ | 50枚まで 10000円 |
| 1篇 5枚以内 4000円 | 100枚まで 15000円 |
| 10枚以内 5000円 | 200枚まで 20000円 |

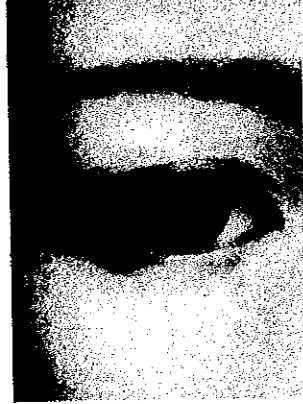
- ご希望の作家と面談指導も可能です。
- ご希望の方には案内所を法付します。お電話・ファックス・葉書などでお問い合わせ下さい。

作家集団「塊」事務局
〒158-0083 東京都世田谷区奥沢 7-15-13
TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848
asiawave@qk9.so-net.ne.jp



「万人の恋人」の謎の魅力に迫る

語り言葉の文芸界の最高峰
読者から愛される小説の傑作
長編の傑作です。



の続編のような印象だが、全体に複雑すぎて、テーマを見えにくくしている。登場人物も、この枚数では多すぎる。母親との同居に加えて、前夫の死と新たな異性との関係が重なり、それに友人や、蕎麦屋の異性関係まで入っていると話が混乱して整理がつきにくい。最後主人公の問題はどこへ行ってしまったのかと、着地を失った観がある。西垣氏の文章のよさは実直な生活感の中に根ざしていたはずで、あまり推理小説のような派手さを追うと、その文章の基盤を失いかねない。周囲の声やあざとい批評に左右されずに、地味でもいいのでじっくりと自分の書きたいものに取り組み姿勢を保持してほしい。一度や二度筆を休めてもいい。ある距離から自分が真に書きたいものを見つめるこ

全国同人雑誌振興会

とも大事だろう。
「沈丁花」(石川好子)は3・11の津波に材を取った小説で、よく組立ててあり、描写は生き生きとして、人物も動いている。個人的なことだが、私も津波三年後に陸前高田を訪れ、その凄惨な跡を見てきたので、いつそこの話を身近に感じる。その点ではよく書けている。ただ、こういう災害を扱う小説には、どこまでその人間の中に入り込めるかが重要になるので、その点では入り込み方が足りないようにも思う。喜怒哀楽、怒りや呪詛など醜いものまで包含して叩きつけてくる激しさもあっていいだろう。短篇に取めるにはもともと限界があるのかもしれないが、負の領域の味が添えられればさらに輝きが増しただろう。書き出しはもつと早くに、陸前高田であることをわからせる必要がある。準優秀作。

- 今期の優秀作は
「白く長い橋」 関谷雄孝 「カブリチオ」45号
「最後の海軍航空兵」 西山慶尚 「海峡」37号
「サクラサクサク」 たいらいさとし 「星灯」3号
「百日の記」 紺野夏子 「南風」40号
「暗い森」 こしばきこう 「ざいん」20号
「シランチの住宅」 えひらかんじ 「私人」90号
いい作品が揃った。(全国同人雑誌振興会/五十嵐勉)

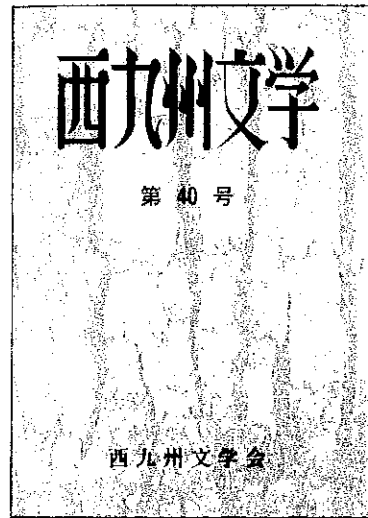
全国同人雑誌評

●「西九州文学」(長崎県) 40号

「西九州文学」は、異才の集団のような観がある。四〇号にしては、息が長い。昭和三十八年創刊だが、一度休刊して再刊していることから、このような息の長さになったことが見える。細い中に強靱さが感じられる。

この号で注目したのが、二作ある。一つは寺井順一氏の「ラメンタービレ」である。この言葉は音楽用語で「哀れに、もつと哀しみを誘うように」という意味らしいが、この題が適切かどうかは別にして、ストーリーはアフリカを舞台にして斬新である。総合商社で働く久保木修平は、アフリカから戻って来ない同じ会社の元恋人を会社の命令でナイジェリアへ連れ戻しに行く。現地の反政府ゲリラの闘争や汚職や民政の混乱などを描かれていて、アフリカの現状は直接の経験があるようなりアリエイがある。彼女を探し出し、昔の仲を回復するようにして彼女の体験を聞き出す。その告白は衝撃的だった。彼女は反政府ゲリラの襲撃に巻き込まれたとき、強姦され、エイズに感染する。その絶望と苦悩の果てに、アフリカに生き、同じ苦悩を背負う人々とともに生きることを選択する。「私はエイズと闘

います。この国の女性や子供たちといっしょに」——この言葉にある問題の提起は、もつと普遍的な訴えを帯び、確かな文学の掘削力に裏付けられていて、人間の根を得ている。最後の「それは、彼が亜優に關して恐れているたった一度の瞬間の、絶望的な静けさに似ていた。」という一行も、重い余韻を残して見事である。こういう安易に結末の形を決めず、むしろ突撃して行くような重厚な終わり方は文学の刃をよく研ぎ澄ませている力量がないとできないもので、昨今ほとんど見ることでできない卓越した言葉の太刀捌きというべきだろう。日本の文学ではお目にかからない「国境なき医師団」の活動も、よく活写している。なによりもアフリカの現実をよく捉えている。惜しいのは、アフリカの人々の顔がよく見えないのと、アフリカの自然の感動は



69

69号

伝わって来ないことだろう。タイトルと併せてその点を減点するとしても、優秀作以上に値する注目作品である。

もう一つの作品「死刑囚」は、逝去された定来文彬氏の追悼掲載作品で、創刊号に発表されたものである。題材が興味深いもので、ぐんぐん引き込まれるし、古さを感じさせない熱気を帯びている。ただ、読み進めて行くうちに、移送車を見送る群衆とのやりとりで、やり過ぎとも思える不自然なものが飛び出して来て、だんだんリアリティが削がれていく。現在では、このような死刑室に運ばれる移送はもしあるとすれば、密かにされるのが普通であるだろうし、一般の人との交わりは厳禁されているはずである。しかしリアリティを欠きながらも最後まで読まされてしまうのは、題材の特異さによってなのであろう。これはだけれどもが興味を覚える法治国家の一面面を表していて、こういうテーマに立ち向かっていく鋭気をこそ評価するべきかもしれない。

●「あべの文学」(大阪府) 26号

「あべの文学」は大阪文学学校の卒業生が中心になっている同人誌で、ここにも大阪文学学校の大きな影響力が窺われる。

「隣人」(河内隆雨) はアパートの人間模様をうまく絡ませて、温かい人情の空間を築き上げた。推薦委員の廣瀬武久氏は九九点の高得点で推挙してきた。壁板が薄く、互い

に生活振りがわかってしまう共生感覚を、逆に交わりを深くする基盤にして、互助のぬくもりを醸し出している。アパートの一室での老夫婦の衰死、子供二人を置いて働きに出る水商売の女性の子育ての困難と放擲、現代の歪みの一面を適切に描きながら、最後はそれを協和音として、うまく結びつけ、よりよい方向へ向かわせることで、心温まるビューマンストーリーに仕立てて上げていく。これはこれで評価されるが、別な視点から予定調和的にハッピーになりすぎるといふ批判も出てくるかもしれない。現実はこのような幸運な方向にはなかなか行かないものだし、もつと大きな深刻な問題が無数にあると、異見を唱える人もいるだろう。しかしここは、このビューマンニズムを買いたい。優秀作。



この号には他にもいい作品が多く、「白玉椿」(翔明子)も推薦点が高かった。また「福広の靴」(森口透)もアメリカへの単身赴任の企業マンの生活を軸に、遠く離れた日本の家族とのやりとりを交えながら、現地の仕事や人間関係を描いて、現代の企業マンの姿をよく浮かび上がらせている。こういう家族が多くなっていることを、現代日本の一面としてよく知らせてくれる小説である。

●「九州文学」(福岡県) 562号

伝統の重みをよく受け継いでがんばっている「九州文学」だが、今回は二つの作品に魅力を感じた。

歴史小説「江戸湾の奇跡」(中村弘行)と、小松陽子氏の「播らぎ」である。

「江戸湾の奇跡」は日本に開国を迫るアメリカ側の立場から艦隊が東京湾に侵入して親書を幕府に渡す状況を描いている。ペリー提督について、その家系をはじめ、日本についての書籍費用に三万ドルをかけて勉強したという努力と意気込みと戦略をここまで詳細に書かれた小説には初めて接したが、実によく調べて当時の状況を再現している。特に感心したのは、当時江戸の食糧は、各地方の藩から海路を経由して運ばれる廻船輸送に依存しており、ペリーがその気を出せば、廻船輸送の機能をストップさせることができ、江戸は飢餓パニックに陥ることをしつかり叙述している点である。ここまで踏み込んであるものはほとんどない

イトルのように播らぐ心の女性の内面が、香り豊かな文章で紡がれていて、そこに生ずる文の酩酊が快い。きめ細かな肌合いのする文章は、よく練られていて、麗しさがあふれている。ただ後半主人公が居酒屋のおかみの方に近づいて、その哀切な播らぎが乏しくなると、味が薄らいでしまっている。「播らぎ」のまま貫くところに、この小説の味と香りがより深くなっただろうと惜しまれる。準優秀作。

●「藝文文学」(広島県) 86号

岩崎清一郎氏の「鉞脈探訪」は32と回数を重ねているが、この誌のなかでは最も読み応えがあり、健在を確信する。歯切れ、気骨のある文章は力が漲っている。ルポルタージュ「この世界の片隅で」(岩波新書)の復刊を喜ぶ文章も、広島の本水禁運動の歴史を背後に捉えていて勁直である。平川林木氏の語が出て来るのも、よかった。

藤井翠氏も「忘れられた女絵師『平田玉穂』」をよくまとめている。歴史の影に埋もれた芸術家に光を当てる作業は、藤井氏の文章の確かさによって輝きを増している。文学は振り返り、掘り起こすことによって、過去を蘇生させ、命を延ばし、共有するものにさせていくことを再認識させてくれる。

「マイ・ホーム」は、前回のまほろば賞で特別賞になった武田純子氏の新作で期待して読んだが、前作を凌ぐものにはなっていないかった。「古い家」の中にある感覚を現代的



ので、筆者の勉強の深さを賞讃したい。またペリーの戦略の深さと同時に阿部を筆頭とする当時の幕閣の認識力と対処も詳細に書かれていて、たいへん興味深い。互いの軍事力の分析も鋭い。ペリー艦隊がイギリスとは異なった外交方針を当初から持っていた点、そのため戦闘やそれに類する混乱拡大を避けてそれを厳守した点、その開国条約が他の国々との条約締結の基準となった点を挙げて、「江戸湾の奇跡」と述べていることには、卓越した見方として賛同する。ただ、最後の三行「幕府高官が築いた欧米との良好な関係を薩摩と長州の無知がぶち壊してしまった。そして日本史上最悪の明治という時代が始まった。日本は戦争の世紀に突入した。」はいただけだ。これがせつかくの作品をぶち壊しにしてしまった。準優秀作。



「播らぎ」は上司との不倫を基軸にした恋愛ものだが、タな感覚で捉え直しているものだが、いかに異空間の目新しいトリックを備え付けても、「古き」の奇怪さには肉薄できない恨みが残る。むしろ新しいトリックによって、遠ざかってしまう奇怪さこそが本質なのだろう。武田氏の方法が成功していないのは、方法が生きた対象に向かっていることによると思われる。もっと外側に向かって、対象が大きくなればなるほど生きて、力を発揮する方法だと思う。今回は準優秀作。次作を期待したい。

●「ガランス」(福岡県) 25号

「ガランス」は、腰の据わった誌で、同人誌王国の北九州を代表する同人誌の一つ。今号で特によかったのは、小河原範夫氏の「擬似的症候群」である。廣瀬武久選考委員から「隣人」と並んで最高

全国同人雑誌振興会

作家集団「塊」プロ作家による 作品 添削講評

文芸誌新人賞作家があなたの作品を添削・講評の通信指導をします

懇切丁寧・的確な指導であなたの作品をレベルアップ!

八寛正大 (新潮新人賞)・大高雅博 (群像新人長編小説賞)・都築隆広 (文学界新人賞)・五十嵐勉 (群像新人長編小説賞/インターネット文芸新人賞)

「文芸思潮」の読者には特別料金で指導いたします。

あなたの作品を作家集団「塊」宛にお送り下さい!!

| 詩 | | 小説 | |
|-------------|-------|----------|--------|
| 1篇 A4用紙2枚以内 | 3000円 | 1篇 20枚まで | 7000円 |
| エッセイ | | 50枚まで | 10000円 |
| 1篇 5枚以内 | 4000円 | 100枚まで | 15000円 |
| 10枚以内 | 5000円 | 200枚まで | 20000円 |

●ご希望の作家と面談指導も可能です。

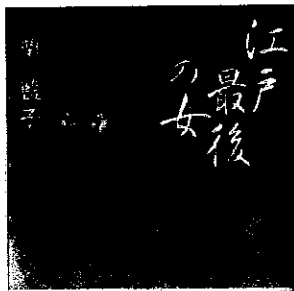
●ご希望の方には案内所を送付します。お電話・ファックス・葉書などでお問い合わせ下さい。

作家集団「塊」事務局

〒158-0083 東京都世田谷区奥沢 7-15-13

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848

asiawave@qk9.so-net.ne.jp



「万人の恋人」の謎の魅力に迫る

蘭子一筆の謎の連続小説。特異な三姉妹の事件と、謎の連続小説。



313

蘭藍子の遺作小説
注文はアジア文化社まで



2017.12

25

点で推薦されてきたこの作品は、まずなによりも文章の表現力が卓越している。緊密で地に密着したような文の切れ目のなさは練り上げた粘土を想わせる充実感がある。筋の筋はアバウトに引越して来た男オンナの宗教めいたやもめ救済運動に巻き込まれる奇妙な詐欺の話だが、自身の犯して来た過去の過ちをつい償いたくなるような誘惑が人生にはたくさんあってそれが擬似的な共鳴によって増幅されていくところに、普遍的な模様を込めている。その点は成功していて、手抜きのない文章の緊密さは最後まで途切れることなく貫かれるが、全体を読み終わっての読後感に、もう一つ捉えどころのなさを覚えるのは、なぜだろうかと不思議な思いに駆られる。詐欺というものがもともとそう

いうものなのだと行ってしまえば簡単だが、人間の拠り所をどこに置くかという問題も関わっているように思う。細かい点では、最後に寄付する退職金の一部が具体的にいくらかなのか、明らかにされていないことも、主人公の心理に追れない一原因と思われる。これだけの文章を書く人なら、いいテーマに逢着すれば、素晴らしい作品も書けそうな期待感も抱かせる。優秀作。

今期の優秀作

「ラーメンターピレ」寺井順一「西九州文学」40号

「隣人」河内隆雨「あべの文学」26号

「擬似的症候群」小河原範夫「ガランス」25号

準優秀作

「白玉椿」朔明子「あべの文学」26号

「江戸湾の奇跡」中村弘行「九州文学」562号

「揺らぎ」小松陽子「九州文学」562号

「幅広の靴」森口透「あべの文学」26号

「マイ・ホーム」武田純子「安藝文学」86号

「忘れられた女絵師」平田玉蓮「藤井翠」安藝文学」86号

同人雑誌にはいい作品、興味深い作品がたくさんある。

日本文学を支えているのはこういう創作活動である。今後

もさらになんばってほしい。

(全国同人雑誌振興会/五十嵐勉)

全国同人雑誌振興会

全国同人雑誌評

●「婦人文芸」98号

河田日出子氏の「変身」は、不思議な感覚を備えた小説で、「六十三キロの身体が大きく右に傾いたかと思うと、一瞬のうちに輝子は線路のレールとレールの間に座り込んでいた。」という出だしがすでに日常を離れている。神経衰弱で、月に一回病院に行く以外は外出しない閉塞的な生活が十カ月続くうちに、身体の肥満が進むと同時に、意識も常識から遠のいていく。肉体的に変わることが、意識をも変えてしまう、女性の身体の特異性のなかに投げ込まれて、読み進めずにはいられなくなる。異性からの一通の手紙を川に捨てるために出てきて、「細かく裂いては川に」捨てると、「少しは落ち着いた気分になることができた。」という。閉じ籠って家居の暮らしばかりしていると、活き活きと立ち働いていた以前が余計鮮やかに浮かんできては輝子を苦しめ、ますます惨めな思いに沈んでいく。「一通の手紙を川に流すという行為はそういう惨めな苦しみから逃れ出たための」「行為であるかもしれないなかった。」この閉鎖空間の中の意識の現実との隔たりによる危うい綱渡りのような緊張感がいい。タイトルはカフカの「変

身」をすぐに思い浮かべ、同じタイトルをつけなくてもいいのにと感じるものの、女性の肉体の変化による意識と日常の激変は、このような文章の緊張感を備えて迫ってくる、説得力を持つ。特に前半の現実と閉塞空間との間に生じる意識の乖離がいい。後半は、結局手紙を出してきて、さかんに会うことを誘う男と会い、男が失望して終わるのだが、ストーリーに重点がかかってしまって、小説の終わり方としては消沈する。前半のような書き方を生かすように心がけると、この方向でさらに二、三篇は書けそうである。危うい世界で書くことは苦しいだろうが、続けてほしい。関東交流会での優秀作に選ばれた。

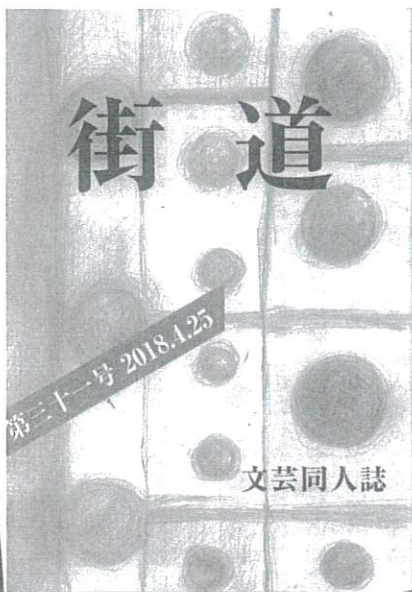
●「街道」31号

「大寒の日」（木下径子）はまとまった佳品で、小さな額に入れられた味のいい水彩画のような趣がある。大寒の日、未練の間を揺れるのがいい。結末の「そう言えば達夫とはこの公園を散歩したことがなかった。彼が亡くなってから達夫はいつもひとり歩いてきた。」という結末は、出だして枝を切り落とす残像と呼応して、夫の影を切り落とすように、前への孤独な姿勢を鮮やかにする。振り返ることを素直にできることになった年齢でなければ書けない妙味になっている。

●「カオス」23号

すでに失われた地への遠い郷愁が作品の強い動機になっている場合がある。「ダルニーの瞳」（朝川彪^{あさき}）は、そういう小説で、この旧日本帝国の大連に取り残された女性の視点を借りて、遠い過去の地への思いを乗せて、追懐の調べを奏でている。文章の流れに込められた、どこか諦念の暗さと敗北の投げやりさが、敵国の中国人に身をまかせつつ戦争と時代とに流されていく大陸の彷徨の感覚が詩情を散りばめて旋律を作っている。季節の過ぎていく情感と敗北の流浪の根のなさがうまく女性の感性を借りて、哀愁の色を濃くしているのは、筆者の思いの深さと、修練を積んだように見える筆者の技術だろう。筆者の大連への郷愁は、いったんは結実している。ここに描かれている主人公の女性の寄る辺なさや、女性としての感性は、筆者が女性であるかのようにさえ錯覚させるほど、人物に溶け込んでいて、おそらく筆者が大連で感じていた感情を見事に花開かせて

公園で枝を切り落とす作業者の光景を見ながら、過去の大寒の日を思い出す構成になっている。池の周りの公園の風景も良く描けている。五十五年前の大寒の日に結婚式を挙げた夫との夫婦生活を辿るのだが、登山クラブでの馴れ初めから、スキーにいっしょに行つてさらに深く入り、結婚して子育てと家事と勤めの慌ただしい生活の渦に投げ込まれる。しかしお互いの趣味の違いに、乖離が覗くようになる。小説を書く妻と、アマチュア無線に走る夫との間に、譲り合うことの出来ない溝が深くなり、無線の振動波で、妻の遠子は不眠に悩まされる。結局夫はビールを愛飲して糖尿病に罹り、脳梗塞も起こして再起不能になる。互いに無理をし続けた結果としての十年前の夫の死を思い出しながら、果たして自分たちは幸福だったのか、その懐疑と



いる観がある。

ただ、気になったのは、主人公の女性が終戦の混乱の状況下で頼らざるを得ない中国人男性が、共産党員であることとで、この終戦直後の大連で、このように共産党員が活躍していたとは考えにくい。共産党が真に力を持つのは、ソ連軍が侵攻し尽くしてその武器を共産党にそっくり残していったからのことなので、終戦のその年に、大連の主要建物の使用を左右できる立場になるのは、やや苦しい。フィクションの仮託を借りてのことではあるが、他の方法もあつたかもしれない。例えばロシア人将校と恋愛関係になるという手も考えられる。筆者の力量はかなりあると見るので、時間が許せば、これ以外の筋立てでもさらに考えてもいいかもしれない。

●「文芸中部」(愛知県) 106号

堀井清氏は老年の日常を、その曖昧な現実感と衰退感と喪失感の錯綜を通してずっと書き続けてきたが、今回の「お願いですから」は、めりはりが効いて、錯綜の模様がいい絵模様として展開している。現実の形がある程度はつきりしているほうが、逆にほんやりしたものも生きてくるのかもしれない。その意味ではたんに意識のまだら模様ではなくて、死生観の影を帯びたい老年の模様を表出する結果になった。車で人をはね、その相手が「死にたがっている」という描出、また自分がい万引きをしてしまう、

その日常の希薄感が、老年のリアリテイをもって迫ってくる。あの世へ行きたいと思いつつ、やはりまだこの世への執着が濃いその揺れ動く有様としての老年がよく出ている。優秀作としたい。

●「私人」(東京都) 94号

この号には先回「まほろば賞」を受賞したえひらかんじ氏の「バクダツド空港」が載っている。バクダツド空港の建設を受注するストーリーはなかなかお目にかからないスケールの大きさで、読む者を引き込んで離さない。中東という場も日本企業の海外展開の舞台裏のスリルを増幅させて、ダイナミックに動いていく。劇的な結末は、「プロジェクト小説」とでも呼ぶべき新たな領域の可能性を見せている。大規模建設に関わる人間のドラマがここには確かにある。こういう領域のドラマをテーマにしたものは戦前にはなかったと思うが、戦後日本の海外発展に伴って、世界各地で存在したはずのテーマであり、今後もつと出てきていい新鮮な領域を感じさせる。

えひら氏はこれに先立つ号で「建築事務所勤務」を発表し、さらにこのあと「苦しいとき」を95号に載せている。これらは、アメリカに留学して建築の苦学を重ねた頃から始まって、様々な大建築を残していく建築家の一生を内面のドラマを彫り刻みながら文学として展開していく、壮大なライフストーリーになっている。建築家の内面を文学と

して打ち建てているものは、あるようでない希有な長篇の全体像がある。建築は外側がすべてで、結果として物理的に残った物にいつさいが吸収され、その過程や内面的な苦闘は排泄されてしまう宿命にあるが、しかし土台になる哲学を含めてそれらを振り返り、内面から外面へ向かう成立過程の渦を留めておくことは、意義のあることであり、文学としての豊かな領域を示すものでもあるだろう。日本の文学は、構築性に欠ける点からも、新しい見方や構造を切り開いてくれる可能性も大きい。様々な面で注目しているし、期待もしている。全体が建ち上がったときの壮観さはまた一段と光彩を放つだろうが、長篇は規模が大きくなればなるほど最後がむずかしい。うまくそれをクリアして完成してもらいたい。

●「星灯」(東京都) 5号

この誌の批評精神は鋭く、「座談会「騎士団長殺し」メツタ斬り」や「Jアラートを喰う」多喜二「党生活者」に於て」(佐藤三郎)、「日本文化論の形成と発展十加藤周一論ノート」など、注目すべき批評・評論が並んでいる。佐藤氏の評論も、現在の北朝鮮のミサイル問題を、昭和初期の多喜二の作品の当時と比較して断裁する大胆な批評はなかなか現代ではお目にかかれない舌鋒だろう。貴重な視点である。

小説は野川環氏の「ラスト・マン・スタンディング」

が目に留まった。福島原発事故によって荒廃した土地に、再定住して一からやり直そうという挑戦意欲を持った作品で、原発による荒廃地をこういう形で描く小説は珍しく、一人で放射能汚染された地に立ち向かおうとする壮闘は、果敢で潔い。ただ、読み進めていくと、ほんとうに放射能の怖さを知っているのか、姿勢が曖昧で、空元気のような印象が強くなる。原子力事故に対する取り組みの、根本的な問題性の把握の弱さが、話題性の陰に隠れている。筆者は話題を取り上げるのはうまいが、その脆弱性も併せ持っている。その弱点が期せずして露わになってしまっている作品で、今後の是正すべき点をよく見せている結果になっている。力のある筆者だけに、それを修正して乗り越えていけば、いつか秀作を生みださだろう。関東交流会で大いに支持を集めた作品で、その推薦による「まほろば賞」候補作となった。

●「弦」(愛知県) 103号

「弦」は、一〇〇号を超え、ますます充実を深めている。中部地方には、一〇〇号を超える同人誌が、六五〇号に迫る「北斗」を筆頭に、一〇七号の「文芸中部」などいくつもあり、「海」も九七号と一〇〇号に迫って、日本の同人誌界を担う高峰群をなしている。持続の上に秀作という実質的な面も濃く、優秀作も多い。「中部ペンクラブ」のまとまりは、けっして形だけではなく、実を伴った創作活動

全国同人雑誌振興会

作家集団「塊」プロ作家による 作品 添削講評

文芸誌新人賞作家があなたの作品を添削・講評の通信指導をします
懇切丁寧・的確な指導であなたの作品をレベルアップ!
八寛正大(新潮新人賞)・大高雅博(群像新人長編小説賞)・都築隆広(文学界新人賞)・五十嵐勉(群像新人長編小説賞/インターネット文芸新人賞)
「文芸思潮」の読者には特別料金で指導いたします。

あなたの作品を作家集団「塊」宛にお送り下さい!!

| 時 | 小説 |
|-------------------|----------------|
| 1篇 A4用紙2枚以内 3000円 | 1篇 20枚まで 7000円 |
| エッセイ | 50枚まで 10000円 |
| 1篇 5枚以内 4000円 | 100枚まで 15000円 |
| 10枚以内 5000円 | 200枚まで 20000円 |

- ご希望の作家と面談指導も可能です。
- ご希望の方には案内所を送付します。お電話・ファックス・葉書などでお問い合わせ下さい。

作家集団「塊」事務局

〒158-0083 東京都世田谷区奥沢 7-15-13
TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848
asiawave@qk9.so-net.ne.jp

全国同人雑誌振興会

弦 第103号



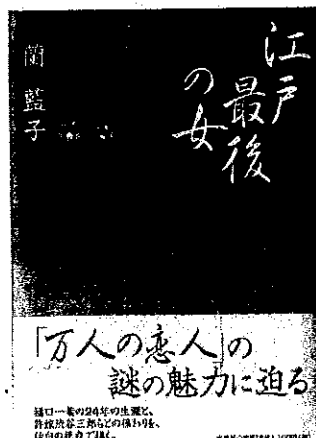
群として評価される。
「弦」の「サンバイザー」(木戸順子)もそうした実質をよく表した秀作になっている。子供を持たない肉体的なコンプレックスを夫との不和の間に置いて、女性の心理の翳りを顔を隠す帽子に託して、陰影をうまく醸し出している。筆者の筆は、陰の領域を深めていて、それが以前よりもさらに心の奥をやさしく撫でていて、味わいを快くしている。すでに「まほろば賞」の特別賞を受賞しているのだから、その実力から優秀作からは外したいところだが、この作品はその心理的壁を越えて、推挙したくなる実質を備えている。優秀作である。ただ今回はいっぱいなので、次回にまわっていたことにしたい。

「弦」は今号も充実していて、「風は樹々を揺らす」や「或る禁忌」、「ふたりのばんさん」など、読ませる内容で、おもしろい。
特に興味を魅かれたのは「悲運の戦闘機」(下八十五)である。これは川崎航空機工業で実際に三式戦闘機「飛燕」の生産に携わったときの話で、記録としても価値が高い。戦争末期の日本の航空機生産の実態がよくわかると同時に、水冷式エンジンのライセンス生産をドイツから買う過程など、日本の海・陸軍の組織の弊害も窺われて、学ぶことが多い。貴重な文章で、次回を期待している。

今期の優秀作は
「ダルニーの瞳」
「お願いですから」
「ラスト・マン・スタンディング」
「サンバイザー」
準優秀作は
「大寒の日」
「悲運の戦闘機」
別格として
「バクダッド空港」

朝川 彪 「カオス」23号
堀井 清 「文芸中部」106号
野川 環 「星灯」5号
木戸順子 「弦」103号
木下径子 「街道」8号
下八十五 「弦」103号
えひらかんじ 「私人」94号
(全国同人雑誌振興会/五十嵐勉)

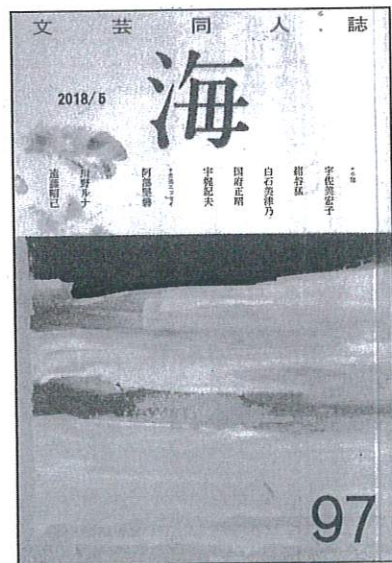
70号



●「海」(三重県) 97号

書き慣れた書き手が揃っているが、どれも出だしが平凡で、読み進めていく魅力に欠ける。竜頭蛇尾は困るが、もう少し書き出しに工夫してほしい。読み手の心をすぐに掴む書き方はちよつとした試みで、可能だろう。

その中で、唯一「刑事死す」(宇梶紀夫)は、出だしからしつかり読者の胸を把握している。ここにすでにテーマが表れている。「……亡くなった父・昭夫が地元で警察官をやっていた影響か、神奈川県警の採用試験を受け、警察官になった」という一文の中に、すでに死を予感させる宿命の匂いがある。父親はある「歓楽街で起きた暴力団同士の小競り合いを止めようと仲介に入ったとき、ハネ上がりの若い組員にサバイバルナイフで胸を刺され、路上に倒れ」た。大学生だった息子の郁夫が病院に駆けつけたとき、「息を引き取る間際に(父親の)昭夫は、絞り出すような声で切れ切れに、警察官には絶対なるなど、郁夫に言い置いて死んでいった」。しかしその言葉に背いて郁夫は警察官になる。そうすることが無念のうちに死んでいった父親への鎮魂になると考えたからだ。キャリアを積んだ



郁夫は刑事になり、あるとき暴力団の抗争による銃撃事件に巻き込まれる。犯人を追い、試行錯誤のうちに追いつめ、拳銃を握って籠る犯人の住居について踏み込むが、一瞬のうちに頸を直撃され、死んでいく。この悲愴な結末への過程が緊迫感を持ち、捜査網を少しずつ締め付けていく包囲の圧力が異様な高まりでのしかかってくる。この筆致は、実際に警察組織の中にいた経験があるようなりアリティを備えている。犯人と同時に主人公の死へも追い詰めていくこの高まりは、悲劇の要素を同時に高め研ぎ澄ませて普通の警察推理小説を超える純文学の領域へと結晶させる。冒頭の父親の死が重なってきて、宿命の死神の大鎌が振り下ろされる結末は重いインパクトを与える。こういう領域では初めてと思うが、優秀作である。

●「白鴉」(兵庫県) 30号

実力者揃いの誌だが、「越境地域」(大新健一郎)は、海外のゲリラ地帯に派遣される特殊な仕事を書いている。武器などは使用することのない特別援助業務ということで危険地域に赴任するが、しだいに反政府ゲリラ地域の中の危うい村で予想を超えた残酷なシーンに立ち会わされる羽目になる。しかもそれは次第にエスカレートし、自分も加害者にならずにはいられない状況に追い込まれていく。前半は低く抑えた叙述にリアリティがあるのだが、しだいに荒唐無稽になり、反政府勢力の疑いのある村人を皆殺しにしていくようなシーンが出てくるあたりから、作為が目立ち、残酷性だけが走って、付いていけなくなる。こういう世界は確かにあるし、傭兵の仕事や現実には、日本の世界と繋がってはおかしくはないのだが、途中から根拠を失っ



て劇画に浮いてしまっているのは落胆させられる。赴任先がどこなのか、アフリカなのか中東なのか、曖昧なままであることも、信憑性をなくしている。アメリカではすでに紛争地域へは傭兵が多くなっている、世界の紛争地域に高額で派遣する企業が潤っている。むしろそういうものを固めて書いた方がおもしろいように思える。日本の失業者の底部に働きかける共鳴感がせめてもの救いになっている。変わった題材なので取り上げたが、小説にはなっていない。「夏、とられる」(美月麻希)は、SM愛好者が精神的な恋愛になっていく猟奇世界を扱っているが、日常からの滑り込みが意外にしつかり書けているので、のめり込みかけるものの、猟奇の世界を書くにすぎない。おもしろい題材はなく、上部をなぞっているにすぎない。おもしろい題材も書けるという腕を見せたところで、この程度の腕はSM作家ではありふれているだろう。あとがきによれば、はるか以前に書いたものを引っ張り出してきて、鳴かず飛ばずのものをリメイクしたとのことだが、行き詰まって書けないのなら、筆を折るかしつかり休むべきで、周囲の圧力や期待に押されてずるずる筆を汚していくのは、退潮にしかならない。以前の賞が泣いている。筆が墮すときは書くことから離れるべきだろう。

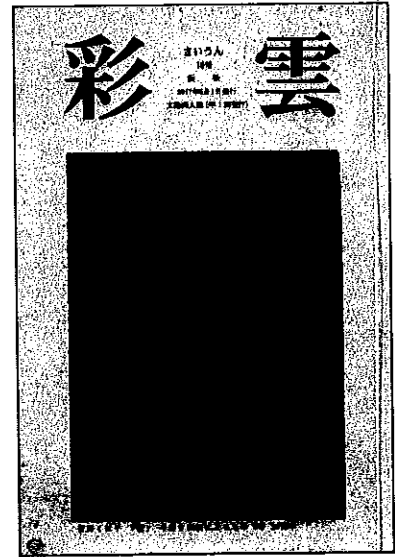
「アゴアク」(藤本紘士)は新奇な文章を繰り広げていて、その技術の試みと労力は認めるが、なぜこのようかわかり

にくい文体を選ぶのかわからない。技術や新奇を誇ることによりにかかって、書かなければならない本質からむしろ遠ざかっている。逃げたいがためにあえてわかりにくい文章にしてその陰に隠れようとしているような姿勢を感じる。藤本氏の書くべきものはこういう文体では表現できないだろう。技巧などいらない。苦しいことはわかるが、格闘の仕方が違う。見るべきものを見ていない。

この号に限って言えば、「白鴉」の書き手全体に、行き詰まりが感じられ、真の文学的取り組みから外れて、功を焦っている雰囲気を感じている。認められようとする功名心が真の創作意欲を阻害しているように見える。変なものを背負わずに、しっかり書くべきものを見つめてほしい。伝統や業績が邪魔になるのなら、捨ててしまえばいい。

●「彩雲」(静岡県) 10号

この号は三〇六ページという大冊になっている。内容も濃い。緑町優氏の「日子」は、なかでも読ませる牽引力が強く、盛り上がる展開力を持って感動にまで押し上げていく。スミオという美少年との交際が主軸になっていて、前半は荒っぽい少女である自分と一つ年下の美しいオカマ的異性との奇妙な付き合いが軸になっているが、成長するにつれて相手が難病にかかかっていて、それが進行性のものである事実が直面させられる。愛情も確かなものになって、それとともに病の進行が死を引き寄せてくる。彼を助



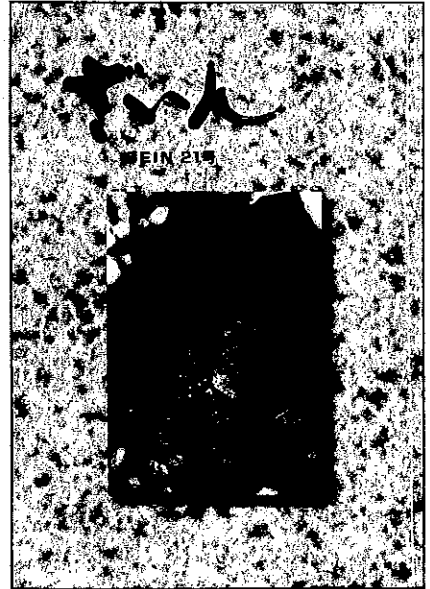
けるために自分も医者になる決意をする転換点が思い切っていて、一気に飛躍する。受験に勇を振るって難関の医学部に挑戦し、一浪ののち合格。スミオとの永訣を同じ病で苦しむ人のために医学としての開拓に取り組む誓いに代えて、その病の権威の医師の下で学び、アメリカにまで飛んで、世界的権威についてさらに学ぶ。スミオが自分のために刺繍で作ってくれたワンピースを着て飛行機に乗るところは涙を誘う。最初は奇妙な男女として始まったストーリーが果敢な挑戦に膨らんで行くところがおもしろい。楽しませる要素もいくらか強いものの、感動的な領域にまで上昇させている結果は賞揚したい。ただ、タイトルの「日子」は馴染めない。むしろ「スミオ」のほうが読後に残り適切に感じる。優秀作。

「狐火の里」(飯田旁) は、狐の世界と人間の世界の異界

交流を書いていて、興味をそそられる。年に一度の夜這い祭りのような「狐火踊り」の催しによって、人間の子供を孕む因習があり、生まれてきた子は、女の子だけを残して男の子は殺す。それによって雌だけの狐の世界を保持していく形が維持される。これだけ見るとおもしろいものの、それが何のために必要であり、どういう生物的根拠があるのか、明らかにされていないのは、不満が残る。また短い小説の中で、後半次世代の子供が主人公になって立ち回るの、飛び過ぎる観がある。結局恋愛と親子の愛情を優先根拠とするストーリーの落ち平凡におさまっている。

●「ざいん」(北海道) 21号

この号は特別に主催者からの推薦状が挿んであり、「キリギリス」(中井ひろし)を推します」という一文が記されていた。主宰者の光城健悦氏が書いてきたのは初めてのことだ。確かに読んでみるといい作品だった。失明した女性の半生を軸に、潤いのある筆致で描かれたけなげ

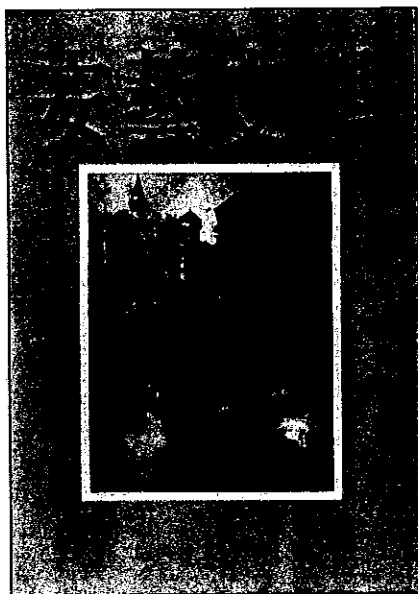


な苦闘の軌跡は、何かをひたむきに求める清らかな姿勢に裏打ちされていて、透きとおった哀しみが胸を打ってくる。光をなくしていくことによって母親や父親にいたり、やがて自らの行為によって母親も、さらに父親も失っていき、せつなく結ばれた原爆被害者の夫とも別れていく運命が、淡々と紡がれる。最後は伯母に引き取られ、そこで奮起して指圧師の免許を取る。しかし伯母とも死に別れ、最後に季節に残ったキリギリスといっしょに暮らす。ともに死が近い命を愛撫し合う思いが切々と伝わってくる。ストーリーは伯母のところへ移り住んでくるところから始まっているが、普通に子供の頃からの時系列に合わせた方がわかりやすかった。修正すればさらによくなる。優秀作である。

●「安藝文学」(広島県) 87号

この号は特に充実している。

「坂を上りながら」(石田耕治)は、原爆を扱った作品だが、四十年振りに故郷に立ち返り、一つ一つの場所に立ちながら当時を丹念に思い出す手触りが、しつとりと落ち着いていて、蘇りを鮮やかにしている。平明な文章とともに記憶を濾過した情景が澄んでくつきりと立ち上がってくる。前半は、広島を離れた事情などを挿入しながら、原爆投下前の土地を訪れる帰郷の感懐で彩られているが、後半はそこから頭をもたげてくる弟の原爆被害が生々しく描かれる。前半の平穩によって、その日常の破壊がいっそう鮮やかになる効果を意識せずして得ている。弟の友達の最期、そし



て弟の最期が抑制した筆致の中に浮かび上がって惨酷さを増す。四十年の離郷を経たあとの原爆小説を初めて読んだように思う。爆発の凄まじさを捨象した書き方に逆に重みが伝わってくる。優秀作。

武田純子氏の「森で」は、以前まほろば賞の特別賞となつた作品に似て筆が伸びている。その作品では「霧」がうまく使われていて、覆い隠すものへの迫り方が素晴らしかったが、この作品はそれに代わるものとして「古い」を持つてきている。「霧」ほどではないが、曖昧なものとしての象徴は生きている。武田氏の明るい、現代的な親しみやすい文章は、もともと外へ出ていく方向を備えているので、過去や内へ向かわずに、できるだけ広い世界への方向を持たせると文章もストーリーも生きてくる。星を再発見する、という鮮やかな結末が武田氏の持ち味だろう。付け加えれば、「霧」はいろいろな形に変えながら、現代への批判に作品として使える万能の姿を持つていることを記憶しておいてもらいたい。世界はいま黒い霧に満ちている。この作品の明晰さを買って優秀賞としたい。

「譜代二万石給人一家」(廣重睦美)は、幕末の武士の家の生活を活写していて、興味深い。この時代小説の生きているところは、経済生活をしっかり捉えているところだ。「お江戸の旗本ご家人は百石(年収一〇〇万円)に満たないと下士と見なされるが、ここ勝山では七〇石でも上

士である」から始まって、武具を揃えるのに、「古具足・刀・鎗の修繕、稲米の陣羽織の新調などをすれば、すくなくとも十両(三〇〇万円)はかかる。信周は八重の実家から二十両(六〇〇万円)を借りて何とかしのいだが、大半の武士はすでに何十両という借金を抱えており、新たな金策のあてもない」という数字事情まで具体的に述べてきて、当時の貨幣経済に押される武士の苦しさがよく伝わってくる。この藤村という主人公の武家自体、妻を庄屋から娶って、武士仲間から非難されるのに堪えつつも、経済生活は庄屋を後ろ盾にすることで凌いでいる。物語は、第一回と第二回の長州征伐を背景に動いていくのだが、開国によって物価が急激に高くなり、経済的な圧迫が農民や武士に及んでいく状況もよくわかる。しかも自然条件によって不作に追い込まれた農民が困窮から各地で強訴や一揆に及んでいく過程もつぶさに描かれており、身近な体験をするように、その世界が展開していく。こういう状況の上に長州征伐が行なわれ、幕府自身が「大坂商人から六十八万五千両(二〇〇億円)を借用した」という事実も、幕藩体制の根底的揺らぎを連想させる。当時広島が長州征伐の幕府軍の拠点になったこと、長州征伐が中国地方の武士に対してどのように準備されたか、武士階級の事情、農民の状況など多くのことを学ばされる。一両が三〇万円はやや高い気もするが、むしろ当時の急激な物価の急騰をよく反映して

いるのかもしれない。最後に尻切れとんぼのように感じるのは、まだ続編があるものと思われる。当時の地方についての博識がないと書けない小説である。興味深い歴史アプローチとして準優秀作。

今期の優秀作は

- 「刑事死す」 宇梶紀夫 「海」 97号
- 「巨子」 緑町優 「彩雲」 10号
- 「キリギリス」 中井ひろし 「ざいん」 21号
- 「坂を上りながら」 石田耕治 「安藝文学」 87号
- 「森で」 武田純子 「安藝文学」 87号
- 準優秀作は
- 「残闕」 寺本親平 「彩雲」 10号
- 「譜代二万石給人一家」 廣重睦美 「安藝文学」 87号

(全国同人雑誌振興会/五十嵐勉)

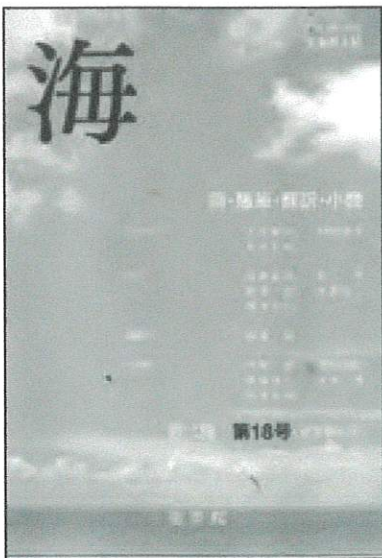


蘭藍子の遺作小説
注文はアジア文化社まで

●「海」（福岡県）18号・20号

「海」はこの福岡県の「海」と三重県の「海」と、二つの同人誌があり、どちらも実力のある作家が揃っていて、読み応えのある内容となっている。「文芸思潮」今号のまほろば賞優秀賞の「刑事死す」（宇梶紀夫）は三重県の「海」に掲載された作品であるが、福岡県の「海」にはまほろば賞の井本元義氏が連載している。どちらも一〇〇号に近づいている伝統の重みを備えていて、注目すべき同人誌の雄と言えらる。

18号の有森信二氏の「万華鏡」は、一九五〇年代の農家での幼年時代を生き生きと描いていて、当時の世界が鮮やかに浮かび上がっている。主人公の美奈と弟の喬を軸に成長していく子供と、変わっていく社会や教育とがうまく綾織られて、戦前の農村を引き摺りながら、経済成長の時代へ移っていく過程が、人物の言葉や思いに溢れて、よく伝わってくる。サッチャンという体の弱い女性が漁村に嫁いでそこで子供も産みなんとかやっけていく姿も、その陰影を子供たちの心の中に引き摺って深く残る。当時の姿が鮮やかに浮かび上がるその鮮度において優れていて、最後にサ



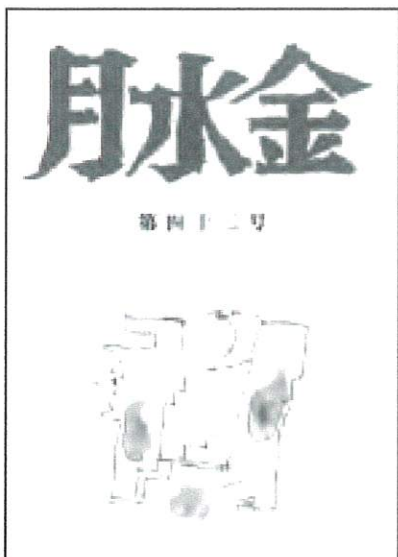
ッチャンが残した万華鏡を二人で覗く終わり方もいい。ただ、惜しまれるのは、せっかくなので書いていたのなら、その万華鏡に何を託し、何を盛り込むか、作家の世界観がもっと深くこめられたのではないかとこの不足感である。幼年・少年という一時代の、もう決して帰ってこない、命の輝きを帯びたその世界を、絶対性の時間の中に浮かび上がらせることができたのではないかとこの惜しさが残る。最後に覗く万華鏡の光の無限の模様は、サッチャンが暗示するこれからの実人生の美しいが不穏の未来として象徴すると同時に、ここまで生きてきた幼年の牧歌的な豊饒の世界としても照射することが出来る。この世に生きる底を照らし出すものとしてもっと活用させることが、この作品をさらにレベルアップさせる鍵となるだろう。難しいが書き直してそこを深めることができれば優秀作になり得る。

井本元義氏は「静かなる奔流」を長篇として連載しているが、いくつもの試みを展開しているものの、文章がややだれている。華麗な切れ味を出す舞台設定や人物設定をもっとしっかり別なところに求めるべきだろう。

もう一人の実力者牧草泉氏も「浅川啓子の場合」を連載していて、癌を基軸に問題を孕んだ展開を見せているが、タイトルが示すように、もっとテーマを引き絞って、追い詰め、滑走から飛び立たせていく作品の自立性を図るべきだろう。「〇〇の場合」の〇〇には、だれでも持つて来れそうで、絞り込まれていない印象を受ける。この連載には何かありそうなので、深めてほしい。

●「月水金」（神奈川県）42号

「安保物語―新日米安保可決成立―」（松田一宏）はこの



号だけで五〇〇枚近く、全体の連作を合わせると二千枚にも及ぶ大長篇小説で、これに費やした労力を考えると、頭の下がる大労作である。たぐさんの資料や参考文献を読むだけでも、たいへんな苦勞であったことが推察される。もともと六〇年安保がどういうものであったのか、それも知りたくて読ませていただいたが、とにかく労作であることには敬意を払いたい。そのうえで、感じたことを率直に述べさせていただく。

よく調べて書いてあり、当時の勢力や事情などをうまく取り入れて状況を再現しているが、何かもう一つ生動感がないのは、なぜか。国会に押し寄せた力は、ほんとうにこういうものだったのか、完全に説得させられない不消化感が残る。たんに学生運動や左翼政党の動きを書いているだけでなく、当時の自民党内閣の考え方や方向をも記している点など、客観的な複数の視点を提供はしていて、立体感も備えているものの、主人公とその周辺の人物が、内面を反映させたり、全体の動きを感じたりしていないので、高揚感に乗ってこない。ただ、当時の外国関係の状況やアジアの周辺の事情をも汲んでいるので、なぜ日本の中核がこういう選択をしたのか、その成り行きは知らされる。最後に主人公たち学生の一部が、国会の決議の後、首相官邸に殴り込みをかけ、首相を前にして問い詰めるそのシーンは、功罪両面を見せている。こういうフィクションの結末

を入れることによつて、当時は考えられなかった可能性を示している点は、積極的で肯定するが、結果的に岸信介の覚悟に圧倒されて矛をおさめるのでは、何のためにたくさんの学生が参加し、犠牲になり、あのような騒ぎになつたのか、反対派の努力が霧消してしまふ。政治家としての岸を賞讃して終つたのでは、不毛感はある一方である。安保に對するもつと冷徹な視点が必要だつたのではないかと思ふし、その結果が今日の日本の体制をも支配していることを考えると、重要な物語ではあるが、何かが書かれていない空白感を否定できない作品である。いづれにしてもよく果敢に挑んで書いたという努力については、賛辞を惜しまない。

●「九州文学」(福岡県) 44号

この号は九州文学としては目新しい題材の作品が集まつた。最も眼を魅かれたのは「狙撃」(園田明男)である。これは銃を撃つ側から扱つた珍しい素材で、つい引き込まれて読んでしまふ不思議な吸引力がある。実際に銃を扱つたことがある人でないと書けないリアリティがあり、銃に對する知識が身につくだけでも、読む価値のある興味深い作品だ。特にライフル銃の知識は、これほど遠くからでも射抜いてしまうのかと、遠距離での命中率の高さには恐ろしさを感じる。22口径ライフルでも五十メートル離れた距離の数ミリ幅の標的に90%以上も命中するという。これ

が大口徑のライフルになると三〇〇メートル先の同じ標的に命中させることができるそうだ。「ライフルスコープという望遠鏡を装着して狙われたらひとたまりもない」という。銃床や、引き金、銃弾に對する知識も満載で、五千発の銃弾を米軍から買って積むと、軽自動車の後部が下がり、米兵が笑うなどのエピソードも銃の現実と結びついて、実感を豊かにさせられる。

ただ、この作品は銃を撃つおもしろさや知識がよく伝わって来てほとんど読み進められるのだが、人間のドラマをどう持つてくるかという点になると、ストーリーの希薄さは否めない。銃の重みはあつてもストーリーの重みはない。結末をつけるために、かろうじて当時起きた事件とそのあとの事件を絡めて、なんとか形にしている。プリンス号事件という、少年がライフルを奪つて船に乗つたシージャック事件で、周囲に及ぼす危害を恐れて、大阪府警の腕利きスナイパーがスコープ付きの大口徑ライフルで一〇〇メートル離れた岸壁から少年の心臓を撃ち抜いたことで終息した。しかしのちに起きた浅間山荘事件では、この残酷な方法を避けた後藤田警察庁長官が狙撃を禁じたことで、逆に警官が狙撃され一人が死亡したことで、対比と皮肉を示して小説を閉じている。ここに人間のドラマが絡んでくると申し分ないのだが、ここまでだと、惜しいが準優秀作に留まる。

「戦場の祖国」(神崎たけし)は、アフガニスタンのタリバンに入る少年の闘いを描く珍しい題材で、アフガニスタンの状況にうまく乗せたストーリー展開は起伏があつてかなりおもしろく読ませる。水を掘つて不毛の地を豊かな地に変える日本人の医師も登場して、飽きさせない筋立てである。最後の裏切りとヘリコプターの襲撃もよく盛り上げていてそれなりの力は認めるが、日本との主体的な脈絡をどう付けるかという点で、希薄さを否めない。外国を舞台に書く小説の難しさはここにあり、外国人を外国で主人公にした場合、その主体が日本にどう撥ね返つて来るのか、あくまで無関係な事件であり現実であるならば、我々の胸には浅くしか入らない。日本人としての主体をどう絡めるかが、大きな課題として横たわっている。

「舟島の決闘異聞」(小泊有希)は宮本武蔵の巖流島の決闘を思いがけない視点から書き起こして、おもしろかつた。細川藩による小次郎抹殺事件の背面を仮定して意外性が喚起されるが、やはりつい没入させられるのは決闘シーンである。權を削つて小次郎の長剣を超える長さの木刀を作ることから始まって、「ツバメ返し」を破る瞬時の判断が、生死を分ける緊迫感に乗って手に汗を握らせる。その辺りはよく書けていて、つい引き込まれる。書き手は女性に思えるが、時代小説の筆力は感じた。

この号は「スモモ」(波佐間義之)や「ヤマガラ」の里」

(佐々木信子)、「愛のパスル」(緑川すず子)などまとまつた小品もそれなりに味を出し、賑わつて活気を呈していた。

今回は、興味深い作品、もう少しの作品はあつたが、優秀作に強く推せる作品はなかつた。その分、興味深い作品読ませられてしまふ作品は多彩だつた。まとめたい。

- 準優秀作 「万華鏡」有森信二(「海」18号)
- 「狙撃」園田明男(「九州文学」44号)
- 長篇特別力作「安保物語」松田一宏(「月水金」42号)



全国同人雑誌振興会

今回から、小説優秀作とは別枠に、評論や歴史小説など
 文芸思潮に転載させてほしい作品を推薦作として推挙する
 道を開いた。まほろば賞としての枠に入らない取り上げ方
 を新たに作ることを感じてのことである。御了承と御理解
 をいただきたい。

●「北方文学」(新潟県) 79号

「北方文学」は初めて読むが、充実した内容を備えた北陸
 の雄と言える優れた同人誌である。装幀もいい。腰のすわ
 った評論群が揺るぎない文学の基軸をなしている。流行や
 当世の浮薄な傾向や形にとらわれず、自由に奔放に書き紡
 いでいるところに、文学の真の翼を保持した矜持が窺われ
 る。「泉鏡花、『水の女』の万華鏡(二)」「(徳間佳信)、
 「ヘンリー・ジエームスの知ったこと(二)」「(柴野毅実)、
 「2019Qの天使たち」(鎌田陵)、和歌をめぐる二
 つの言語観について」(石黒志保)など快い文章探索の滑
 空感に満ちている。「新潟県戦後五十年詩史」(鈴木良)一
 も労苦の上に積み重ねられた貴重な記録で、残るべきもの
 としての光がある。

小説に傑出した作品があつて、読み耽った。柳沢さつび
 氏の「かわのほとり」である。ストーリーは父なし子を生

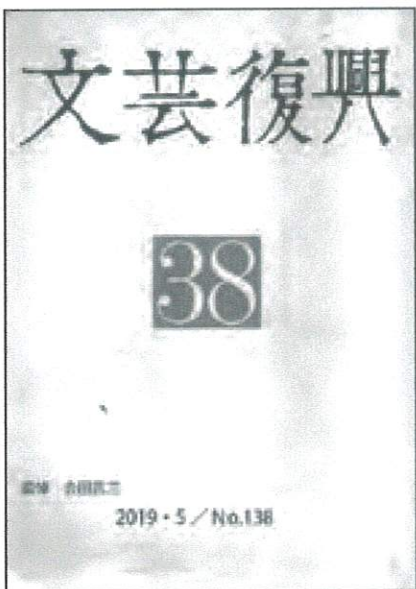


んでしまった女性が赤子の泣き止まないのに困っていると
 ころへ、ある医師の男が手を貸し、互いに思いを寄せると
 いうシンプルなものだが、全体に幻想的な雰囲気の中に、
 描写がすばらしい。泣き止まない子供が男の手当で泣き止
 んだとき、「静かになると、風が川柳の茂みを揺らし、水
 が川底の段を落ちる音が混然と、途切れることなく見ると
 カワセの間を流れる」と受ける描写に刃のような刃えがあ
 る。ラストシーンで男が主人公の見寿を送って行くときの
 「叢雲の間の歪な月が映る水から発する泥の匂いが、息苦
 しいほど暖かい闇をしんと埋めている」という描写も、男
 女の内面の熱を表して一期一会の世界の彫琢を深めている。
 当今これだけの描写力を持った作家がいるかと思われるほ
 どの卓抜した筆である。だれの子を宿したかわからない
 その麗ろさも、縁の幽遠さを匂わせていい。全体に幻想が

生きることの希薄さによく繋がっている点に、すでに深い

世界を捉えている奥行きがある。このような書き手がいる
 ことは大きな喜びである。一つだけ難を言えば、結末で医
 師の男が簡単にその子に腎臓移植をしてしまう部分である。
 全体の幻想の中に死も含まれているからこそ、この幻想が
 生きているのである以上、ここまでやらなくても、もっと
 単純なもので死を象徴させることはできるだろう。直して
 ほしいが、このままでも十分に優秀作品に値する。

「賜物」(新村苑子)は自分の息子がいじめで死ぬ話だが、
 会話など無駄な部分が多すぎる。せつかくの重い題材が周
 囲の人間の浮薄な言動で生きていず、焦点が結ばれていな
 い。力のある書き手と見られるが、この作品に関しては推



敲不足だろう。

●「文芸復興」(東京都) 38号

「文芸復興」はキャリアのある書き手が揃っている。文章
 文化に根を張った基盤の重みを感じられる誌である。読ま
 せる作品が多い。重鎮の会田武三氏の追悼特集も組まれて
 いる結束の固さもそれに根ざしているように想われる。

この誌も粒揃いだだが、特に読まれたのは、森下征二氏
 の「泰衡の母」と堀江朋子氏の「やおよろずの恋」である。
 「泰衡の母」は、奥州藤原三代の、ミイラとして残る泰衡
 の顔に異様な刀傷があることを考証推理していく前半と、
 その母と頼朝の対面における滅ぼした者と滅ぼされた者と
 の内面の激しい切り合いをフィクションにした後半とで構
 成されるが、説得力のある考証もおもしろいし、頼朝と泰
 衡の母成子の心理の衝突も鮮やかである。結局、一族を滅
 ぼした泰衡への成子の怒りと屈辱によつて泰衡の首へ斬り
 つけるのだが、推理の見事さと、クライマックスへの駆け
 昇り方の激しさが、考証を超えて生きた読み物にしている。
 また当時の源氏の棟梁としての政治的立場や野心、後白河
 法王との駆け引きなどよく捉えていて、歴史知識の豊かさ
 が時代の動きを生動させている。頼朝が生きている。ジャ
 ンル的に小説とは言いにくい面もあるが、多くの人に読ん
 でほしい熱量がある。推薦作としたい。
 もう一つの作品「やおよろずの恋」は、文章の味がよく、

これは相当な書き手でない自然な流れの中にこのようなきめ細かな心理をちりばめることはできないだろう。つい読み流される流れの良さは、落ちる紅葉を浮かべて流れる川面を想わせる。あらずじは年輩の女性司書とリチャードという三十八歳の白人男性の恋であるが、この異質な取り合わせが無理なく展開していくのは筆者の手腕である。二人を結ぶものがドルメンなどの古代石器文化である遠い歴史の遺物であることもロマンを乗せやすくしている。これは筆者自身が古代遺跡に造詣が深く、長年の情熱の持続があるからこそ生きてくるサイドの流れだろう。恋愛の引き合う力が、そのままヨーロッパと奥州をつなぐ二人の古代へのロマンと重なるところに、この恋愛の鼓動部がある。ただそのかけ離れた石器文化の夢が遠すぎる妄想の危うさをもこの恋愛は胚胎しており、地球の裏側との距離が、保守に溶け込む結末を用意する。壮大になり過ぎる夢の翔りが、魅力でもあり、根を細くしていることも否定できない。準備秀作。

●「人間像」(北海道) 106号

「人間像」は一八八号を出す北海道同人誌の雄。今号は妹尾雄太郎氏がノーベル文学賞受賞作家の作品を批判した「カズオ・イシグロ『浮世の画家』を読む―戦争責任をめぐって―」が特に重みがあった。氏は「浮世の画家」の主人公がほんとうに戦争の被害とその悲惨さを受け止めてい

るのだろうかという疑問から始まって、カズオ・イシグロの回顧姿勢の曖昧さに言及していく。戦争反省を題材にした例えば高橋和己の「散華」など日本の作品を提示し、比較しつつ、「浮世の画家」のぬるさを指摘する。「浮世の画家」は戦争中、政府よりに戦争を協力する姿勢で描いた画家の戦後の変節と反省を軸にしているが、似た画家の藤田嗣治などの弁明も引き合いに出しながら、変節のうしろめたさを浮き彫りにしていく。結局当時は文化人も含めてだれもが変節を余儀なくされたのだが、特に戦争協力の立場で動いた者が、戦後ことさら浮き上がり、糾弾に晒される事情もよく調べて書かれている。それらを鮮明にし、戦後の事情を明瞭に比較しつつ、なお重要な点が抜け落ちていく。「浮世の画家」の欠点を指摘する。特に最後の、建設の音の中で未来を想い、そこに過去の過誤を流し埋めようとする終わり方に、「この程度では何も反省していることにならないじゃないか」という疑義をぶつける。それは的を得ている。批判の筆は、刃として奥まで斬りつけている。

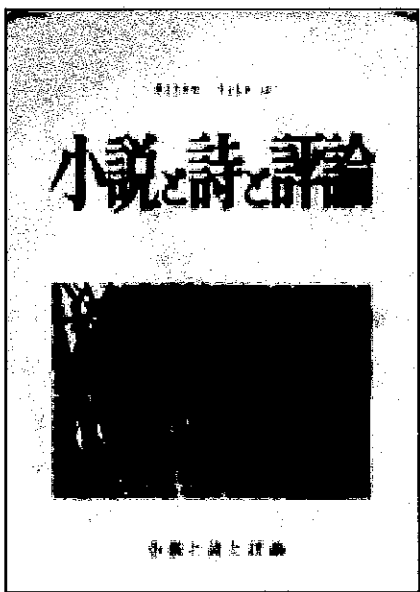
この批評には評価すべき点と不満な点がそれぞれ二つずつある。まず評価されるのは、ノーベル賞という権威に対してもそれらを取り外して作品として批評する鋭利な批判精神である。昨今、批評家が墮落しているのは、出版ジャーナリズムに迎合して、書評の広告塔になり下がっている状態を脱却できないからだろう。真の批評精神を忘れた出

版社のボチが多すぎる。そういう批評事情のなかで、妹尾氏のような斬然とした批評家が出てくるのは、実に喜ばしい。権威をぶった斬るだけの鋭利で揺るぎない姿勢こそが批評の原点だろう。氏はまた戦争への反省や戦後の精神の混乱など、問題意識を深く持って、広く深く読んでいる。量は批評家とすれば当然かもしれないが、問題意識の深さがそれらをしつかり結びつけているところに、思考の深まりが醸成されている。

ただ、少し物足りなく思われるのは、その筆に少し遠慮のような鈍さも伴う点である。もっとはっきり言い切ってもいいのではないか。刃は奥へ届いている。しかし両断するほどには斬り断つてはいない。これは読者に委ねるといふ方法を加味するのかもしれない。氏の批評スタイルかもしれないが、私としては鮮やかな一閃を期待したい。また、加藤典洋の「敗戦後論」や「敗者の想像力」など、引用に、問題の底に届き切らない不如意が付きまとう。「ゆでガエル」という比喩で戦後を包み込むには無理がある。問題はもっとと深刻で、厳しい状況下にある。砥石はもっといいものを用意してほしいように思う。

●「小説と時と評論」(東京都) 338号

三三八号の持続はすごい。愛知の「北斗」が六六〇号だが、これと「九州文学」と並んで、継続三大誌といふべきだろう。称揚に値する。主宰者、編集者に敬意を表する。

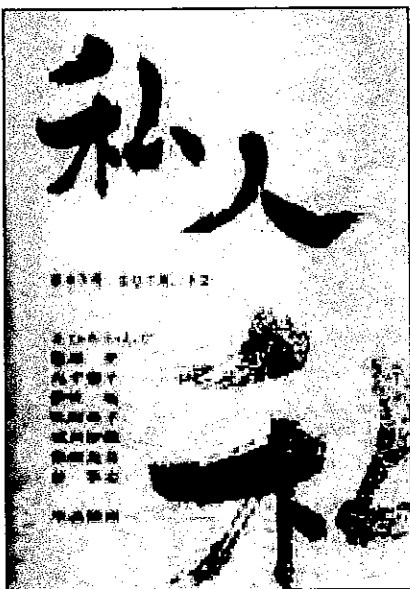


嶋津治夫氏の「凶作異聞」は、長く農業行政に携わってきた氏だからこそ書けるもので、こういう領域からの意義深い記録随想である。食に関するレポートや歴史的回顧は、重要な問題を孕んでいるにもかかわらず、ありそうでなかなかない。食糧問題は、一見平穏で不自由のない現代の生活のなかで忘れ去られているものの、いったん有事となれば、すぐ露出してくる喫緊の問題である。剥き裸にされればだれでも晒される飢餓の実態を提示することは、けっしておろそかにされてはならないだろう。これに絶えず冷静に目を向けていくことが、一貫した氏の作家としての姿勢で、篤実な作家魂を感じる。江戸時代の安藤昌益、大原幽学の考えや生き方に、当時の農村の実態を照らし合わせて、先駆の意味を掘り起こしつつ、現代の食糧自給の低さを目

を向けて、危うさを警告する筆脈は、足元を扶って、実相を突き付けてくる。実直な筆に信頼が匂う。推薦作。

●「私人」(東京都) 97号

「サミュエルと仲間たち」(えひらかんじ)はおもしろかった。今作はこれまでの建築の世界を離れてのアメリカ青春時代を描いたもので、六十年代のアメリカの等身大の日常が活写されている。人物の描き方も的確で、それぞれが生き生きと動き、呼吸している。日本とは異なったアメリカの社会、事物が新鮮に立ち現れてくる。四千キロも車を運転して行くメキシコ旅行も痛快で、スケールの大きさを満喫させられる。男女の関係もおもしろい。アメリカを舞台にした小説は土井良一の「カリフォルニア」や高橋三千



綱の「葡萄酒」などたくさんあるが、このようにアメリカ社会に深く入り込んで青春を謳歌した作品は希有だろう。読み終わって一つ一つのシーンが胸にいつまでも残る。半世紀前を回顧することが、逆に新たな命を吹き込むこともある。文学の効用だろう。それに加えて一つ言えば、五十年を隔ててインターネットでそのときの友人と連絡が取れて、再会の約束をする。この感激のなかに、生きてきたことの意味を問う感慨が添えられれば、この青春小説はそれ以上の影と意味を持つだろう。それは次の課題でもある。体験の豊かさとともに、体験の質というものもあって、それも作家にとっては重要であることを教えてくれる。准優秀作ではあるが、この作品を愛する。

今回の優秀作

「かわのほとり」柳沢さうび「北方文学」79号

推薦作

「泰衡の母」森下征二「文芸復興」38号

「カズオ・イシグロ」浮世の画家」を読む―戦争責任をめぐって―」妹尾雄太郎「人間像」106号

「凶作異聞」嶋津治夫 「小説と詩と評論」338号

准優秀作は

「やおよろずの恋」堀江朋子「文芸復興」38号

「サミュエルと仲間たち」えひらかんじ「私人」94号

(全国同人雑誌振興会／五十嵐勉)

●「八月の群れ」(兵庫県) 69号

今季は、関西の同人雑誌を多く読んだ。最近の関西の同人誌には活気が感じられる。これは大阪文学学校の卒業生たちが育っているためでもあるように思える。大阪文学学校の影響下にある書き手は全国にも散らばっていて、隠然としてはいるが確かな力を發揮している。一つの文学学校の継続の功績は大きく、敬意を表したい。

この「八月の群れ」が大阪文学学校と関係があるかはわからないが、兵庫の文芸活動の一角を担う力強さがあり、鍛錬を経てきている技量のある作家がいる。

葉山ほずみ氏の「雨宿り」は、「最期の願いほど断りにくいものはない」といういい書き出しから始まって、一つの世界を書き切っている。父親が自殺して、母親にも祖父にも見捨てられ、曾祖母によって育てられた十三歳の少年を、その曾祖母の死によって京香という主人公の独身女性に育てることになるストーリーで、珍しくはない人情ものという輪郭は取っているが、熟練した筆の庖丁捌きが見事で、湿気を帯びない筆運びが、人間の生きる姿をくつきりと浮かび上がらせている。主人公の葉局経営も明確に

りがとうございます。僕の存在があなたたちをどれほど傷つけてきたか、理解しようとは思いません。だけど、あなたたちが僕を否定することをやめる必要もない。もう僕は否定されても大丈夫だから」。また自分たちの血縁の不運を主人公は言う。「なるわけないだろう。そんな負の連鎖は私で最後だ。きつちり断ち切つてやる」この筆の流れの底には人間への愛が深く伏流していて、それを受けて立ち上がるからこそ、その言葉は力強く胸を打つ。涙を覚えるような場面もあるのは、そのためだろう。優秀作。ただ、祖父、祖母、叔父、叔母、従兄弟、曾祖母など、内側から見た人間関係の言葉は、混乱して何がどうなっているのかよくわからない余計な複雑さを生んでいる。人の名前や年齢を添えるなどしてすっきり整えてほしい。

山咲真季氏も力のある書き手で、「近くて遠い声」には、左耳の違和感を、実家の事件と重ねて進行させる巧みがあり、その雰囲気は構造の深化を孕んで濃さを感じさせる。ただ、その両極が徹底しておらず、どちらも中途半端なまま浮いているのが、結合を弱めている。実家の事件は他人事のようにも映る。この事件の本質を見極めて掘り下げるのが、自分の耳の違和感の根を明らかにするだろう。力は認めるが結実していない。準優秀作。

●「mon」(大阪府) 10号・11号・12号・13号・14号
この誌は最近注目を集めている誌で、「三田文学」や

八月の群れ

Vol.69

2019-11

描けているし、少年の、親のないことを気にしながら生きる過程で身に着けた躰や生活習慣も少年像として生動している。筆者の文章はひじょうに動きがよく、歯切れのいい省略によって前へ進む運動の陰に行為と性格がよく照らし出されていて、くつきりした輪郭を彫り出している。「言葉が足りないですか」/「そう繰り返すと、香奈江はかけていた老眼鏡をずらして京香へ顔を向けた。」とか、「キッチンに立つて朝食の準備をする背がまた少し延びた後ろ姿を見て、春休みのあいだに制服の裾直しに連れて行く日を見て、春休みが終わった。」などの文は、行動と進行が的確に絡み合っていて、人間像を浮かび上がらせつつ、しかも関係が深まっていく過程を描出している。一見いっさいの湿度を除去したように見える抑制された筆運びは、その底に深い愛情のうねりを蓄積していて、それがクライマックス部分で激しく噴出する。「おじいさん、来てくださってあ

「季刊文科」でもかなり取り上げられている。先日の全国同人雑誌会議の席で、三田文学の同人雑誌評の久村氏からも「評価が食い違う」という意見をもらったので、かなり前の号まで遡ってあらためてまとめて読んでみた。若い書き手が揃っていて、センスのよさの光る誌である。

「mon」も大阪文学学校の卒業生が中心になっている。「ゲスト制」というおもしろい編成を組んでいて、同人以外の書き手を招き載せて豊かにしている。そのゲストがまた同人に加わっていくという結果が良い効果を生んで、さらに刺激を生み、作品も洗練されていくことに繋がっている。

10号については、記念号で「モン」という音や漢字を入れたタイトルで皆で創作している。こういう企画自体がおもしろい上に、それに応えて、書き手が工夫を凝らして、それぞれにセンスのある作品を提出している。これだけでもかなりの才能を感じる。「聞こえる」(島田奈穂子)などもミステリー仕立てで、おもしろい。

11号の「襖の向こうに」(森本智子)は、介護の裏面の殺意をちりばめていて、心理のリアリズムを浮かび上がらせていた。親子関係には暖め合う力が普通だが、そうでない場合も少なくない。その狭間で揺れ動くのは自然だが、介護の領域で負の部分露出することは否めない。その心理の彩を取り出してみせた点では成功している。今介護さ

74

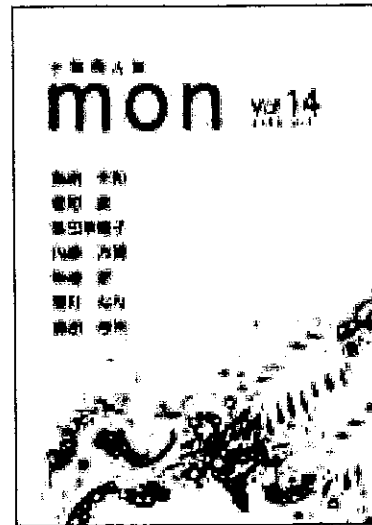
74号

れている母親が、以前祖母を殺そうとしたシーンは、フィクションの方法を大胆に使って、迫真力が増している。森本氏はゲスト参加でやはり大阪文学学校の出身。ただ、他のメンバーとは、少し毛色の異なるものを感じる。殺意の下にもっと親子とか血の繋がりとか生存とか、根底的な問いかけを深めることも可能かと思われ、そこまでいけば文学の斧の真の刃となるだろうが、それは欲張りかもしれない。推薦作である。

12号は「あまごいむし」（飯田未和）と「手の中の小鳥」（島田菜穂子）が、楽しめた。飯田未和氏は「mon」の主筆であり、エルマール文学賞も大阪女性文芸賞も受賞している実力者でもある。作品はルンレンという雨鞋を飼育していたり、動物カメラマンの写真展があったり、現代の色彩が鮮やかで、快いトーンが流れているが、そのさわやかな風が、両刃の剣になっているところが難しい。文体はどこまでも軽く歯切れがよく、さらさらと読み進んでいく。文章の快さは、酩酊というふうな深いものではなく、あくまで炭酸飲料のさわやかさとして流れていく。気持ちのいいスピード感、そよ風感である。会話は受け答えの調子がよく、リズムカルである。立ち止まることをしない。しかし実質的な人間の存在になると希薄で、人影の模様が光のアクセサリーのように明滅して消えていく。「殺」というギャラリーの店長の死も、命の領域に降りてくること

なく、メロディとして溶けていく。動物カメラマンに連れて行かれる樹海も死を匂わせるだけで、ギャラリーの展示のように残像のうちに装飾品のように外されていく。ショーウィンドウの見映えがあれば十分なのだ。この流れのよさと読みやすさを可ととるか、不可ととるかだが、読み終わってあとに残るものがあるかどうかという一つの基準に立てば、物足りなさを覚えるのは否定しきれない。きれいな流れから漏れているものがあり、それが疑惑としてむしろ頭をもたげるところに、楽しみとしての容色が立ち上がってくる。推薦作以上のレベルではある。

このスタイルは他の書き手にも大きな影響力を持ち、これに似た作風の小説が「mon」を彩っている。これは自然な傾向で、だからより豊かになるとも言え、現実はこのスタイルをもっと発展させ、進化させている作品も見られる。望月なな氏の「透明な切り取り線」（11号）や「おし



なべてまりか」もその延長線上にあるものだ。この筆者は自閉的な空間を増幅装置にしてさらに快い幻想感覚を押し広げていく。流れのよさは機銃掃射のようなイメージや調子の繋がりと違って、読み手を巻き込んでいく。紡ぎの魔法にかけられたような吸引力をたしかに備えている。巻き込まれていく限りは快い。しかしよく読むと、「あまごいむし」と同じ一面を持っている。センスのいい言葉ややり取り、現代風の透明でプラスチックな感覚、その賑やかな鎖は、きれいに流れ過ぎていくものの、首から下には降りてこず、胸の底にはけつして届かない。羽毛の舞のように空中を踊り続けるだけだ。

念のために「三田文学」新人賞の受賞作品「炭酸の向こう」を読んでみたが、同じだった。言葉は紡がれるためにあり、現実を捉えるためには遣われない。舞踏するためにあつて、現実や生きること向かい合うためには遣われない。もともと感動を拒否

作家集団「塊」プロ作家による 作品 添削講評

文芸誌新人賞作家があなたの作品を添削・講評の通信指導をします

懇切丁寧・的確な指導であなたの作品をレベルアップ!

八寛正大 (新潮新人賞)・大高雅博 (群像新人長編小説賞)・都築隆広 (文学界新人賞)・五十嵐勉 (群像新人長編小説賞/インターネット文芸新人賞)

「文芸思潮」の読者には特別料金で指導いたします。

あなたの作品を作家集団「塊」宛にお送り下さい!!

| 詩 | | 小説 | |
|-------------|----------------|----|---------------|
| 1篇 | A4用紙2枚以内 3000円 | 1篇 | 20枚まで 7000円 |
| エッセイ | | | 50枚まで 10000円 |
| 1篇 | 5枚以内 4000円 | | 100枚まで 15000円 |
| | 10枚以内 5000円 | | 200枚まで 20000円 |

●ご希望の作家と面談指導も可能です。

●ご希望の方には案内所を送付します。お電話・ファックス・葉書などでお問い合わせ下さい。

作家集団「塊」事務局

〒158-0083 東京都世田谷区奥沢 7-15-13

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848

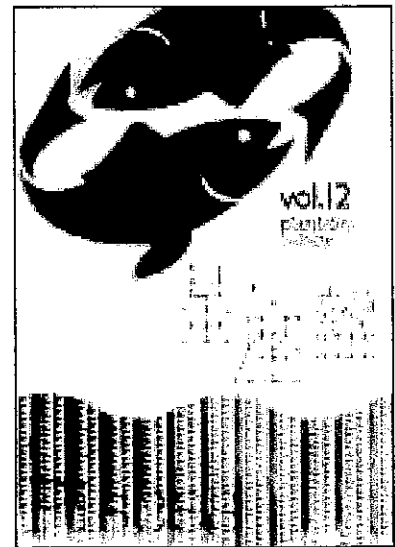
asiawave@qk9.so-net.ne.jp

したところに成立しているとも言える。それがパーチャル世代の陶醉であり、リアリティの喪失の新言語空間とも呼べるものかもしれないが、現実の力ははたしてそれにどう押し寄せてくるだろうか。苦しみや悩みや事故や敗北や運命の苛酷さは、それらの言葉で対峙できるだろうか。逆に言えばここには真の言葉の貧困が見られる。畢竟それは現実の貧困に繋がっていく。

ここまで隆盛になってしまっている一つの傾向を軌道修正するのは不可能に近い。それはそれで楽しんで一貫してしまえば、商業文芸誌にも取り上げられ、芥川賞にもなったりして現代的だともてはやされるのかもしれないが、真の文学からは遠ざかっていくだろう。

14号の島田奈穂子氏の「明日が来れば、さようなら」は、この作者のミステリー領域への広がりが感じられる作品で、設定とその匂いに可能性を感じる。ただ、オーストラリアにストーリーが飛んでしまったところに、拡散があり、ミステリーの閉鎖空間が破裂してしまった。本格的にミステリーに必要なものは何か、勉強して挑めば新領域への道が開けるかもしれない。

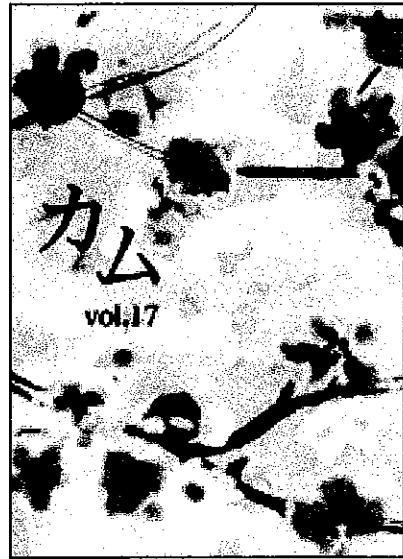
●「星座盤」(岡山県) 12号
新感覚の作品がいくつかあって、水無月うららの作品「ひかり透く」に注目した。文の運びに快適な律動があり、引きつけて読ませる力は大きなものがある。流れのよ



さ、感覚の新鮮さは、岡山の新勢力を感じさせた。多くの人に紹介したいだけの魅力はある。ただ、気がつくとな筆者は「mon」にもゲストとして参加していて、10号に「君は檸檬が読めない」を載せるなどして幅広い活動領域を有している。「mon」の作風と似ているところがあり、このような広い結びつきが近畿地方にあることに驚かされた。浅井梨恵子氏も両方の同人に名を連ねているので、やはり大阪文学学校の繋がりが、岡山まで帯をなしていることがわかる。軽いタッチ、清涼感、流れる文章は、共通した読みやすさで引き込んでいく。タイトルもセンスの良さが光る。この文章も一度は推薦作として紹介したい作品だ。「星座盤」の書き手は皆レベルが高く、どれも高水準の質を得ている。「mon」と同じような脚光を浴びていく可能性もある。

「レプリカドール」(荒井伊津) は変わった題材で、同性愛を大学での教授への売春に重ねて興味深く筋立てている。きわどい領域を扱いながら、奇妙に新鮮さも醸している不思議な小説だ。これはしかし、男性が主人公ではなく、女性主人公でも成り立つおもしろさを孕んでいる。予備選考では98点という高得点で上がってきた。準優秀作。

●「カム」(大阪府) 17号
この誌は特異な題材を持つ作品がいくつかあり、「いつかの光」(後藤高志) は発想がユニークでギリギリとさせられる意外性を備えている。不倫をすると警察が逮捕に来るとい設定はおもしろい。大胆な発想が、興味をそそる。ただ、文章に緊密なつながりが欠けていて、粗い印象を受



ける。不倫と逮捕の着地点が曖昧に溶けているのも、一法ではあるが、何か欲しい。準優秀作。
他に「カケコミヒメ」(中山文子) や「君の好きな雲」(山本一男) など、現代の恋愛の形を描いていて、洗刺とした香りを覚える。不思議に生臭さがなく、セックスも乾いている。
この誌も何か可能性を孕んでいて、関西新文学の風を運んでいるもの一つだろう。

今季は関西の新興雑誌を中心に取り上げてみた。

優秀作

「雨宿り」 葉山ほずみ「八月の群れ」69号

推薦作

「裸の向こうに」 森本智子「mon」11号

「あまごいむし」 飯田未和「mon」12号

「ひかり透く」 水無月うらら「星座盤」12号

準優秀作

「近くて遠い声」 山咲真季「八月の群れ」69号

「手の中の小鳥」 島田菜穂子「mon」12号

「レプリカドール」 荒井伊津「星座盤」12号

「いつかの光」 後藤高志「カム」17号

●「木木」(佐賀県) 32号

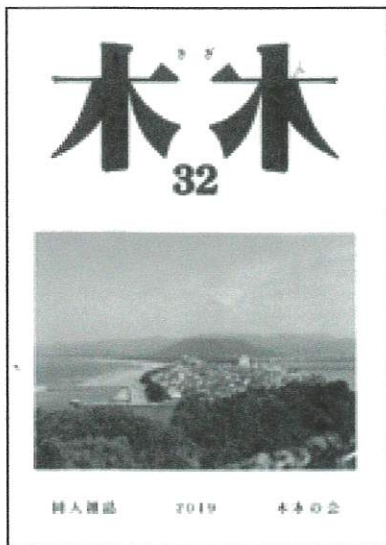
この誌は、扉の「秋蝉や砲弾の跡の門」の巻頭句で始まっていることに象徴されるように、趣が深く、主宰者の林絹子氏の細やかな風合いが全体に息づいている。その作品「生還」も情感のゆるやかな流れが、体の異変の底に快く波打っている。緊急の体の変化を描きながら、なお命の流れをやさしく見つめている確かな眼がある。「人の肉体は、いかに多くの動作を行い、いかに多くの動きを持つことができるか、それを行う脳の指令が、神経という線を通して、体中に張り巡らされていて、ひとつの素晴らしい機能を持つ世界を作りあげている。……生まれながらの、この素晴らしい機能。だれが作ったか、どうして出来たのかわからぬ、素晴らしい一つの出来上がった個体。神が作りた給うたという言葉が浮かぶ」という素直な感動を、脳梗塞による入院生活の中で抱く叙述にも、趣の基礎となる細やかな感性が息づいている。準優秀作。

巻頭小説の「火鈴」(木山葉子)は、主宰者の文章の細やかさを受け継いだ文体で、趣の深いいい旋律を奏でている。旅館の料理人の転々と職場を変える流れ者の人生の、

非道をやつてのけた男が、今さらあれこれ弁解する余地などないし、破れ目からどんな何かが広がってゆくのが、前々たる「この流浪転落の途中に聞こえてくるのが、前の生活の名残りとして聞こえてくる貝殻の風鈴の音色で、そのかすかさが、虚しさとはかなさをいっそう呼び起こしてくるその過程がいい。ただ、結末が、愛人との破局の後に、妻へその音を頼りに回帰するのは、ややあつけない。妻が流浪の果てのその地に暮らしていたという終息は、ストーリーの終息としては領けても、小説の終息としては物足りない。むしろすべてを失くしたその後、妻の死を知らされ、風鈴の音だけが残るようにしたほうが、流転と人生の深さは象徴できたかもしれない。この文章の力量には感心させられるだけに、最後が惜しまれる。優秀作。

●「遠近」(東京都) 72号

「妹」(小松原蘭)は、精神の破綻していく妹の姿を、自分たちの生い立ちを振り返りながら、その生の寝に迫っていく展開で、迫真力に満ち、最後まで一気に読ませる。「死んでやる」「殺してやる」という絶叫や、妹の狂った言動が、生活を脅かすと同時に、何か生の根源に向かう鋭さを孕んで、息苦しい緊迫感で最後まで引つ張っていく。その遡及の底に、愛に飢えた子供の頃の姿が重なり、それが人生への愛の空転となって、破綻の深さを覗かせる。それはそのまま人生の深さでもある。この妹の姿には、狂った怪



根を失う流浪感と転落の気配が、陰の韻律を深めていて、文章の味わいを深く大きくしている。彷徨う生の足元を何が脅かすように吹き抜けていく。「風鈴の音が鳴り響き、避けようとしても避けられずに佇む恭司の足を、生き物の感触が素通りして行くのがわかった」というような優れた描写が随所にあり、達意の手腕であることが知られる。

妻のゆき子を捨てて、情欲に溺れるままに目の前の女と駆け落ちしていく顛末は頹廢の色を濃くして、どこまでも転げ落ちていく人生のきわどさをよく反映していて、そのスリルがこの世界を支えている。「捨てた者に用はない。捨てられた者にもこちらに用はないだろう。そういう思考で浅はかに、盲目に前に進んでゆかねば世間など渡ってはゆけない。それに、無謀もいいとこだ。駅のホームで、寒空に流れる暗雲を見ながら、自分の中から滲み出る感情に無防備に、右手で女の腕を掴み取ったのだった。そういう



物としての輪郭と同時に、壊れて行く過程での生身の人間のか弱さとせつなさが納得できる形で賦与されているために、いっそう愛すべき人間の悲劇の結末が露わになる。破綻し壊れていく人間のせつなさとその声が残るところに、作品の存在感がある。最後の「『がんばるや妙子』いぜんとして刃先をむけている妹に言った。『私らは幸せにならなきゃあかんのや』」もインパクトのある終わり方でいい。ただ、「妹」というタイトルが一般的すぎて、もう一つ焦点が結びにくい。タイトルはみな苦労するが、もっとふさわしいタイトルがありそう。優秀作である。

●「四人」(東京都) 102号

すでに100号を超えているこの誌は、誌名のシンプルさからは及びもつかない知性の豊饒さを備えている。学識

75

75号

者や社会的ポジションの高い位置の人たちが、横溢する趣味を余技で発行して楽しみ合っているように見える。いったいどういう人たちなのか、あまりの広範な知性に、圧倒される。まず表紙の写真が尋常ではない。パキスタンのフンザ渓谷の解説があり、写真家でも行かない土地である。カラコルム山脈云々とあって、よほど人類学など専門的に研究移動している人でないと撮れないはずである。目次もぶっきらぼうで、ただ並べればよいという素っ気なさだが、「十七歳の詩」とか「サイゴン」とか短歌二十首とかのなかに、「GIIQ」とか「デルフォイの神託」とか「金五両」とか、枠に収まり切らない飛び跳ねたはみ出しがあつて、それが誌全体の特性を表しているように見える。

巻頭の「鳥と蛇を追つて」は、この誌の編集発行人でもある山本悦夫氏の読みやすい論文だが、三五ページにわたる長さを、長く感じさせず、理屈の煩わしさを削った、紀行文の流れのよさを伴つて、最後まで興味深く読ませる力は、ただ者ではない大きなインテリジェンスを感じさせる。東南アジアではよく知られている怪鳥ガルダと蛇神ナーガを軸に論は展開し、インドのマハーバーラタの神話やメソポタミアの石杯、アイルランドの鳥と蛇、中国の龍と鳳凰など、四大文明やヨーロッパまで、全地球に調査と思考は及び、文明の起源からさらに進化の根にまで遡及する。広い教養と鋭い洞察に裏付けられたその知性の翔りは、

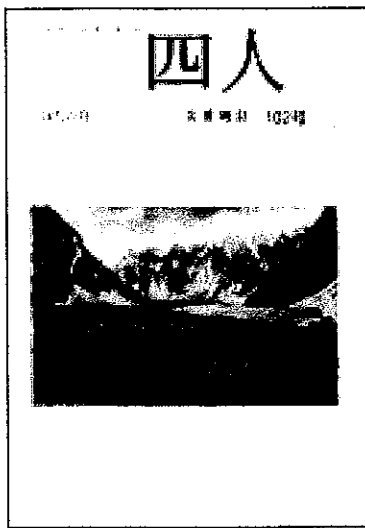
要領よく読者を引っ張っていくが、やや「ありそうな世界」に留まっている観がある。この世界の仮面性を描き暴くには、もう一步の踏み込みが必要のように思われる。純優秀作。この誌は本来こうした評価は必要なくむしろ拒否という立場を取るのかもしれないが、こちらの率直な感想は感想としたい。

またこの誌の後半部は気賀健介氏が七〇ページ以上をラングラムな題で書いていて、この気ままさが不思議な魅力を醸している。残すべき蔵書とその思い出の記録もあり、折々に経験した備忘録とも取れるその乱脈が、奇妙な存在感を持つている。こういう、書きたいもの、残すべきものをそのまま打ち出すことが、同人誌の一つのあり方、楽しみ方をも示している。

●「姫路文学」(兵庫県) 133号

「姫路文学」も一三三号で、驚きである。一〇〇号を超えた誌はそれだけで顕彰に値すると思われるが、今の日本にはそういう仕組みがないのは、返す返すも残念である。

ここに載せられた作品群には独特の趣があり、歴史という長い時間を遡行し、蘇らせながら現在との交錯を彩る風合いに手触りのいい織物に触れるような感触がある。「経正冥行」(千田草介)もその趣を備えた作品だが、一の谷で討ち死にした平経正の足跡を追ったこのストーリーは能の世界や霊や亡者が錯綜して、一種独特の空間を現出す



壮大な規模で、人類史を被い尽くす。いままで、同人誌でこのような壮大な思考を巡らせた文章は読んだことがない。同人誌という場を離れても、成立し、普遍性を持つ説得力がある。筆者は「人はなぜ『鳥と蛇』に特別な思いを寄せのだろう」という結論部分で、その進化の過程において「原初につながる鳥や蛇を畏敬する感情は私たちの下意識よりさらに奥深く体内に組み込まれているようです」と結んでいるが、その当否はともかく、進化の過程での脅えと憧れにまで起源を遡る種としてのトラウマへの洞察の深さには、驚嘆する。これは特別作といふべきだろう。私自身も大きな学びを得た。

この誌の「東京密林」(伽藍瑞香)は、東京へ出て来た宿無しの若者のつい殺人を犯して新宿のゲイの世界に紛れ込む、都会の享楽世界の喪失性を描いているが、それなりの展開力があつて読ませる。かなり本質にも肉薄して、

る。経正の生と死の機微に触れる幽冥のドラマは切迫力があり、鮮やかな再生を見せるが、全体に夢の迫真力に留まっているのは、古典に依拠し過ぎていて、現在の側のドラマと重ならないためかもしれない。準優秀作と見る。

「止まり木」(藤保君子)はスナックで働く女性の生活人生をよく汲み上げていて、抱える問題ややるせなさを的確に描いている。離婚をして、しかも引きこもりの十七歳の息子と暮らす母親の、酒場での仕事をカメラで追うように書いていて、そのリアルさは、よく迫ってくる。以前そこで働いていた女性が乳痛になって訪れたりする場面も一側面を浮かび上がらせて、この世界で必死に生きることの哀愁を引き摺っている。客との対応や、経営側の女性の本音や気遣いが露わになつてスナック空間の構造がよく浮かび

75号



上がつてくるのは、書き手の手腕だろう。それが人生のあらゆる真実と結びついて、人生の構造の陰の部分に繋がって見えるところに、この筆者の力量が窺われる。ただ、最後に息子が独り立ちを決意して出ていく段になって「私の人生返して」と泣き崩れるのは、主人公の魅力が削がれ、結末を安っぽくしている。残念ながら準優秀作に留まる。

この号で最も読み応えがあったのは中島妙子氏の「椎名麟三(七) 二つの不思議——『ほんとうの自由』とキリスト者」である。椎名麟三という野間宏と並んで第一次戦後派の代表格とも言えるこの作家に、これだけ現在でも焦点を当てて書き続ける情熱は、そのみで称讃に値するが、ここに繰り広げられる筆致は、確かに、率直な疑問と作家の実人生に沿って解明を進めていく手際は、吸引力がある。別れて住む父親に援助を頼みに行つて拒否され、そのまま家出する経緯や、母親の自殺や、生きるために何でもした少年から青年への苦闘や、共産主義に走つた過程や転向の事情など、戦前に生き抜いた一個の人間存在が、最後にキリスト教に入信するその到達と屈折を導いて、読者を牽引していく。その掘削力と導きの流れは、説得力があつて、評論としての分析力を示している。ただ、これは連載のせいか、これだけでは十全な解明に到達していない、何かが残る。キリストに父親像を重ねるそこには、もう一つ何かがあるのではないかという可能性を払拭できない。これは

すでに他の部分で書いているのかもしれないが、キリスト教という世界の向こう側に入ってしまった存在を、こちら側からの解明として十全に行うのはかなりの腕力が必要かもしれない。推薦作としたいが、全体は長いので、部に留めたい。

●「詩と眞實」(熊本県) 850号

この八五〇号という気の遠くなるような発行数には驚嘆する。月刊で七〇年の歴史があるということは、日本で最長の同人誌の一つと言えるだろう。称讃に値する。心から祝福を送りたい。この号はしかも三〇〇ページという堂々たるボリュームである。寄せられた回顧の声に重みがある。平成二十八年の熊本大地震の時、存続を危ぶまれたとあり、それを乗り越えての継続はいつそう尊い。九〇〇号、千号をめざしてさらにながらばついでにだきたい。

小説もエッセイも詩も多彩だが、中で目を魅いたのは「フラワー」(宮本誠一)という寓話小説である。「フラワー」が破壊された」から始まる抽象世界の広がりは、何を象徴しているのか、探求欲をそそられて、引き込まれる。植物世界なのか、種族なのか、人間の集団なのか、よくわからないままに異界に導かれていく。「フラワー」の世界そのものが曖昧なところへ、それが破壊された新勢力の世界へ踏み込んでいくのだが、新奇な風景や人物たちによつて開かれる「ハニカム」という世界がもう一つわからな

い。「ハニー」という天使を想わせる若い女性たちのもてなしとケアーが、桃源郷の趣きを見せて、老人の安楽死世界を構築しようとしているのかとも邪推するが、その目的もあり方も明確に伝わってこない。前半でせっかく雰囲気作りには成功しているのに、背後の異世界の構造がよく見えてこないところに、不満が募っていく。これは着想のよさに溺れてしまつて、その新しい世界の全体および細部の構築が不十分のまま、筆を進めてしまつた結果のように想われる。「フラワー」の世界構造と、それを「破壊した」新世界の構造をしっかりと造つた上で筆を進めて行かないと、途中で手が間に合わなくなるだけでなく、破綻しかねない。終り近くになって、天使の羽をはずした若い女性たちが雇

われの立場の不平を漏らし合うところなど、せっかくの虚構がぶちこわしになっている。寓話は、現実の何に批判の刃を向けての象徴なのか、それははっきりした上で書き進めるべきだろう。せっかくの着想が、水泡に帰している。熟考してもう一度筆を起こしてほしい。準優秀作。今回は長く続いた伝統同人誌の奥に触れることができた気がして、充実感があつた。今回をまとめる。

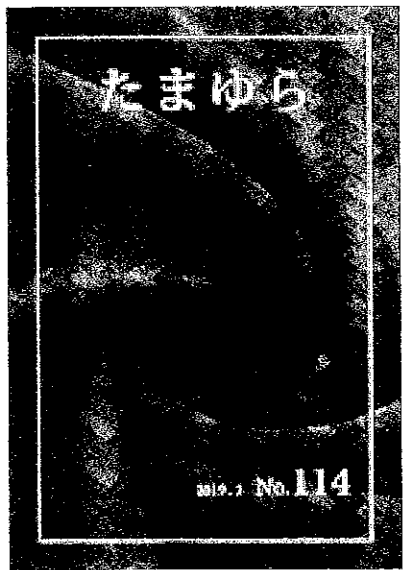
- 特別作「鳥と蛇を追つて」山本悦夫「四人」102号
 優秀作
 「火鈴」木山葉子「木木」32号
 「妹」(小松原蘭)「遠近」72号
 推薦作
 「椎名麟三(七) 二つの不思議——『ほんとうの自由』とキリスト者」中島妙子「姫路文学」133号
 準優秀作

- 「生還」林絹子「木木」32号
 「東京密林」伽藍瑞香「四人」102号
 「経正冥界行」千田草介「姫路文学」133号
 「止まり木」藤保君子「姫路文学」133号
 「フラワー」宮本誠一「詩と眞實」850号



全国同人雑誌振興会

(全国同人雑誌振興会／五十嵐勉)



京都の中川一之氏に移る過程での、佐々木氏最後の編集になる号である。一一四号の継統は、称讃に値する。

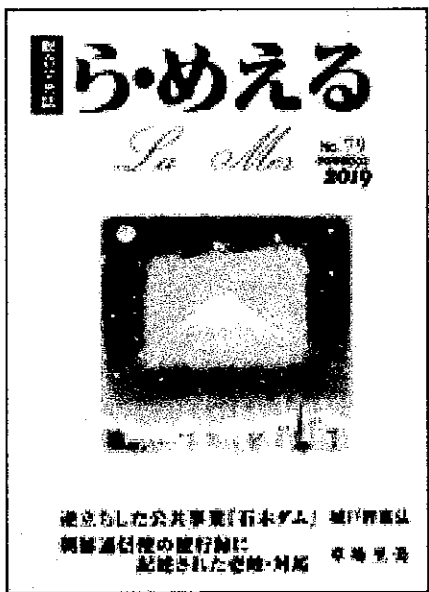
この号の中に、桑山靖子氏の「当麻曼茶羅」という作品がある。予備選考を委託している廣瀬武久氏が、99点という高得点をつけて推奨してきた作品は、確かに充実した読後感がある。粗筋は、早産で死んだ赤子の魂が彷徨い続けるのを追って、生命世界の本源に到達するという流れだが、その過程で中将姫が織ったという「当麻曼茶羅」の縁起に触れたり、折口信夫の「死者の書」の一節が蘇ったり、地蔵の供養をしたりして、日常の底に眠っている世界が開かれてくる展開が、深層を掘り起こしてくる。ふつう古典を引用したり、その世界に依拠したりすると、皮相になって足元を失いがちだが、この小説はそれが逆に成功し、それ

それが息づきを深くしている。到達した生命観もみずみずしく、融和の覚醒感もたらされる。会話と日常がそもそも遠い乖離感に染まっている恨みがあるものの、古典に依存しつつ、その奥にある世界を掘り下げた開拓は大きい。優秀作である。

巻末の佐々木国広氏の「みみずく屋」も熟成の味があつて堪能した。古書店を営む夫婦の軋轢と和合の綾織りが、一つの人生の姿を象徴していて、胸に染み入ってくる。筆は健在で、いい味を自然に出している点では、むしろ熟達を感じさせる。準優秀作。

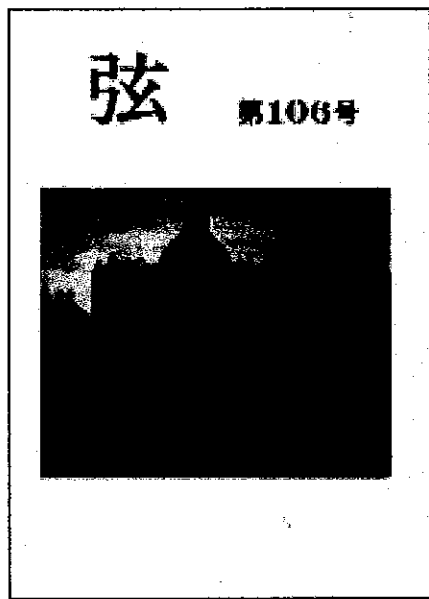
●「弦」(愛知県) 106号

巻頭作「睡蓮」(長沼宏之)は、落ち着いた穏やかな文章の中に、心を溶かしてくるような慰撫感がある。企業で違和感を持ちながら働く主人公が、精神を病んで、リハビリの集いに通ううちに、やはり精神を冒されてリハビリ中の女性と仲良くなる。睡蓮の絵を通じて密接になり結婚する。子供が流産し、彼女はおかしくなる。病と再発の危機を抱えながら、これからの生を抱きしめ合い、覚悟するストーリーは、快い流れに乗りつつ一方で狂気の恐怖を漂わせている。穏やかな筆致が、病をうまく包み込んでいるように見えながら、行末を案じさせる余韻が残る。睡蓮のスケッチや実際の睡蓮の花が、狂気と結びつく点にもリアリティがある。優秀作としたい。



●「ら・めえる」(長崎県) 79号

この誌は、長崎ペン・クラブの発行で、興味の湧く運営形態を窺わせる。総合文芸誌となっていて、小説作品や詩や俳句よりも、論説文や、記録、ドキュメントの方に華々しさが見える。巻頭の「逆立ちした公共事業『石木ダム』」(憲法13条「幸福追求権の危機」)「(城戸智恵弘)はダム建設に対し論理の通った真っ向からの追及がなされた告発文で、地方政治に堂々と立ち向う姿勢は気合いが入り、これで実際の政治が動けば、さらに実質の備わったものになる。記録文も「朝鮮通信使の使行録に記述された吉岐・対馬」(草場里美)、「長崎県の戦時型機帆船建造史」(6)「(西口公章)など、歴史記録を詳細に掘り上げた



ドキュメントは、価値が高い。特に注目されるのは「裏切られた自由ハーバー」(長島達明)で、これは第三十一代ハーバー大統領の自伝を軸に、その軌跡を追いつつ、太平洋戦争や後のルーズベルト大統領の行動を別な角度から浮かび上がらせている。「アメリカは大戦に参戦しない」ということを公約にして当選したルーズベルトが、むしろ画策して議会に参戦を決議させた過程など、興味深い歴史事実が浮かび上がり、新しい視点を鮮やかにしてくれる。日本一般に普及すべき論点を提供している。この誌はこうした領域に極めて豊かな脈があり、視点の高さや普遍性を備えている。

ただ、「徴用工問題は存在しない」(藤澤休)は、明ら

かに言い過ぎて、「南京虐殺は存在しなかった」と同類の過誤を犯している。朝鮮に対して犯した大きな歴史事実を見ずに、表面的な現象だけを日本人に都合のいい視点からだけ見ている判断は、通用しないだろう。

●「茶話歴談」(大阪府) 2号

歴史小説を書く熱烈な仲間が集まって作った観のあるこの誌は、希有な歴史小説同人雑誌だが、中身はその情熱が迸っていて、ぐんぐん読ませていくおもしろさに満ちている。ロマンを失いつつある現代において、歴史の中にそれを求める熱情は、ここにも大きく燃え上がって見える。どの作品にも熱が詰まっている。三三〇頁は立派。

なかでも巻頭の「血まみれ大膳、出雲の鹿に挑む」(真



弓削)は、豪傑武将の山中鹿之介に挑む毛利方の豪傑品川大膳の一騎打ちまでの軌跡を描いて、手に汗握る戦国絵巻を展開している。戦国時代にこのような一騎打ちがあったことも新鮮だったし、有名な山中鹿之介の立ち姿がこのような角度から照射されるのも、新映像だった。現代からするとやや大袈裟な人物像や闘いへの執念も、一つのロマンの中に生動するとき、むしろ自然なダイナミズムとなって躍動する。歴史小説の傾斜への本源を示しつつ、死によって逆に立ち上がってくる人間の生き方を明確に示してくる。読後に大膳の姿が永く残り、同時にまた山中鹿之介の姿も鮮やかに残る。ここに光を当てた歴史小説作家としての慧眼を称えたい。推薦作。

●「南風」(福岡県) 46号

実力者揃いの「南風」だが、今回は、全体に地味で、落ち着き過ぎている印象を覚えた。

紺野夏子氏の「家守」は、設定はおもしろく、仕掛けも揃っている出だしたが、モノトーン的展開でストーリーに起伏が乏しく、世捨て人めいた雰囲気、もう一つ盛り上がり上がっていない。主人公は母が短大生るとき妊娠した子を祖母が母親として育てる父なし子だが、お人形のようにおとなしいのが、よくもあり、悪くもある。普通はどうして自分には父親がないのか、父親はだれか、いろいろ悩み考えるのだろうか、この主人公は悟り切ったように、

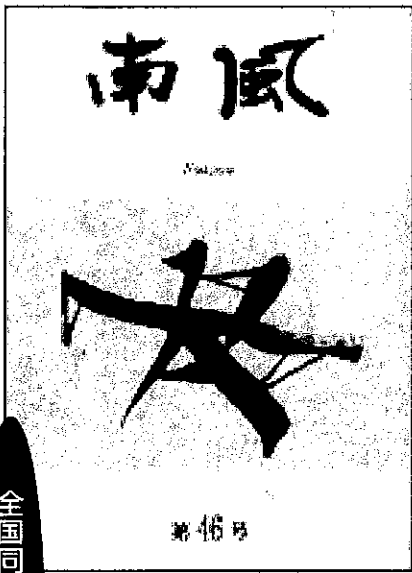
淡々としている。それに輪をかけて主人公を産んだ母親は、人物像がぼけていて、シングルマザーとしての苦悩も抵抗もないように動いている。読み進めていくうちに、祖父の妾の子供の紗代など、果たして登場させる必要があったのか、首を傾げなくなる。最後に「透」が、主人公に異性として近づき、「家守」の存在に変化が訪れるところは、やっとな人間が動き始めた感を持たせるが、「家守」という言葉を巧く解くために全体が作られているように思えてしまうのが、無理筋に思えた。次回を期待したい。準優秀作。

和田信子氏の「青葉山公園」は、高校時代の同級生の子供が六十年を経て突然訪ねてくる話で、その時の隔たりが懐古の扉を開く中に、人生の深い姿を見せる仕立ては、腕のいい彫師のような手腕が感じられる。その友人は高校卒業後、入社もない自分を会社に訪ねて来て、そのまま門

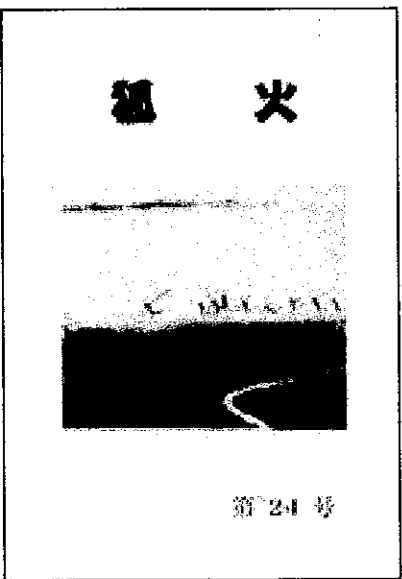
前で救急病院に運ばれ病院で子供を産む。しかし病院の費用を払えないまま、子供を置いて失踪し、青葉山公園で心中する。残された赤子は孤児院で育ち、彼女が子供といっしょに九州まで母親のことを知りたいと来たのだった。心中した事実をそのまま話さずに、交通事故と偽って、事実ではない母親の像を告げるのだが、なんとなく結像しにくい結果になっているのが、苦しさを感じる。娘が会いにくると知った時点で、すでに心中のことを思い出すはずだし、それを告げるべきか隠しておくべきか悩むはずなのに、心中をあとから出してきて、あっさり隠すのは、欺瞞の匂いが残る。またなぜ青葉山公園なのか、必然性も乏しい。話を紡ぐ力は旺盛で手腕を感じるが、順序を取り違えていることが、結像を鈍くしている。準優秀作。

●「狐火」(埼玉県) 24号

澤つむり氏の「おんば」は、筆の流れはせせらぎのような流麗さで、諧謔やウィットにも富み、おもしろく読めるのだが、この作品はおもしろさのほうを追い過ぎて、文学としての陰影は、乏しくなっている。高校時代の同窓会に体育の女性恩師を招くために、苦勞して、その家を訪ね、来てもらう話だが、いつのまにかそれよりも「おんば」という奇怪な老女のキャラクターが強くなって、それに圧倒されるオチになってしまっている。筆は立っておもしろいのだが、元気で風変わりな世捨て人以外に何が残るかとい



全国同人雑誌振興会



うと、やや寂しい。純文学としてはむしろ白骨になってい
るほうがいろいろ掘り下げられたかもしれない。腕は買う
が、題材とその取り扱い方がぬるい。準優秀作。

巻頭の「秘密のお庭」は、センスのある女性たちの生き
方振り返り小説だが、ブティックを経営したり、フランス
に遊んだり、有名人と交際したりする優雅な生活を語り紡
ぐものの、何か表層だけ追っているようで、内面に深く届
いてくるものがない。どんな生き方をしている、身を
切られるような孤独や自殺したいような絶望はあるはずで、
潇洒な庭は、それらを負っていてこそ、輝きを持つように
想われる。筆がそこまでは到達していないのは惜しまれる。

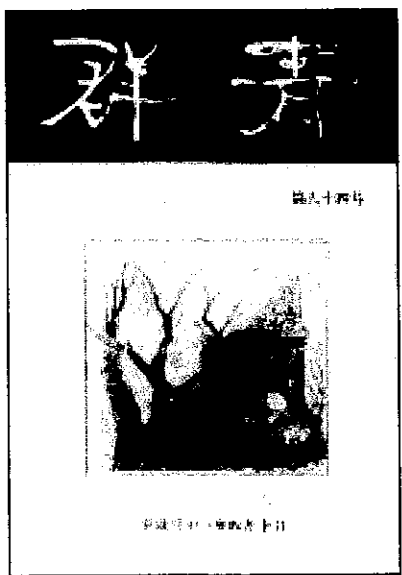
●「群青」(東京都) 94号

「群青」の94号の継続は立派だと思っていたら、編集後記

人たちに甘えが生じ、作品を発表することに、真剣さや緊
張感が薄れていった気がしないでもない」と記してあるこ
とからすると、相当な負担がかかっている、それをひたす
ら情熱で支えていたことになる。頭が下がる思いだが、な
んとか後を引き継ぐ有志はいないのだろうか。

高橋光子氏の「赤いワンピースの女」は、その色彩とと
もに、妙に胸深くに残るものがあり、ここまで印象を長く
引き摺るものは何なのだろうか、としばし考えずにはいら
れなかった。ストーリーは南アフリカへの旅行の上にある。
そこで出会った赤いワンピースを着た一人旅のドイツの老
年女性との短い同行が、思いの基軸になって巡り始める。

「ヴィクトリアアフォールの空港前の広場で、赤いワンピ
ースの彼女が乗り込んだおんぼろ小型バスを思い浮かべて
いるとき、朝子はなんとなく死のお迎えということを考えて
いるらしいのだ」とあり、それが女学校時代の親友の癌で
死んだ最期に重なってくる。親友は死を間近にして鮮や
かな夢を語る。「大きな車に一人ぼつんと乗っているのよ。
どこへ行くのだろうと運転手さんに聞くと、『お墓だ』と
言うじゃない? そんなところへ行くのは、嫌! 今すぐ
下ろしてちょうだいって頼んだんだけど、運転手は自分に
そんなことを言われても困る。自分はただ迎えに行けと言
われただけだからと言うの」そしてその三日後に親友は亡
くなる。



に「この号で終刊になる」とあって、驚いた。残念である。
作家集団「塊」の河林満が主宰者の高橋光子氏をしばしば
話題にしている、一度訪ねようとは思っていたものの、河
林が急逝し、またこちらも多忙になって果たせないうでいた。
この号には「群青」総目録の後半が載っており、その中に
河林満の名前が三度出てくる。その号を求めたくなった。
もともと、この誌を取り上げようと思ったのは、巻末の
「赤いワンピースの女」が印象に残ったからである。編集
後記を読んだのはそのあとだった。

「書き手も読み手も高齢化し、これ以上続けられなくなっ
た」「普通同人誌はページ数に応じて費用を分担し、作品
を載せるが、『群青』は同人費だけで掲載費は取らないで
きた」「それが果たしてよかったのか、悪かったのか。同

「あのときから朝子の心の中には、無意識のうちに死ぬと
き迎えに来る車のイメージが住み着くようになっていたのだ
ろう。そしていよいよ死を間近に感じるようになって、それ
が表面に浮かび出て、赤いワンピースの彼女が乗ったおんぼ
ろバスのイメージが重なったのかもしれない」——死を受け
入れるアフリカのような果てしない地への回帰と同一感があ
る。死への旅立ちを匂わす一つの訣別がここに漲っているこ
とがこの小説の本質だろう。推薦作としたい。

今季をまとめる。

優秀作

「負け犬」

瀬崎峰水「ふくやま文学」32号

「当麻曼荼羅」

桑山靖子「たまゆら」11号

「睡蓮」

長沼宏之「弦」106号

推薦作

「血まみれ大膳、出雲の鹿に挑む」

真弓創「茶話歴史」2号

「螺旋状の瞳」幸村燕「何度でも何度でも新し
い小説のために」前衛アンソロジー「創刊号
「赤いワンピースの女」

高橋光子「群青」94号

準優秀作

「みみずく屋」佐々木国広「たまゆら」114号

「家守」紺野夏子「南風」46号

「青葉山公園」和田信子「南風」46号

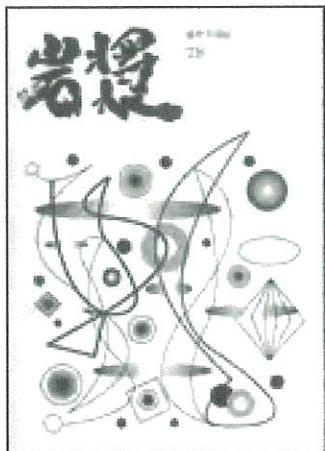
「おんぼろ」澤つむり「狐火」24号

全国同人雑誌評

●「岩漿」(静岡県) 28号

「岩漿」は静岡県伊東市という伊豆半島に地域を限定されている同人誌のように見えるが、その狭い地域で旺盛な文芸活動を展開している印象がある。「岩漿」は辞書では「マグマ」の意味とあるが、そんな燃え滾る熱さのイメージは確かにある。特に内にエネルギーが向かう耽美的な傾向の作品が多いように感じられる。

「一人静抄」(馬場駿) は双子姉妹の異性への愛情模様がコントラストを強めて描かれている。主軸になる妹が心臓が悪く肉体的に異性と情交が不可能である制約を背負いながらも、経済的には恵まれて、文筆でも収入を得ている、特殊な設定である。健康な姉は性の遍歴に耽る行動派であるところに対照性を帯びたストーリーが展開する。この二人が同時に出版社の編集員を愛することで、さらに愛憎が錯綜する。所々に示される自然描写や気の利いた場面展開は、筆力を感じさせるのだが、やや人工的な色彩が強く、舞台の閉鎖性と重なって、色彩が独りで踊り始める印象がある。双子



という宿命性もっと生かすことができるはずなのに、彫りが浅い。描写力やストーリーを組立てる力はかなりのものがあるので、自然な素材を選ぶようにすれば、もっといい造形ができるようになると思われる。惜しい力を感じた。「砂金」(佐木次郎) は、モノローグによってこの傾向をもっと先鋭化した作品で、この徹底した人工性は、怨念の世界を窺わせて、何か大きく潜むものを感じさせる。あまり露骨に表現せず、もっと抑制された方法を用いて力を奥へ貯める方向で描き切ると、優れたものになりそうなのを秘めている。注目すべき書き手の様相があるが、読者を意識して自己閉鎖の中に留まらない意志が必要だろう。「川面に霧が」(椎葉乙虫) も、自殺した女性の真相を追及する推理小説仕立てで、読ませる作品ではある。しかしこれだけでは、テレビの推理殺人ものとあまり変わらない。人のいい殺される女性の性格のなかに、もう一つ人間性の深い姿を屹立させると純文学になっただろう。

「岩漿」は、地に眠っている力を感じさせる誌で、楽しみだが、作品に柱(ページ上の小さな作品名)を付けたり、目次もメリハリをつけたりする工夫がほしい。各作品も磨きがかかると、より普遍的な力を備えていくだろう。

●「海峡」(愛媛県) 43号

地道によく文芸の糸を紡いでいる誌で、華やかではないがじっくりとした味わいの感じられる毎号だが、今号は藤井総子主宰者の「姉妹」が光った。インターン中の医学生と大学生の姉妹二人で車の運転をして実家に帰る途中、車線を越えて来たトラックと衝突し、妹は片足を切断する。助かったと思われた姉も疲労と妹への負い目から倒れ、脳出血で寝たきりになる。結局姉はそのまま死に、妹はリハビリを経て実家に戻る。姉の部屋で運命を振り返るのだが、全体としていいストーリーで、深いものを感じさせるものの、やや短い感じがする。最後の一行「わたしはこの春、姉が入った大学にチャレンジして、姉と同じように小児科医を目指す予定だ」は唐突で、かえって味消しになる。姉との思い出や、姉が医学を志したきっかけなど、もっと過去の姉妹の触れ合いや人間の存在性を深めれば、さらに充実した作品になっただろう。加筆し、改稿してもらえば推薦作としての作品だ。



奥付の発行所住所には県名も入れていただきたい。これはすべての同人誌にお願いしたいことだ。

●「照葉樹」(福岡県) 28号(第二期17号)

「照葉樹」は主宰の水木怜氏がよく引張っている情熱の感じられる誌。この号にもますます燃える熱さが備わっている。「やまぶき」(水木怜) は、別府の病院の一人息子が、跡継ぎになるべく医学部受験に何度も挑戦することがストーリーの軸になっている。その間に母が死に、病院も斜陽化して結局継げないのだが、その病院の盛衰の話と並行して、「とみた」という佐伯の老舗旅館の軌跡が重なる。その旅館のおかみが実の母親ではないかと疑う所から、話は複雑化し、人間関係の絡みの糸が奇妙な綾をなすようになる。それらを越えてすべて過去として現在からその模様を振り返るシーンに「やまぶき」が象徴されて、ラストはいい味になっている。ただ、話が錯綜しているので、わかりやすく呈示するのは、それなりの整理の技巧も必要になる。また、この複雑さを人間模様として深く描くには、も

っとポリリズムも必要だろう。二つの家の流れを書くには数十枚では足りないはずで、推敲の時間もなかったと想われる。逆に時間のない中で、よくこのような題材に挑戦したものだという意欲を買うべきかもしれない

い。雑誌の運営とともに、その点は賞讃したい。

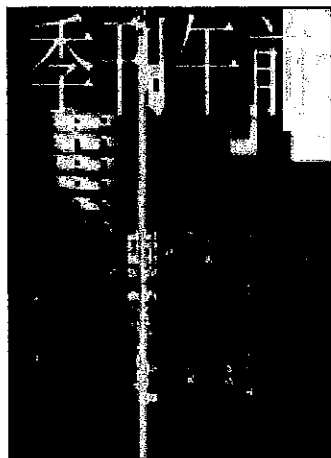
●「季刊午前」(福岡県) 58号
洗練された読みやすいレイアウトにはいつも感心させられる。誌作りのセンスのよさは抜群である。

今号は「城西支処某重大事件」(木島丈雄)が、読まされた。文章の流れはよく、人物の特徴をよく表しての自衛隊地方支処の事務所内部の活写は生きている。事件は結局無断欠勤とその背後に多額のサラ金借金の事情があり、その不始末を組織としてどう処理したかの経緯なのだが、不思議に引つ張られて読んでいくのは、文章の流れを作るうまさに依っている。しかし読み終わってもう一つ印象が薄く、胸の底にはあまり残らないのは、結局組織の現場を描くことに終始し、人間を掘り下げる刃が鈍いためだろう。自衛隊内部に問題が起こった時の対処の仕方、処分の方法はよくわかり、勉強にはなるのだが、いくら組織内がよくわかって、人間の行為の印象はない。小説としてはサラ金から借金する原因や過程、その人間に加わってくる圧力やその苦しみを書くべきで、それは置き去りにされたままになっている。筆力があるので、人間に切り込む力をもっとつけていけば、いい作品が期待できるかもしれない。

している。健筆を閉ざすにはまだあまりに旺盛で、今後どこに発表していくのか気がかりではある。

「法螺」には人情味の濃い好エッセイが軒並みで、これだけ人材が揃っているのにと、終刊が信じられないくらいだが、今号でもう一つ特に目を引いたのが「歴史随想 先祖たちの道」(高山順子)である。桑名藩の藩士だった先祖を克明に辿り、地位や報酬などを記しながら当時の生活と幕末の歴史事件を重ねて興味深い歴史生活記録になっている。歴史が生活として浮かんでくるし、逆に地位や藩士の生活を通して歴史が見えてくる。貴重な視点であり、歴史が生きて動いている。なにげない試みであるが、新鮮だった。

●「海」(福岡県) 90号(第二期23号)
「海」は三重県の「海」と福岡県の「海」の二誌があるが、どちらも力のある書き手が揃っていて、毎号充実している。今号は有森信二氏の「喫水線」に緊迫感を覚えた。内容は夥しく吐血した父の胃潰瘍手術で一命を取り留める話で



●「法螺」(大阪府) 80号
この号に「終刊のお知らせ」が挟まれていて、さすがに衝撃を受けた。残念である。同人誌を続けることには、人に言えない大きな苦勞がある。主宰の西向聡氏には、あらためて称讃を送りたい。巻頭の「さらば法螺よ」枚方文学花も嵐も半世紀」を呼んで、胸が熱くなった。ここにある万感の思いは、同人雑誌を運営する者にとつてきわめて深い共感があるだろう。後ろに転載させていただく。

この最終号に西向聡氏自身の小説作品「遠雷」がある。旧同僚との再会で、会社を懐古しつつ、内部の抗争がその栄枯盛衰を形作った軌跡を辿りながら、残りの自分たちの人生を見つめて現在の健康や熟年離婚した同僚の状況を思いやる温かいストーリーが流れていく。年を重ねれば普遍的なシーンでありながら、氏独特の肌のぬくもりが残る佳品になっている。氏の筆はつねに高レベルの出来栄で、当たりはずれがないほとんどが秀作という見事な安定を示

あるが、生死の境界の切迫感が圧倒的で、最後まで一気に読ませる。大手術を見守る家族の不安と緊張をよく描いていて、ドラマ性が立ち上がった。有森氏にしては文章の緊張感がこれまでになく漲っている。推薦作としたい。

有森氏はこの号に俳句も載せていて、「天上天下」と題した連作は、すばらしい出来栄である。

「母逝きぬ蟋蟀の音のそのままに」
「払曉の電話のベルに風死する」
「夏化粧の言ふがごとく昏光る」
「老鶯のほうほう鳴きて火葬終わる」
「夏に瘦せ焼かれて青き眼窩なり」
●「こみゆにてい」(埼玉県) 107号

わかりやすく親しみやすくてきた作りで、若さも感じられる誌である。この号では「離れ」(春木静哉)に一つの雰囲気を感じた。認知症の母を介護する日常が主軸になっていて、その母親の妄想から出てくる言葉にインパクトがある。「殺すのよ、殺すのはやめにしたのね」「わたし、

大学を受けようと思っただけだね早稲田と慶應とどっちがいいかしら」前半の淡々とすこしい言葉で運ばれる筆致には、つい引きつけられるが、途中から養女として入った家の変遷に入るルーツ語りになり、内容も複雑になって、興味が増される。ここはむしろ避けて、認知症に



全国同人雑誌振興会



よるおもしろい言葉とその背後をそのまま探る流れにしていったほうが、小説としては、盛り上がっただろう。物騒な言葉、きつな言葉を、現在の心の間に直截向かう方向でストーリーを組立てていけばずっと豊かな果実を結んだと想われる。後半は、家系の詳細になってしまつて、小説的膨らみが失われた。しかし、この作者には簡単な言葉によって、文章を回し、雰囲気を作っていく才能がある。テーマや着地点を見失わなければつきりした造形がでる力量がある。自分の長所をよく知つて、テーマを中心にした生きた造形を心がけてほしい。過去の詳細よりも、大胆なフィクションのほうが、読者の胸を掴むことを知ってもらいたい。 準優秀作。

●「ガランス」(福岡県) 27号

この誌はどれも文章力が高く、話の運び方がうまい。出だしもいい。これは指導者の鍛錬が行き届いているということだと思ふが、並々ならぬ教導であることがよく伝わってくる。しかも巻頭から前半は新人によくポジションを提示し、やる気を出させているような配慮も窺える。同人誌のあり方の一つのモデルともいふべき姿が感じられる。

「哀しみよありがとう」(櫻芽生)は、痛で夫を失つてから精神を病むが、夫の足音によく似た盲目の男性を知り、仲良くなつて新たな道を歩み始める話だが、ほのぼのとした雰囲気がいい。やわらかく包み込まれるようなタッチの

文章が生きている。読後感も快い羽毛で包まれる。最初、サガンの「悲しみよ こんにちは」とタイトルが似ているので抵抗があったが、読み始めると異なることもわかつて読了することができた。もう一つ気になったのは、出てくる人物がみなあまりに善良で、悪い人間や障害になるような人物はだれもない。世の中こんなにすんなりいかないと思いつつ、なんとなくほだされてしまふ、不思議な甘さを持つている。 推薦作。

「マルコポーロージュ」(鈴木比喩子)も読ませる作品で腕はいい。脳梗塞で倒れた兄をめぐつて、いったん母の家に引き取り、その上で離婚した自分、兄嫁、母と、だれがどう面倒を見るかの駆け引きが主軸となる。このやりとりの心理の機微はよく出ていて、おもしろく、確かな技量を感じるのだが、読み終わつて胸に降りるものがやや希薄なのは、肝心の脳梗塞の兄の主体が照射されていないためだろう。「マルコポーロージュ」は兄嫁が置いていったフランス紅茶の銘柄だが、これがテーマにどう関わるのか、味のようにも映るが結局それほど強く結びついてこないことも覚える。技量はあるので、それに溺れないように足場を固めてみるのも一つのステップかもしれない。

この号には誌名の「ガランス」の由来が「ガランスIIあかね雑考」として創刊号から再掲されていて、たいへん興味深かった。主に「ガランス」という茜色の、当時芸術界

で流行したフランス語のニュアンスを追つていて、最後柳田國男の歌「いにしへのあかねむらさきむさし」の、跡とふものはただ秋の風」という名歌で閉じているのも秀逸で感心したが、私には広津和郎が「武者小路実篤全集」など出版業を試み、それが関東大震災によって失敗となつたという事実が興味深かった。広津和郎は、早くから「出版ジャーナリズムが作家の書く主体性を損ねているので、これを作家の手に戻さねばならない」ことを主張していた。野間宏が「文章入門」のなかでこのことに言及し、私もそれに深く共感して、「文芸思潮」を発行するようになった。広津和郎の主張がこのような出版事業の失敗の上に発せられていることは、ここで初めて知り、大きな勉強になった。

縁は繋がるのか、この号には「全国同人雑誌会議」に出席して」という昨年の同人雑誌会議での詳しい報告も載つて重要であるのでここに記したい。「①『一億総活躍社会』に騙されないこと。物質的には豊かになってきたが、精神

生活は逆に貧しく荒廃している。商業主義の渦に巻き込まれない同人雑誌のような創作拠点が必要となつてきている。同人雑誌の社会的地位の向上

が求められる。②息苦しい社会になればなるほど、創作の場を提供する同人雑誌の役割は大きくなる。『同人雑誌』のキーワードの広がりも期待したい。③全国同人雑誌最優秀賞『まほろば賞』の知名度がさらにあがれば若者、壮年層の同人雑誌への参加が期待できる。(一部省略)

小河原範夫氏の「月夜に泉のふちで」は力作だが、教団と噴水池との関係がよくわからなかった。プログでのやりとりなどもおもしろく、筆の吸引力は抜群であるものの、離婚して半世紀前の恋愛の相手に残りの人生を賭けるといふ着想はやや無理があるかもしれない。 準優秀作に留まる。

今回は、優秀作はなく、ややさびしい結果になったが、代わりに周辺に大きな収穫があった。まとめた。

推薦作

- 「姉妹」(藤井総子) 「海峡」43号
- 「喫水線」(有森信三) 「海」90号(第二期23号)
- 「哀しみよありがとう」(櫻芽生) 「ガランス」27号
- 準優秀作

- 「やまぶき」(水木椋) 「照葉樹」28号(第二期17号)
- 「離れ」(春木静哉) 「こみゆにてい」107号
- 「月夜に泉のふちで」(小河原範夫) 「ガランス」27号

(全国同人雑誌振興会)五十嵐勉

●「飢餓祭」(奈良県) 46号

「飢餓祭」は、まとまった同人誌で、各自が個性を守ってそれぞれに表現している。巻頭の「石を投げる」の著者島雄氏は、オーケストラを題材にしたり、音楽方面も趣味多様な上に、巻末の「アフターひじり(続)」で、「教信の千草念仏」や「白隠の健康法」などを取り上げたりしている。多彩で教養も多岐にわたっている。こういう趣味の広さが、同人誌に潤いと幅を付与していることを感じる。また桔梗第三氏の「あの頃のアメリカ/今、どうなっているのだろう」——「わが回想2」も、七〇年代初頭のアメリカをよく書き記していて、参考になる。現在が逆によくわかるこういう情報は、貴重だろう。

これらのふくらみの中で小網春美氏の「しずり雪」は、男女の一つの姿を描き切って、一つの世界を成立させている。二十六の年齢差のある元会社の社長を、部下だった女性が約束から介護をし、その過程で関係が精神的にもいつそう深まって、最期を看取る話だが、きめ細かな叙述に、人生の手応えがあり、落ち着いたしめやかな歩調の中に、男女の機微がしつとりと伝わってきて、いい味を出し

に生きる意味を見出すかということなのだろうが、しかしとにかくそれらを抜きにしても、長さをまとめて高いレベルに押し上げた力は抜きん出ていて、称揚に値する。優秀賞としたい。

●「文芸エム」(滋賀県) 創刊号

この誌は銀華文学賞を受賞している原浩一郎氏が立ち上げた同人誌で、創刊号にふさわしい鋭気が漲っている。巻頭の創刊の辞にあたる「生きる武器としての文学」にも力が入った言葉がある。「私の文学は私の心が選ぶのだ」「読む者の想定キャパを超える衝撃。思いもよらず心の深奥が衝き動かされ、読む者が圧倒される心的体験。それこそ感動と呼びたいのだ」と、めざす意気は高い。しかし熱量の大きさは、むしろ別などころに出ていて、「覚悟と



ている。相続で、数字のにおいが少し漂うのは、味を損ねている部分もあるが、全体としては、男女の愛の深い位置に着地を見せている。ないものねだりかもしれないが、男女の究極としての精神的な結合が、死の向こうまでの貫きを求めるとき、子供が花の枝を折るシーンの涙だけで留まるか、また彼の要求のままに裸で前に立ち眼で交わるだけが真の絆か、もう一つ胸の底を切る精神的なもの契りがあればさらによかったように思う。「しずり雪」の落ちる音も、もつと地に響いて、それが自分たちにも、テーマにも届いてくる趣を持って、結晶度は増しただろう。蛇足として言えば、二十六歳という年齢差は、男女の間でそれほど大きな障害になるだろうか。以前文芸思潮の授賞式に参加した三十歳のきれいな女性が二次会に参加して話したところ、ご主人は六十二歳で、最近子供ができて幸せだということだった。男女の仲は何でもありなので、いかにそこ

いう定点(坂口安吾、金子光晴そして観阿弥)という評論に、拠って立つ基盤がよく示されている。敗戦直後の変貌の下で、「清廉潔白で愛国の至情に殉じていた青年たちが、今や違法な物資横流しで財を貪る闇屋となり、鬼畜米英殲滅せんと散った軍神の亡夫に誓い貞節を固く守った銃後の妻が、今やガード下で妖しく米兵を誘っている信じがたい変容に対して、安吾は言う。「人間が変わったのではない。人間は元来そういうものであり、変わったのは世相の上皮だけのことだ」と、墮落論を引用して現実の底を見る文学の根への肉薄は鋭く、氏の基盤の深さを窺わせる。墮落が自然であることを示した上で、論はさらに金子光晴に及んで「すべて腐らないものはない」といつそう深い位置へ引きずり込んでいく。筆はとどまらず、観阿弥の「卒塔婆小町」に及び、卒塔婆に腰掛ける老婆とそれを非難する僧との間の深淵な問答「卒塔婆問答」を引用して「極楽の内ならばこそ悪しからぬ。外は何かは苦しむべき」と、現実の側こそ重点を置いて、実相の奥深さを顕わにする。この評論は文学の基盤をよく摘出して、評論としての優秀作になる。ただ、まぼろし賞には評論のジャンルはこれまで加わっていないので、推薦作としてたくさんの人に読んでもらうことにしたい。

「生々流転/生きるということ」(伊東久仁雄)も若い頃の二つの死をリアルに回顧していて、胸に残る強い文章に

なっている。

巻末の長篇評論「カミュ『誤解』、サルトル『出口なし』、その源と将来」(林鳩堂)は七〇ページに及び、壮大なカミュ論を展開している。カミュを戯曲から説く論評は珍しく、力作で、あらためてその領域を掃きたい気持ちにさせられる。その知識量と詳しきには圧倒される。ただ、全体は難読で、わかりにくく、もう「つ」伝わりにくい壁を感じる。現代に求められている重大な問題を孕んでいるので、速読によって届くものにしてもらえればありがたい。準備秀作。

● 『Ignea』 (大阪府) 9号

これも新しい同人誌で、若い力を感じる。英字の誌名も珍しいし、発行所も「文芸同人press」となっている上に合評会もオンラインで開いている。表紙の写真も斬新で、判も一回り小さい。きれいな作りである。作品もそれに沿って潇洒な風がある。「花が」(齋藤葉子)は、毎朝ドアの外に置かれている花に訝しさと恐れを抱きつつ、少しづつ花が生活に入り込んできて花の幻想に包まれていく。そこから話が展開するかと思いきや、心配した恋人が来て、結局同棲していく。花は淋しさの象徴だったのかと誤解したくなるシンプルさで、「かわいい」「きれいな」領域から出ていない。花の怖さをもっと書いてほしかった。

この被調パターンは誌の特徴なのか、「長谷川書店で会

ぐって」大誠丸遺難」である。

これは兵員を乗せて沖繩への加勢に向かっていた大誠丸が米潜水艦の攻撃を受けて沈没し、海へ投げ出された兵員が、救命ボートに群がり、沈みかけたのを見て、乗っている将校が軍刀を抜いて手や腕を斬りつけたという事件を追って、それが事実だったかどうか、あらためて検証している内容である。もともとこの事件を元に吉村昭が「海の樞」として作品化しているのだが、その取材にも論及しながら、多角的に筆を進めている。その筆は、戦時下での人間の倫理に迫りながら、丹念に資料や人語りを押さえていて、誠実な結論に達している。救命ボートから降りた人たちを浜の漁村民が奮って助けたことを、当時の軍が隠蔽して、闇に葬ろうとした事実も明らかになる。吉村昭がどのように事実を拾い繋ぎ合わせたか、その経緯までもが検証される。堅い手際には感心させられるが、何か納得しきれないものが残るのは、拙い

作家集団「塊」プロ作家による 作品 添削講評

文芸誌新人賞作家があなたの作品を添削・講評の通信指導をします
懇切丁寧・的確な指導であなたの作品をレベルアップ!
八鏡正夫(新潮新人賞)・大宮雅博(群像新人長編小説賞)・都築隆広(文学界新人賞)・小浜清志(文学界新人賞)・五十嵐勉(群像新人長編小説賞)
「文芸思潮」の読者にはメンバーが特別料金で指導いたします。

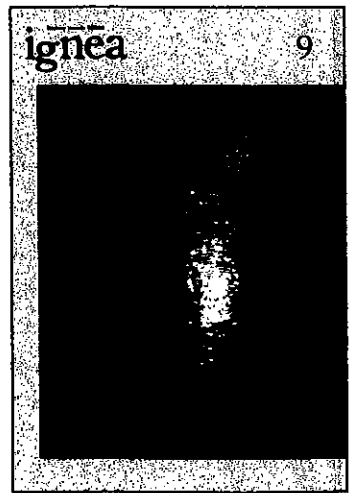
あなたの作品を作家集団「塊」宛にお送り下さい!!

| | | | |
|-------------|-------|----------|--------|
| 1篇 A4用紙2枚以内 | 3000円 | 1篇 20枚まで | 7000円 |
| エッセイ | | 50枚まで | 10000円 |
| 1篇 5枚以内 | 4000円 | 100枚まで | 15000円 |
| 10枚以内 | 5000円 | 200枚まで | 20000円 |

- ご希望の作家と面談指導も可能です。
- ご希望の方には案内所を送付します。お電話・ファックス・葉書などでお問い合わせ下さい。

作家集団「塊」事務局

〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13
TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848
asiawave@qk9.so-net.ne.jp



「いましよう」(岩代明子)にも見られる。タイトルも洒落ていて、まずそれに引き込まれる。最初の章前はおもしろく、読者好きと書店通いがいい雰囲気描かれ、書の世界の魅力が浮かび上がる。しかし途中から、生活が流れ込んでは、本の世界から遊離し、どっちつかずの彷徨い流浪感に浸される。章立てが「二番目」「二番目」となっているで、本を中心に動いていくのかと思っていると、たんに数字と順序を表すに留まっている。単純に読書遍歴をしっかりと書くほうが魅力を出せたかもしれない。

● 『人面獣』(北海道) 190号

いつも気骨を見せるこの誌は、今号も迫力ある評論とエッセイを載せている。

一つは妹尾雄太郎氏の「軍刀による殺傷事件の真偽をめぐって」

全国同人雑誌評

切れていない何かがあるのではないか、という疑惑も頭をもたげるからである。これは二つの点からさらに追及されるべきものを内蔵しているように思える。

一つには、救いを求めて救命ボートの縁につかまっつゝるその手を切り落とす残忍な行為についてである。この衝動行為の心理には、沈むかもしれない危機状況の中で自分たちが助かりたい気持ちも、他人の手を払い除ける行為で実現させるエゴイズムがある。これは自然であつて、誰もがその危機的状況にあつて、助かる方法を探し、それを実践することは当然である。ただ、それを実現する過程と手段に差異が生ずる。指や手を、生身の手で引き剥がすこともその手段であろうし、近くの板切れを引き寄せてそれを差し出すことも方法であろう。そこに残忍性が露出するのは、すがる手を軍刀で切り落とすからである。つまり、他に方法がなかったか、それを行う前に、ある発見力や視点や能力が存在しなかったかというところが問題になるように思える。短絡的に邪魔な手を切り離すと言ふ発想の貧困さが、当時の人間力の低い軍将校の一面を表してはいなかったかという推論である。一瞬を争う危機に、他の手段を探すようなゆとりを持つことは無理であり、切羽詰まれば誰でもそのような軍刀を用いる行為に走ることは容易に想像できる。しかしすべての将校がそうした行為を取るとは限らないようにも思える。中には、転覆したら仕方がない、

船に乗せられて出ていくとき、敵潜水艦の攻撃を少しでも避けるためにジグザグに運航するのだが、それでも魚雷攻撃を受けて沈む船が出る。冷徹なのは、その沈む船に対して何ら救助の手は差し伸べられないことである。見殺しにするしかない。停まつて救助したりしたら、自分が魚雷を受けて撃沈されるからである。

また以前「まほるば賞」特別賞を受賞した梶川洋一郎氏の「雲の向こうのメモントモリ」という小説の中には、原爆の落ちた日、憲兵が川に発動艇を繰り出す話が描かれている。川には死体が無数に浮き、さらに水を求めてたくさんの被爆者が入っている。「水を」「水を」の群れである。憲兵が発動艇を出そうとするが、無数の手が伸びて、すがつてくる。動き出せない。捜索が任務のため、邪魔になる手を靴で蹴るが、後を絶たない。いくらやってもキリがない。ついに軍刀で斬りつけた……そんな気もする……という小説である。原爆の残忍さの分、こちらはさらに悲惨であり、手段を選ぶ余地も乏しい。

「見殺し」と、味方を救わずに逆に殺す「加害」は、こうした状況での行為を考える大きな文学テーマとして、もつと本格的に向かい合うべきものを蔵している。

もう一つ読み応えがあるのは、長岡由秀氏の「生麦の滴」と言うエッセイである。これはエッセイの域を超えている。生麦事件で犯人に仕立てられた侍とその家族を追っ

人肖像

190号



人間像同人会

みんなできつしよに死ぬのもいいだろうと観念する将校もいないとは限らない。他に手段を求める視点を持つか持たないかは、重要で、戦場での指揮の成否はその柔軟な視点によって大きく変わるのが普通だからである。米軍なら軍法会議にかけられ、処罰されそうではある。結局は日本軍の思想と教育の貧困に迫り着くとも言える。

また、軍刀で切り落とすのが残酷なら、手で引き剥がすのは残酷ではないのか、靴で踏みつけ、蹴り落とすのとどう違うのかという差異も当然問題にならなければならぬ。要は、吉村昭の小説も、その残忍性だけを前面に出して、そこに第一の感興を持つてくることに違和があると思う。

もう一つ欲しい点は、戦争全体からその状況を比べ見る視点である。戦争では、それに近い状況、それ以上の状況は頻繁に起きる。私が聞いた話では、南方の最前線に輸送

ての記述には、執念の軌跡を感じるし、それと並んで取材を進めた「袴田冤罪事件」の衝撃性にも、因縁のような関わりを覚える。事件や疑惑を追つての衝動は、昔くことへの何か宿命的な因果を感じさせるまでに強く響く。これを駆り立てるものは何か——死や空間を超えて漂うもの存在を想像せずにはいられない。それを想わせるだけの強い筆致がここにはあり、文章の存在根拠の一つを窺わせる。

今回は一つに集中し脱線したきらいがあつて、林揚作品は少なくなつたが、まとめたい。

優秀作

「しずり雪」 小網善美 「飢饉祭」46号

推薦作 評論・エッセイ

「覚悟という定点」坂口安吾、金子光晴そして観阿弥

原浩一郎 「文芸エム」創刊号

「軍刀による殺傷事件の真偽をめぐって」大城丸道雄

妹尾雄太郎 「人間像」190号

「生麦の滴」 長岡由秀 「人間像」190号

準優秀作

「カミュ」誤解」、サルトル「出口なし」、その源と将来

林相堂 「文芸エム」創刊号

(全国同人雑誌振興会／五十嵐勉)

全国同人雑誌評

●「中津川文芸」(岐阜県) 復刊5号

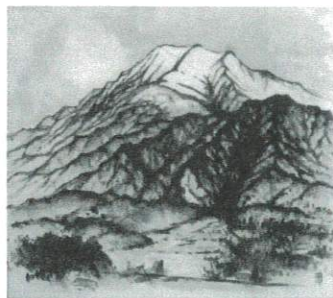
「中津川文芸」は四〇年ぶりに復刊したと言う。編集後記にあるように、「まだ消えずに残っている櫓火ほたびのような文学に対する熱情」が流れている。短歌や詩、小説、戯曲だけでなく、訳詩や映画、音楽に触れる文章もあり、ふくやかな奥行きを持った誌になっている。長野県に隣接する中山道旧街道の宿場町の歴史を反映して、それらを文章に表す「私の好きな場所」の特集を組んでいるのも趣きを添えているし、人口八万の中津川市における「中津川の俳句の変遷について」(太田光子)など歴史を辿り、過去を大事にする姿勢も情緒を深めている。これらを支える主宰の(仕掛人とあるが)田中伸治の情熱と包摂力に高いものを感ずる。

これらを反映して、「夢の岸」(鴨居諒)も、味のある短編としてこの世のはかないおぼろさを映出している。夢の池に浮かぶオールのないボートの像から始まって、いつの間にかどこかへ行ってしまった娘の人形、台風が吹き荒れる竹藪の、招くような誘い、成長しない芍薬、人の声を聞いてその言葉に危機を感じたように咲き始める椿など、

の防空壕の記憶やドライアイスを通して、髪細かく描いて胸に残る。佳品としての好短編である。ドライアイスが最後まで生きていく。準優秀作。またエッセイの「角島へ」(三原后代)も傘寿の仲間旅行を、よく人生を振り返りながらその深い味を散りばめつつ、滋みを匂わせている。「ハーンの横顔」(佐藤弘二郎)も、来日したものの、異国の風土や社会に生活が追い詰められていたラフカディオ・ハーンの状態をよく汲み取り、おノブという伴侶を得て、日本の心の中に沈潜して、名作を生み、文学を残していく過程をよく刻印している。巻頭の「わけあつて飼うことにことになりました」(耽羅沢楯)は九〇枚ほどの力作で、アパレル商品の販売に従事する現場の格闘はよく書かれていて、その忙しい競争の生活の中で犬を飼い始めると、

中津川文芸

特集・私の好きな場所



2020.秋 復刊 第5号

自然の不思議な様相が夢と繋がり、またボートに還つてくる。確かにこの世には、夢に繋がる現実があり、夢と現実が溶け合っている不思議な生命のあわいがある。夢からの転位と夢への転位が自然に行き来している場があり、それがこの世の奥には滔々と流れている。神秘でもあり、それが生命の裏の相をも映しているのかもしれない。こういう世界を描き切るには、文章に対する繊細な技量が必要で、磨かれた表現力がないと実現しない世界だろう。この技量と感性に対して、優秀作に推挙したい。

●「てくる」(滋賀県) 27号

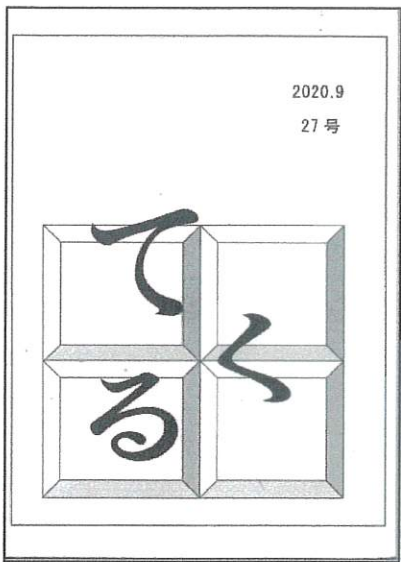
単色のあつさりした表紙だが、現代的な日常の中にそれを生かしながら振り所を見つけていくスタンスはしっかりとっている。文章を書くと言うことの意義の確かさが感じられる。

「ドライアイス」(安海泰)は、父親の死の別離を、戦争

意外に物事が好転していく不思議な世界を描いている。犬との散歩の世界によって、ゆとりが生まれ、発想が豊かになって、会社の競争世界を切り抜けていく過程はおもしろく流れていくが、肝心の犬の姿がほとんど出てこない。犬のかわいらしさや姿が描かれていないところに大きな欠落が感じられる。しかしその犬が晴天を呼ぶという明るい発想は爽やかでいい。時間が飛びすぎて、その犬の成長していく姿や老いていく姿が何もないのも寂しく、その犬が死んでからの後半のハクという別な犬の話も、あえて繋げる必要はなく、別の物語として独立させるべきだが、動物が激しい競争社会の中で癒しになり、人を和合させる力がある着眼は、すがしいものがあつた。主人公の名前が凝りすぎ。

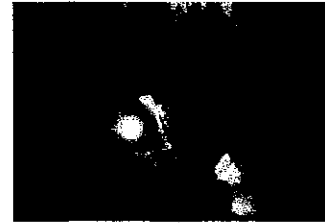
●「仙台文学」(宮城県) 95号・96号

「仙台文学」はいよいよ一〇〇号に近づいてきて、顕彰すべき時機にあるが、95号・96号に分載された「キツネピ」(渡辺光昭)は、重い陰影を曳いていて、引き込まれた。いつもバス停で人に順番を譲って見送る奇態な行動を取る人物に引かれて、家まで後を付けていき、世から捨てられた仔まいの家と生活を目にするが、それが一方で、精神を病んで死んでいく伯母と重なる。伯母は勤め先で心を壊して放火癖を持つようになる。その放火の残像がキツネピ(狐火)となつて、主人公の周囲を揺れ動くようになる



2020.9
27号

仙台文学



95

る。病院で孤独死した伯母の密葬を終えて日常に戻った主人公は、バス停の「譲り男」の存在がないことを知る。そして以前行った男の家を訪ねると、それは数年前の廃墟としてそこにあり、崩壊感に襲われる。そこにキツネビが揺れ、自分が誰かから後を付けられる立場になって、そばに動物のにおいを感じるところで終わる。よく練られていて、ある深さに到達しているが、バス停の「譲り男」がリアルに描かれて存在感を持っているので、結末でそれが過去の残影の中に一気に押しやられてしまうのは、残念な気がする。読者の胸の底には伯母の放火癖が深く残る。それゆえその家と「譲り男」を過去の幻にするよりは、伯母の死の前後に、その家が火事で焼失してしまおうとした方が、ストーリーとして盛り上がっただろう。その方が伯母の怨念が生きたのではないか。優秀作には違いない。直した上で評

価をさらに求めてもいい。

●「じゅん文学」(愛知県) 104号

「破れ蓮」(飯田芳)は衝撃的な作品である。文章はやや粗いが、母殺しのテーマは重い。農業が嫌いな「私」は、父親の戦後の遺族年金を受け継いだ母親の年金に頼ってパチンコに明け暮れる生活を送っている。かろうじて結婚して子供もいるが、母親の認知症が進むにつれて、妻の負担が大きくなり、結局堪えきれずに、子供を連れて家を出ていく。一人で介護し切れない過重から、生活はいっそう破綻していく。結局田圃を這いずり回って泥だらけになった母の体を洗いながら、憎しみに殺意が重なって湯船に溺れ死にさせていく。その死体を蓮の池に埋める。そして結局母の死体を確かめに蓮池に入って自らも泥に沈んでいくと



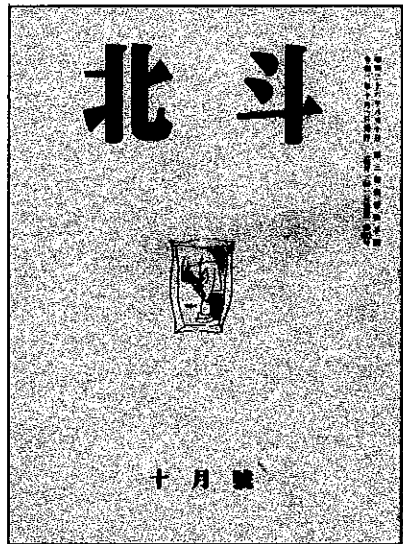
かされることの多いカナダ回想記であり、有益な上に、発想転換のいいヒントに満ちている。

また「時代」について(2)姜尚中『朝鮮半島と日本の未来』を読みながら(町井たかゆき)も、豊かな体験に基づいた鋭い批評を展開している。「元東大教授もこの程度のものかと少々気落ちした」「この本自体は物足りなかった」と率直に言うに留まらず、「姉の亭主が北朝鮮の元山の生まれ」という体験や仕事を通して日本と韓国の間にある軋轢を探り、アイルランドにまで話を飛ばして、近接国家の格差の存在にも原因を求めていく。豊かな経験を素地にした論究の翼はおもしろく「文明の格差」は説得力があり、その壮大な展開に魅力があるものの、現在の韓国

「文学街」が終刊となった現在、毎月発行されている同人誌はこの「北斗」と、熊本県の「詩と眞實」だけである。月刊の苦勞は、並大抵のものではないはず。大いに称揚されていいと思う。

●「北斗」(愛知県) 671号

この号は、エッセイや評論に鋭利なエスプリを感じた。「カナダ回想記(二)——日本への教訓——」(池田龍一)は、五十年前のカナダ滞在の記憶を元に、国や風土の違いを的確に捉えながら、日本への教訓として生かす筆を運んでいる。文化や慣習の違いに触れるだけでも、日本の当たり前と思っている日常が異なった光で照らし出され、新たなヒントになる外国滞在記にはおもしろく、有益なものがあるが、その違いを明確に照らし出して、それを咀嚼し吸収させて新たな知識の糧とするには、それを記す人の見識の高さや認識力の深さにかかっている。その意味で、領



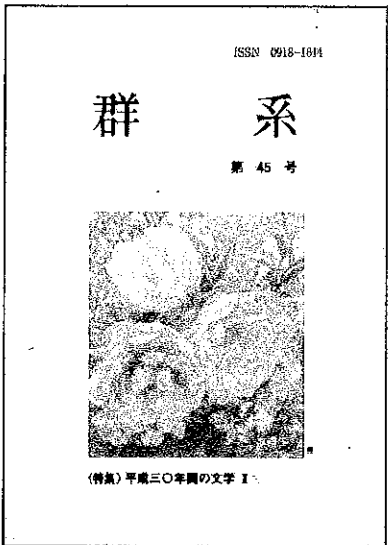
が次から次へと問題を出してくる原型が江戸時代の「朝鮮通信使」にあり、現在も「排日」に熱心なのは、日本の支配期に機械や制度などの文明を鮮やかに導入したことに嫉妬している姿なのかもしれないという結論部分は、違和感を覚える。秀吉の朝鮮出兵も抜けているし、国を併合された者の痛みも蓋をされている上での言葉は、韓国人が読んだら反駁されるだろう。もし日本の支配がなかったら、朝鮮戦争は起こらなかったというところまで想像を及ぼせる必要があると思う。

●「詩と眞實」(熊本県) 857号

「詩と眞實」も毎月発行しているのは、感嘆する。今号には力の入った小説が二篇あった。「M坑のハト」(まえだ



かずき)と「アムール」(今村有成)である。「M坑のハト」は廃坑を国史跡として管理する者を軸に展開していて、現在(おそらく三池炭坑跡と思われるが)廃坑はこのようになってきているのか、とあらためて興味をそえられる。ここにハトが果食って糞害をもたらす。この処理に悪戦苦闘する話で、しつかり書かれている分おもしろく読めるが、現在の観光状況を主体に描いているので、もう一つ炭坑の歴史や当時の地下坑内の現場の凄さが伝わってこない。地下二六〇メートルまで降りて石炭を掘っていたという、地獄と隣り合わせの世界の片鱗は説明としては窺われるが、ここにしっかりと回想を施して実際の現場のシーンを蘇らせたなら、もっと重量感のある作品になっただろう。こうした過重な労働が戦前、戦後の日本の工業発展を支えていたはずで、筆がその現場の凄まじさにまで及べば、迫力あるものになっただろうと、惜しまれる。しかしそれを窺わせるだけでも、書いた価値はある。準優秀作。もう一篇の「アムール」は六〇年安保の時代で喫茶店「アムール」を舞台に展開される青春物語であるが、恋愛に労働運動や安保の政治状況も絡んで、当時の息吹がかなり伝わってくる点に、生きている脈動感が伝わってきた。小説として成立しているかは微妙なところではあるが、確かに昭和三十年代の世界は生きている。その息づきには共感を覚えた。



●「群系」(東京) 44・45号

いつもユニークな評論特集を組む「群系」は「平成三〇年間の文学」をI・IIにわたって特集していて、平成に活躍した作家をほぼ網羅して平成文学の輪郭を得ようと試みている。それぞれの作家の特徴は捉えているが、全体として平成の文学像が浮かび上がったかという点、模糊としてもう一つぼんやりしたままに留まっている。むしろその中にある「私説・平成の芥川賞」(星野光徳)の論評が、平成以降の文学の本質を突いていた。昭和の芥川賞作品の魅力をあげて、それらと対比しつつ平成の芥川賞作品の内質の衰えを指摘している評には説得力があり、現在の不毛な文壇状況とそれに繋がる文芸出版の本質を抽出している。推薦作。

今回の称揚作品をまとめたい。

優秀作

- 「夢の岸」 鴨居 諒「中津川文芸」復刊5号
- 「キツネじ」 渡辺光昭「仙台文学」95号・96号
- 「破れ蓮」 飯田 勇「じゅん文学」104号

推薦作

- 評論「私説・平成の芥川賞」(星野光徳)「群系」45号
- 準優秀作
- 「ドライアイス」 安海泰「てくる」27号
- 「M坑のハト」 まえだかずき「詩と眞實」857号

(全国同人雑誌振興会/五十嵐勉)



●「ざん」(北海道) 24号

中井ひろし氏の「ひき逃げ」は、満場一致で「まほろば賞」に当選した前作の「キリギリス」に続く作品だが、車社会の現代における差し迫った問題を扱って、一気に読ませる重みがある。闘病の母親を病院に抱えながら運送の無理を引き受けて深夜の激しい雨の中を疾走する主人公の前を、女性が通り、それをはねてしまふ悲運と、それによって職をはじめ全てを失う心理のプレッシャーから、山の中を逃げ惑う主人公の内面は、よく描けている。普通は、人をはねてしまったその罪悪感と、警察から逃れるひき逃げの圧迫感とだけで一篇の小説になるが、この小説はそこに留まらず、第二次の問題を展開させる。崖から落ちて山に住む一家に助けられるものの、助けた老人は「はねられたのは自分の娘だ」と言う。しかもその娘には、交通事故で足を失った子供が、その少女が母親である被害者の女性にあたり、攻め続けたことから、母親はむしろ自殺に近いかたちで車に飛び込んだと告白される。少女の「自分が母親を死に追いやった」とする言葉と、少女の深い罪の覚醒に触れて、主人公は自首を決意し、山を下りるといふスト

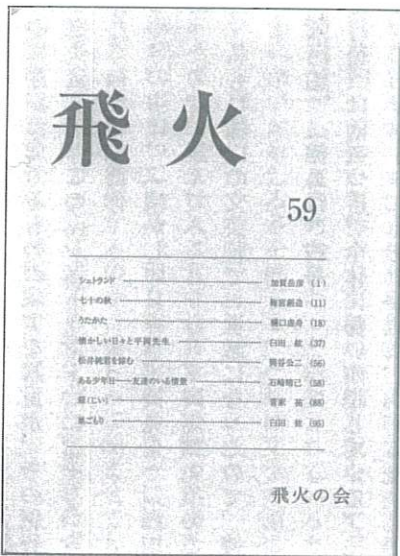
ーリーである。

大きな問題を孕んでいることはわかるが、多くを持ち込みすぎて、扱いあぐねた面が窺われる。もともと「ひき逃げ」には、現代の一断面として大きなテーマ領域があり、この一瞬の事故によって被害者も加害者も人生が変わってしまう衝撃性と深淵がある。これに正面から取り組んだ作品を知らないが、これだけでおそらく数百枚にはなるテーマが潜在している。中井氏は、これにさらに被害者側のドラマを持ち込んで、母子の運命の中で足掻く葛藤にまで問題を広げて文学的解決への道を探っている。後半にあるのは、足が不自由になった少女と母親との未来への葛藤であり、それはそれともう一つ重いテーマが存在するのであって、簡単には加害者のドラマと和合しないものだろ



80

う。これだけで、また数百枚を要する大きな人間の問題である。どちらも長編小説の素材であり、あまりに重いテーマである。挑戦の意欲は買うが、これが真に作品として成立し、結実するのは、ボリュウムと技術とを伴った長篇小説としてであろう。むしろ現代的な手法としては、運転手の側を病気の母親を含む時系列として事故まで描き、同時に並行させて、少女あるいは母親の側を事故まで交互に追いつめていくように描き続けていくことで、運命の火花はもっと強烈に破裂するのではないだろうか。またもしここまで描き切れれば、その決定的運命の交錯から、それぞれがどのように立ち直っていくか、あるいは飲み込まれていくか、第二部も書いていける可能性も出てくる。こういう長篇の素材は、しばらく寝かしておいて、技法や、テーマ



全国同人雑誌振興会

の把握を深めながら、じっくり取り組んでいくことが必要だろう。今のままでも推薦作の価値はあるが、それをする」と長篇の素材が育たない。何年かけてもいいという腰の座った姿勢が長篇には必要である。

●「飛火」(東京都) 59号

この誌は装丁らしい装丁もない素っ気ない姿であるが、知の高い匂いは満ちていて、余計な飾りなどいらないういう矜持も感じられる。確かに、文章はどれも職業の慣れた練りと緻密さがあって、大学の研究室の空気のような濃密感がある。そのような空間から出る風通しのための捌けた流れが、これらの文章を特色付けている。

巻頭の「シエトランド」(加賀岳彦)は、イギリスの北の海の風景と気分をよく伝えていて、優れた紀行文になっている。淡々と綴られる旅の歩行と練り広げられる風景は、イギリスが背後に背負う風景を確かな手触りで引き寄せていて、彷徨と寂寥の旅の感覚の上に、風土の陰の匂いを醸し出している。なるほどこれがイギリスの北の相貌かと、あらためて「リア王」や「嵐ヶ丘」の情景が重なってくる。

優れた紀行文は、世界を開示してくれる。それは、詩や小説以上に、直接世界そのものに向かい合い、未知からの問いかけに晒されるからだろう。旅という一つの赤裸々な孤独の中で、否応なくこの世界とは何か、出会っているこの現実とは何か、対決を余儀なくされる。世界と自身との応

80号

答の中に浮かんでくるものの誠実な邂逅が、その紀行文の深さを決定する。この「シエトラランド」にはそういう香りを感じられた。推薦作。

この号の中に、「懐かしい日々と平岡先生」(白田敏)とあったので、読んでみるとやはり平岡篤頼先生のことだった。私も早稲田の文芸科でお世話になったので、懐かしかった。

●「飛行船」(徳島県) 27号

「飛行船」は活気づき、全体に勢いが増している。二一四ページのボリュームにもそれが表れ、内容も充実している。巻頭の「かすがい」も、主宰者の竹内菊世氏の旺盛なエネルギーを象徴して牽引力がある。内容は、詩の同人誌の世界での強力なリーダーシップを持つ男性の内幕を描きながら、不思議な魅力で、読ませていく。ある面では雑誌の成立する宿命的な側面であり、人の集まりであるものの、その背後に隠れた生臭い傷を伴いつつ、奇妙な人間同士の寄りかかりを表出し、描き切っているところに爽快感がある。けっして陰湿にならず、宿命やしがらみを明るく描ききるところに筆者の良質な個性がある。文章に弾力があり、竹内氏健在を感じた。推薦作。

また松田一美氏の歌人・塚本邦雄の足跡を追った「詩魂凜々」も、気合の入った力作で、傾倒した師への強い哀惜に裏打ちされて、他では見られない入魂の追悼になっている。

ムを作っていて快い。タイトルもセンスが感じられる。

巻末に「募集小説優秀作」とあり、若手の作品が二作掲載されている。これは編集後記によれば、「『小説募集集中』と大書したチラシとポスターを作り、県内文化施設に置いてもらったところ五篇の小説が寄せられた」という。その中の優秀作二篇を掲載したとのこと。うち一人は二十代という。「やってみるものだねー」の一言が、現在の「飛行船」を象徴している。

●「木木」(佐賀県) 33号

この号は、「追悼／藤崎伸太先生」が組まれていて、いくつかの偲ぶ文章が並んでいる。こういう追悼がなされること、誌の結合力や労りを感じさせる。隠れた魅力でもあるだろう。読むと藤崎伸太氏は、海軍兵学校の卒業生。最後の生徒であったように想われる。その厳しい訓練に培われた強靱な肉体と精神が、医師への道と重なって、最後に「人生、いろいろあらあーね」と結語されているところに、奥の深いおもしろさを感じる。それは文学の源に繋がっている。

この号には前のまほろば賞で注目された木山葉子氏新作「水水母」が載っている。別な題材をどのように扱い、どのような文章力を発揮するのか、楽しみに読ませてもらった。期待に違わず、その文章を紡ぐ力には堪能させられた。粗筋は結婚直後に夫の膨大な手紙を見つけ、その相手

る。塚本邦雄の歌への熱情やその精神世界もよく穿たれ、また自身の青春時代の苦闘にも立脚していて、師の歌との共鳴がより深く響き合っている。これは歌人に身近に接した経験と、深い傾倒に基づいた哀悼がなければできなかった哀惜の作品だろう。また、このようにキリスト教や聖書との深い交わりを負った短歌であることは初めて知り、宗教の底にある苦悩の影を伴ったものであることが深く認識された。宗教短歌をも可能にする奥の激しさが浮かび上がって、塚本邦雄という歌人の影りを深めている。後半、やや単調になり、起伏が乏しくなって疲弊感が出てくるのは、書く時間に迫られて、推敲が足りなかった印象がある。推薦作。

「桜雨」(渋谷政子)は歯切れのいい短い文が一つのリズム

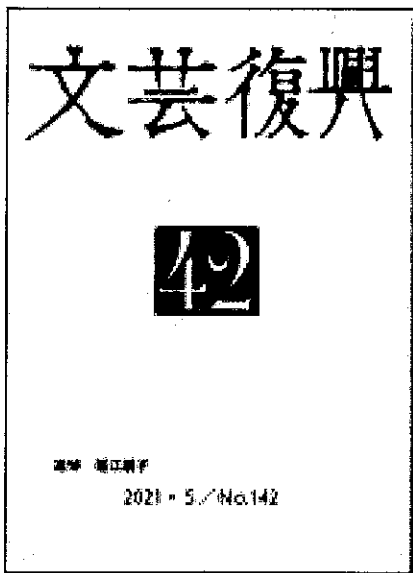
が一つ年下の異性からであることに、夫婦の間の溝のようなものを覚え、その違和感にずっと苦しめられるという流れである。夫はその手紙を処理せずいつまでも残しておく。しかもその手紙の奇妙な点は、愛情の告白というよりも、ただ出来事を淡々と報告するその記述性にある。夫は高校の同級生などの付き合いを今でも大事にし、現実には付き合いが続いている。しかし、その人間の輪からは主人公は拒まれ、疎外感を抱き続ける。その奇妙な違和感が水母に象徴されて、最後に水母の群れの干上がった死骸への情景に結びつく。これによってもう一度夫との関係がやり直せそうな気持ちを抱くという結末である。優れた文章力は「大きく湾曲した入り江が、村を囲うように潮を湛え、波

骸が輝いている」とか、「死んだ魚の目のような、どんよりとした絵里子の目が、彼の手の動きを空に見ている」などにもよく表れている。蚤が白糸を吐き出すような美しい紡ぎを再確認する。

ただ、今回の作品には、不思議に思われる点が幾つかあり、読み終わってそれが払拭できないもどかしさも残る。手紙によって違和感を覚えながら、夫婦の生活はなぜ続いているのか、夫が高校の仲間をどうしてそこまで大事にするのか、その秘密の部分は明らかにされない。高校の仲間ではないのかと夫の輪郭が歪む点に、小説としての立脚性が薄弱になっている。またこう言う夫婦のあり方で何十年も保てるものなのか、リアリティに欠ける気もする。また、「水母」が何の象徴であるのか、気分的にはわかったような気もするが、もう一つ判然とせず、どう夫との関係に繋がりが、過去とどう結びつくのか曖昧なままの感じがする。それを「味」であり、はっきり言わないところがいいのだともいつてしまえるが、小説作品の結晶度とすれば、もう一つ説得して焦点を結んでほしいとも思う。違和感があくまで高校時代の過去に根差し、現実の夫婦間の具体的な問題には波及しないことが、リアリティを遠くしていることに繋がっているのかもしれない。またタイトルも「水」が重複しているの、なぜ「水母」だけではいけないのか、

していたが、丸山修身氏が引き受けられたようで安心した。存続を喜ぶたい。

後半に森下征二氏が鎌倉時代に材を採った「『渡と袈裟』に衣川」を載せているので、興味深く読んだ。源頼朝に挙兵を決意させた僧、文覚の発心の契機となった話を展開している、実におもしろく、様々な角度から推理していく手際は、鮮やかである。もともと男女のことにベースがあるの、それだけでも引き込まれる。美しい人妻に横恋慕する武士が衣川という自身の叔母を脅迫して、娘であるその人妻を呼ばせて一夜を共にする。人妻は不義理をした罪悪感で、夫を殺す奸計に紛れて自らを武士に討たせる。妻自身が死を選ぶこの貞操美談が「源平盛衰記」にある元



全国同人雑誌振興会

疑問が残る。いずれにしても、優秀作にはちがいない。

林絹子氏の「盜癖のある女」は、タイトルからして興味深い上に、二百枚を超える力作である。カラオケコミュニティの内部の男女の陰湿な内幕を暴くように読ませ、実態のリアリティに傾かせられる。現代では、一定の主婦層の普遍的な実態に迫っているとも言えるが、救いが見つからない閉塞感も伴う。「盜癖」が月謝袋からお金を抜き取る男女の仲の代償としてすり替わるところに、「盗む」罪悪感が薄らいでしまつて、男女の腐蝕感になり変わってしまったう恨みがある。林氏は本来もつときれいな文章だったように思う。準優秀作ではあるが、林氏が本来書くべきものは他の領域にありそうな気もする。

●「文芸復興」(東京都) 42号

この号は「追悼／堀江朋子」の特集が巻頭になっていて、哀悼が全面に押し出されている。ちょうど一年前に「文芸復興」の同人誌紹介を書いていたので、大著「三井財閥とその時代」を贈っていたので、まさかこのように早くに逝かれるとは、夢にも思わなかった。追悼号には死因が明らかにされていないので、どのように逝かれたのか、空白感が残るが、「三井財閥とその時代」のような大きな史録は今後現れないだろう。これだけでも大きな業績である。氏の筆跡は、壮大なロマンに彩られているように思う。冥福を祈りたい。「文芸復興」の今後がどうなるのか心配

の話である。しかし筆者は中国の昔から伝わる話と比較して、その不自然さを指摘し、様々な角度から実相に迫っていく。元の中国の話は、戦地に長く出ている留守の間に女房が他の男とできてしまい、邪魔になった先夫を殺すというものである。これを下敷きにして、貞操の妻ではなく、女性の淫蕩性を前面に持ち出して、三角関係を通して洗い直す。確かにこちらの方がありそうな話である。戦いに赴く夫の留守に他の男とでき、さらにそれが女性の性の欲求と重なった場合のもつれの方が、死を選ぶ貞操美化よりもリアリティがある。筆者は「袈裟」というこの人妻の中に女性の淫蕩性を露出させ、それから来る三角関係の泥沼を暴く。それは筆者の推論の鋭さを示すものではあるが、ここまで近代リアリズムに基づいて想像を膨らませるのであれば、伯母の淫蕩性をも巻き込んで、文覚の前身である武士は、二人に関係していたという推論も成り立つかもしれない。一方、確かに寝取られた夫の側の態度も不自然である。普通は妻を寝取られたら、報復しようとするのが男である以上、その姿勢を最初から放棄して悟りきっているのもおかしい。とすれば、妻のこの淫蕩性に最初から愛想を尽かしていたようにも取れる。文覚の出家の動機は、この性の泥沼から抜け出すためにその根源である女の首を切ったとするほうが、自然かもしれない。「源平盛衰記」の美談は、文覚の出家そのものを美化するための脚色が施され

ているようにも受け取れる。準優秀作。

「闇夜」(櫻井幸男)も好短篇で、破綻した銀行の事後、様々な怨恨の交錯する中で、人生を振り返る影りの深い陰が味よく揺曳している。これも準優秀作としたい。他にも力のある書き手が揃っている。

●「南風」(福岡県) 48号
この誌の書き手はみな技量が高く、誌全体のレベルが高いものになっている。

「骨が哭く」は、まほろば賞受賞者の和田信子氏にしては大胆なタイトルだが、これくらいの言葉を遣わないと、埋もれてしまう危惧はある。骨の痛みの経歴を遡りつつ、夫との過去の思い出や別離を並べて、晩年の病院生活まで描く骨を軸にした変遷は、飽きさせずに、快い流れを作っている。これは筆者の現実を冷静に見る態度と運命やなりゆきを素直に受け入れる受容の豊かさに裏打ちされて、流れが自然な変遷の色合いを帯びているためだろう。高揚や驚きがむしろ抑制され、慎ましい受容の織物の綾に変えられていく。和田氏の文章の魅力は、その綾織にあるのであって、けっして起伏の激しさやドラマチックな盛り上がりにあるのではない。緻密な隠し織に込められたきめ細かな感情の秘匿にこそ魅力がある。すでにまほろば賞受賞者であることで、控えてもらって推薦作。

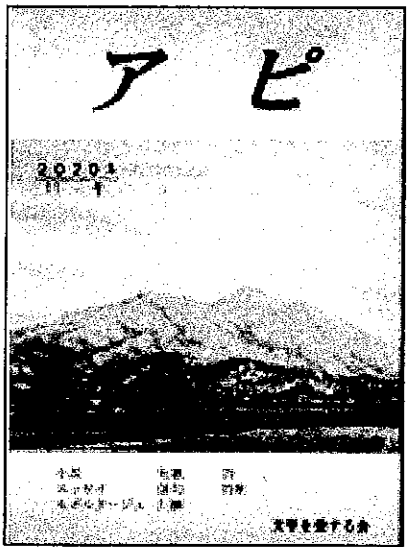
「鴉」(紺野夏子)は、失踪した父親を最晩年に訪ねて、

子」のモノローグによるデュエットだが、斬新に見える手法が成功していない。手法の必然性が希薄で、事件の深刻さが逆にそれで流れてしまっている。

「あぐりさんちの丑三つ刻」(宮脇永子)は、軽妙で出だしにも才を感じるが、軽妙さが消って「三笠山」の短歌が出てきたり、親鸞上人の歌を引いたりするのは、破調をきかしている。軽妙さはあくまで武器に使うことを徹底しないと、テーマそのものが浮薄に流れることを警戒すべきだろう。

●「アピ」(茨城県) 11号

「文学を愛する会」による小説・詩・短歌・俳句・川柳・ルポルタージュの同人誌だが、三島由紀夫の死を主流にした小説「輝きの夏」(宇高光夫)は、市ヶ谷の自衛隊本部



その別離の人生を問い返す小説である。すでに末期癌で入院した父親はその住まいに住んでいず、鴉が近所を飛び交っている。大家さんにいろいろ話を聞いて父の暮らし振りが蘇ってくるにつれ、その鴉と親しくしていた父親の姿が浮かび上がってくる。鴉と仲良くしていた父のその姿の中に、孤独な人生の道が遙かに繋がりが、その愛惜がこみ上がってくる結末になっている。鴉がうまく生きていて、鴉の孤独までが匂ってくる。ありふれたタイトルなのが少し気になるが、一つの人生の姿はよく象徴されている。父親の人生を追いながら、同時に自分の人生の末路に繋がっているような気配がある奥行きがいい。優秀作としたい。

巻頭の「どうもしない」(田中青)は「次郎」と「どう

で決起した三島をルポ風の叙述を交えて活写した筆致には迫力と生々しさがある。そのときの衝撃の生々しさがよく伝わってくる。

また「日本百名山から国内三千メートル峰登頂までの軌跡」を記した「神々の座への憧憬」(宇田三男)は登山記録を細かく記した実に貴重なもので、読むべき、また残すべき価値を感じた。貴重な記録であり、同人誌だけでなく、広く一般にとっても意義のあるものだろう。インタビューなどに長期保存しておくのがベストな気がする。

今季をまとめ。

優秀作 「水水母」 木山葉子「木木」 33号

推薦作 「かすがい」 紺野夏子「南風」 48号

「詩魂凜々」 竹内菊世「飛行船」 27号

「シエトランド」 松田一美「飛行船」 27号

「骨が哭く」 加賀岳彦「飛火」 59号

「渡と袈裟」に衣川 和田信子「南風」 48号

準優秀作

「闇夜」 森下征二「文芸復興」 42号

「盗癖のある女」 林 絹子「木木」 33号

「盗癖のある女」 林 絹子「木木」 33号

「盗癖のある女」 林 絹子「木木」 33号

(全国同人雑誌振興会/五十嵐勉)